

川柳塔



No. 896

同人特集・私の一句

一月号

予告

◎テストケースとして厳冬期の本社句会を次の通り変更します

一月十五日(火) 午後一時〜五時

二月 六日(水) 午後一時〜五時

何れも締切りは二時半

アウイーナ大阪 四階 金剛東

◎川柳塔九〇〇号記念川柳大会

五月四日(土) アウイーナ大阪

◎第26回 全日本川柳二〇〇二年沖縄大会

六月九日(日) 沖縄ハーバービューホテル

◎第八回 川柳まつり

十月六日(日) アウイーナ大阪

◎国民文化祭・とっとり 2002

十月二十六日(土) 鹿野小学校 体育館

■新刊

高杉鬼遊川柳句集

序文―橘 高 薫 風
四六判・二五四頁・上製
頒価 二〇〇〇円(送料共)

消えるから雪は刹那を淨く舞い

水死体 時計は防水自動巻き

如月や江下 北川 作江たち

三八銃わが青春は弾丸の下

核のない夜明けを鳩は待っている

吉兆も飲み屋も同じ靴でゆく

今日はではさようなら風になる

◎お申込みは川柳塔社事務所へ

発行所 川柳塔社

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町二一〇一―一六
ウエムラ第2ビル202号室
電話 〇六・六六二九・六九一四番

謹賀新年

河内 天笑

あけましておめでとうございます。

新世紀のはじめの年に、それも十二月一日という2001年の締めくくりの月に、皇太子ご夫妻に内親王様がご誕生になり、日本全国よろこびに沸きました。皇室は勿論のこと、私たち国民も八年間待ったお子様のご誕生とあって、テレビニュースの映像に引き込まれての師走の入りでした。

十二月八日にご退院をされて東宮御所へお帰りになりましたが、いつも優しく付き添って居られる皇太子さまには感動を、そして、とてもお元氣な笑顔の雅子さまは安心を与えて下さいました。それにも増して愛子さまのあのお可愛らしいこと。天の岩戸が開いたように、日本国中をぱっと明るく照らして下さいました。ひたすらにすくすくとお育ちになられることを祈るばかりです。鹿児島のある焼酎メーカーの「愛子」という銘柄に注文が殺到し、二、三日で半年分も売れ

たというニュースも耳にしました。

「敬宮」「愛子」の御名は孟子語録から引用され、皇太子ご夫妻が強く御要望されたこともお聞きしましたが、何という親しみのあるいいお名前でしょう。この御名にあやかる赤ちゃんがたくさんでさると思います。ちなみに、私の知ってる愛子さんともとても可愛いお方です。

ここでちょっとした「突っ込み」が脳裏をかすめました。私自身八人兄弟の末っ子で、賑やかに育てられました。つまり怒鳴られたり叩かれたり、時には嚇されたり、また、欲しい物を買ってもらえなかつたり、終戦前後はひもじい思いもして、幼少期を遣りすこした記憶と原体験があります。

手を汚しながら大人になってゆく天笑の句のように、大人になってゆく過程に於ても、きれいな事では済まされぬ幾多の経験をしなければならぬのは、皆様方もよくご承知のことと思います。実際、ひとに冷たくされたり、友達に裏切られたりしなければ「痛み」は経験出来ません。この「痛み」を知っていてこそほんものの優しさやいたわりの心が身につくものと私は信じています。

ならば宮中ではどうでしょうか。想像に過ぎませんが、怒鳴られたり殴られたり、意地悪されたりなどは先ず無いでしょう。嵌められたり裏切られたり等も考えられません。当然の事ですが、私達とずいぶん異なった成長過程を経て成人されるわけです。それで味のある人間形成がちゃんと出来るかどうか、川柳がつけれるのだろうか、などと考えると少し不安にもなります。「あんな、そんな事心配せんで宜しいワ、一般人とは違う苦勞もいっぱいあるやろし、教育する人もちやんと居はる」と妻に一蹴されました。年のはじめから凡愚がたわごとを並べまして申し訳ございません。

今年は五月に「川柳塔九百号」という大きな節目が巡って参ります。六月には沖繩本土復帰三十周年に当たり、全日本川柳協会の沖繩大会が催されます。そして、十月六日の第八回川柳塔まつりに続いて、十月二十六日には鳥取県鹿野町で第十七回国民文化祭が開催されます。既に各大会の準備は周到に進められて居り皆様方の参加をお待ちするばかりです。ことしもたくさんの会に参加してお互いの元氣を確かめ合ひましょう。



座右の句

おれに似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

一人でも独りではないみな優し

安芸田 泰子

川柳塔 一月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 謹賀新年	河内天笑	:(1)
金婚式を迎えて	宮口笛生	:(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	:(4)
自選集	板尾岳人選	:(54)
水煙抄		:(59)
国民文化祭・ぐんま2001開催		:(87)
敬宮愛子さま御誕生を祝す		:(88)
麻生路郎物語(1)	(傲)東野大八	:(94)
■特集 お正月	木村あきら・榎原公子・出口セツ子・富田蘭水	:(98)
	田中笑子・小西雄々・井上桂作・大橋政良	:(98)
愛染帖	波多野五楽庵選	:(103)
私の一句(同人特集)		:(106)
■句集紹介 『高杉鬼遊川柳句集』	新家完司	:(120)
	田中正坊	:(121)

金婚式を迎えて

宮口 笛生

昭和二十六年五月十五日に結婚式をあげてから早や五十年となった。思えば長かった短かったの五十年でもあった。よくぞ五十年も続いたものだと思ふ。元気で添うて来られたのはこの上無い幸せである。

十一月三日奈良市から、金婚祝賀会開催の案内があり夫婦揃って出席した。二六九組の夫婦が奈良市鴻池中央体育館に集まった。奈良市長から、五十年の長きにわたり苦楽を共にされ、戦後の復興に尽されて来られた皆様、心から感謝と金婚のお慶びを申し上げますと御挨拶があり、続いて市長御夫妻から一組ずつ祝盃に酌をして回られ有難くいただいた。市から色々と記念品を頂き、茶話会に祝儀能や懐かしうたの演奏もあり、ビールが出てみんな楽しいひとときを過ごした。最後に八班に別れて記念写真を撮っていた。五十年を遡ると、農家三十三戸非農家七戸の寂しい村だったのが、今八百余の自治会になっている。狐や狸と遊び、春には山菜採りや、秋には茸採り等した山もすっかり開けて家が建ち並び、一つの大きな町となっている。

誹風柳多留二四篇研究 37

茴香の花

宮西弥生選 …… (124)

「新」

樋口輝夫選 …… (126)

一路集「満ちる」

岩本笑子選 …… (126)

「歌」

渡部さと美選 …… (127)

初步教室「道」

吐田公一 …… (128)

秀句鑑賞「同人吟」

三宅不朽 …… (130)

水煙秒

町田達子 …… (132)

■エッセー 川柳の虚構

瀬戸まさよ …… (133)

来さまい 下北

木本朱夏 …… (154)

追悼 池田寿美子さん

板東倫子 …… (153)

十二月本社句会

(134)

各地柳壇（佳句地十選／北川竹萌）

(138)

柳界展望

(155)

一月各地句会案内

(196)

■編集後記

楓葉・希久子 …… (198)



座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

私の句

交替で袴姿の子を写す

(薫風)

吉岡修

村の道も今は幅員七米半のアスファルト敷きとなったが、五十年前はタクシーも通れない狭い道で、嫁の荷も村の手前でトラックから大八車やリヤカーに積み替えて運び、嫁も五百米程の道程を歩いて来た。今結婚式と言えば豪華な結婚式場で行なわれるが、当時田舎では家で行なわれるのが普通だった。

近在に写真屋さんも無く、私の結婚写真は川柳会の阿萬萬のさんに全部撮っていた。萬のさんを知って居なかつたら結婚写真も残ってなかつた事と思う。川柳の指導をしていたら、大阪鉄道病院第二科副院長だった北川春果先生を、私の親戚として同席していただいている。田舎は派手で、披露宴には大勢の人が徹夜で酔いつぶれるまで飲んだものである。

麻生路郎先生から、「いつまでも肉と葱との仲であれ」という短冊と、長崎柳秀先生から、「今日からは親孝行も二人にて」といううれしいお祝いの短冊をいただいた。

勿論エンゲージリングも新婚旅行も無かった。一年程して白浜へ旅行に行っただけである。当時私は国鉄でSLの機関士として勤め、家は八反の百姓を父母がしていた。農耕用の大きな牛も飼っていた。

思い出は尽きないが、今こうして夫婦元気で金婚式を迎えた慶びは一入である。次はダイヤモンド婚をめざして生きる欲に耽っている。

川柳塔

河内天笑選

河内長野市 加島由一

難波でも行くように子はイタリアへ

感情のままの音しで戸がしまり

新聞に母が包んでいるキャベツ

予定などないが散髪だけしとく

もみじ狩りひよつと松茸ないかしら

振り向けば後ろに誰ももういない

尼崎市 田辺鹿太

目一ぱい働いて来た手の厚み

時機を見て妻に意見をするつもり

ネクタイがゆるむ男の更年期

ピンボケのような返事は赦せない

溺愛の掌からこぼれるひとりっ子

逡巡をすれば雨から雪になる

米子市 野坂なみ

サラブレッドの小屋にもかける注連飾り

駿馬へとこつこつ熱をもつ蹄

離反者もきつといるだろっ兵馬備

尽きるまで走っていたい競争馬

触発の風をはらんでい地球

さりげないスキンシップは愛だろっ

竹原市 小島蘭幸

滝に打たれてみたいと思う日が続く

仏通寺の靈氣山頭火と歩く

一方通行ゆつくりと秋深くなる

似顔絵描きの前に座っている時間

蟬の枯れていい顔してるなり

今僕は虹に向かってるところ

鳥取県 新家完司

新聞を読むと眉間に皺が寄る

独りではすぐ死にそうで離婚せず

自慢せぬ人が一番美しい

同じ坂なのにキツイ日たのしい日

にんげんに触られた桃すぐ腐る

戦争をするなど柿の木が叫ぶ

鳥取市 徳田 ひろこ

風船も毬も自由になる野原
かたつむり書き遺して銀の道
台風の目にトリックを伏せておく
いのち費やし落書きをやっている
雷鳴が背骨の中に生きている
風紋や吹かれ続けている五体

富田林市 片岡 智恵子

アンテナを倒して思考ゼロにする
雑談で家事の手抜きを教えあい
強く念押されてからの不整脈
待たされて風邪のおまけをもろてくる
褒められると昨日と違う絵が画ける
よく喋る人ほど理解してくれず

米子市 木村 富美子

焼きいもの約束のまま落葉の忌
大空に弓を引きたい事がある
町角はどきどき期待してまがる
鳥たちに聞きたい話溜めている
雲に乗る夢はまだまだ捨ててない
今日もまた神や仏に背を押され

寝屋川市 江口 度

びわの花咲いたか紅葉見に行こう
のんびりと家に居る日は誰も来ず

月赤くのぼると神経痛いたむ
だまされていようこんなうまいお茶
金の無い方がお歳暮贈らされ
妻の笑顔にリストラを言い出せず

唐津市 久保 正 剣

南無浄土アフガンに向けて除夜を撞く
起立多数其の都度国が傾斜する
ダイヤ婚祝うと土俵あとながない
電飾のドレスで騙す歌唱力
父の日が無い頃父は強かった
起き上がる気力も失せて聞く勝訴

島根県 堀江 正 朗

孫夫婦よあーあ目玉が欲しいなあ
祝い膳見えたら倍もおいしかる
戦盲の拳に溜めている涙
ひとときを持って余してる妻の留守
雨の春秋の風情を感じさす
日向ぼこ秋は優しく胸つつむ

西宮市 奥田 みつ子

読み初めは「師弟」ころもまた新た
過信した健康に今笑われる (腎炎入院)
お見舞のピンクの花に気をもらう
遠くから駆け寄り等が居てくれる
今年また変らずに咲く白い梅
巻舌で啖呵切りしたい時もある

西宮市 門 谷 たず子

月瘦せて妻は乳房を失いぬ

心まで醜女にならじ片乳房

神さまの仕置に耐えて夕陽見る

晴天の遠景に置く淡路島

産んどいてよかつた子等と退院す

心機一転プラス志向でゆく余生

西宮市 緒 方 美津子

カタカナはにが手といつておれぬ日々

手も足もまだ言うことを聞いてくれ

まだ余白たっぷりあつて夢を描く

デパ地下の波に女はうまくのり

オバサンはいつも食べ物持つている

金木犀砂金の如く吹き溜り

芦屋市 黒 田 能 子

平凡に暮してるのに肩が凝る

シャッターチャンス待ちくたびれているカメラ

集合写真だれか一人が横を向く

長生きの犬も持病をひとつ持つ

頑固者同士綱引き終らない

朝の茶がおいしい欲のない暮し

大阪市 西 出 楓 楽

鳩尾に溜まる自分についた嘘

もうすでに懼つてるかも狂牛病

妥協点探し続けたまま冬に

直球の勝負は避ける歳となり

ロボット用ハローワークができそうだと

海外の旅は水盃で行く

大阪市 小 林 周 信

マンションに肩身の狭い犬がいる

排ガスのは街で鼻毛がよく伸びる

流水にはしゃいだりせぬ北の町

名所にもちよつと立ち寄る遍路旅

逆光に晒すと本音駆け出る

ジュースしか飲めぬお方が両隣

仏壇に詫びる手抜きは無洗米

洪柿をむきに実家へ行つたまま

月よりの使者がかくれて吸うタバコ

爪に火を灯し片道切符買う

マイペース暗い話はせぬ歩幅

初日の出神馬に託す夢の数

堺市 河 内 月 子

庭の花活けてわが家のお正月

変なとこばかり似てくる凡夫婦

伸びる芽をあまりごちゃごちゃ触らない

妹に口では勝つたことがない

うちの猫となりの庭が好きらしい

菊日和駅まで歩く久しぶり

堺市和田 つづや

嫁ぐ子に僕の魂従いてった
神の手の届く所で無茶をする
生きて行く事の辛さはまだ知らぬ
人情で泣けない僕になつて
手を出せば誰も握手を拒まない
胎内のように安らく膝という

堺市志田千代

お隣の犬が鳴いたら米をとぐ
おにぎりを固くふんわりにぎれます
二人から始まり二人つきりになる
わたくしの子が中年になつていた
馬鹿になり宴会は楽しむべしと
知っている話だまつて聞いている

吹田市山本希久子

初鏡真白きものを身にまとう
生き方を少し変えたい冬の花
逆転の発想縄とび繰返す
昨日より明日に傾く靴をはく
テロ動く地球の芯が傾きぬ
逆風に負けぬ無口な葦である

枚方市海老池 洋

新しい道新しい落とし穴
安心を金庫の中へ入れ忘れ

蟻螂の構えは正に空手術

不器用な男を笑う目玉焼き
人間に疲れアイボに癒される
写真屋の直す手の位置首の位置

八尾市高橋夕花

秋のみち五百羅漢はみな優し
美しい素顔に絵の具塗りたがる
年金の暮しに馴れた慎ましき
シナリオを変えてのんびり生きている
何も彼も許してしまふ倦怠期
木綿糸しつかり者の姉だった

八尾市神原まさと

誕生日御礼を言い三輪山へ
薬害か身体あちこち痒くなる
丹誠の土で咲かない花はない
自信まんまんマジシャンの種明かし
挨拶もせずに引越した隣
料亭のおせちにはない母の味

八尾市生嶋ますみ

図書館で時々脳に給油する
彼と目を合わす事なくメール打つ
この店でうどんいただく月参り
大根もさしみもレジでピツと鳴る
はひふへほど食べるあつあつのたこ焼き
人はみな孤独携帯はなさない

八尾市 村上ミツ子

残り火は浄土へ持って行くつもり

噂の火つけたお方は知らん顔

好きなもん食べてストレスやつつける

髪を切る別に意味などないけれど

わたしの前でいつもお金は回れ右

金の要るはなしになると黙り込む

寝屋川市 坂上高栄

告げ口を一番叱ったお母さん

ライバルが生きる元気を燃えたたす

銀髪のおしゃれが匂うお人柄

掌を合わす明けの明星一人じめ

後を追う他人の空似白昼夢

大安にすぎる人間の弱さ

寝屋川市 森茜

ニューヨークに祈りが深くなる聖歌

目が合ったお地藏さんがついて来る

西窓にきちんと夕日嵌るなり

ことごとくにはいと言うからきな臭い

満腹になってオアシス見失う

一向に賢くならず本が好き

豊中市 湯浅馬洗

みちのくの初日に映える寒立馬(下北半島の野生馬)

唐三彩馬埃払って干支の座に

午の干支待ってましたと三春駒

遠き日のコマと双六正月に

運不運塞翁が馬疑わぬ

若者に竹馬の友が通じない

高槻市 傍島克治

気にかかる空家の庭に実る柿

定食と決めているのにメニュー見る

サロンパス領地抜けていく背中

売り文句変えて寒夜の焼芋屋

地獄まで貴男の後は追いませぬ

ぬけぬけと惜しい人と言う弔辞

吹田市 石原靖巳

諍うたことは日記に書いてない

褒め言葉きいたか駄馬が走りだす

少子化の末が気になる七五三

賞罰なし何とおもろくない男

古希過ぎて私の色がまだ出ない

満場一致だれかが嘘をついている

富田林市 藤田泰子

どんぐりの生命力を信じ切る

花屋には棘を抜かれたバラばかり

鮫小紋しぐれが似合う蛇の目傘

星型に切ってみたけど芋は芋

雑草がライバルですの芝桜
落葉焚き時代遅れの火を抱いて

藤井寺市 高田 美代子

炭坑節を忘れてしもた小さい月
木の椅子をカタカタ鳴らす冬の部屋
生きるとはこんな日もある板挟み
ご参考までにとすこしおせっかい
雑居ビル火元にいつもいたネズミ
年末の忙しい時に書く賀状

羽曳野市 徳山 みつこ

山茶花がほろろ私を急がせる
筆まめな父の遺伝子受け忘れ
残響となって母さん耳に棲み
この人に胸躍らせた日もあった
残酷な私が好きな躍り食い
ごたついて笑顔すっかり出し忘れ

高石市 浅野 房子

母さんの紙袋から鳩が出る
紙一重あの世とこの世君と僕
進軍ラッパ鳴っているさあどうするか
この味のレシビは嫁に教えない
梵鐘とこころ静かに溶けて行く
群を出たメダカよお前どこへ行く

岡山県 小林 妻子

破れ傘に畳み込まれたのも縁
すぐほどく男結びも知っている

贅沢が胃の中までも沁みている

吊し柿鳥も予約にやってくる

物見遊山今に出来なくなるんだよ

正月の餅搗く音と春になる

竹原市 森井 菁居

どの道も終点が無い習い事

無視すると言う手もあって第三者

心洗われて莫山展が出る

再生のたんす木目が光りだす

ある訳が無い吉相も開運も

野菜だけ食べて見事に生き伸びる

松山市 宮尾 みのり

埋め草で少し遊んでいる知性

大切なものまで捨てた若かった

目くばせで意のあるとこを汲んでくれ

世辞を聴く軽い楽器をひくような

御しがたい女だ詩集抱いている

本物を沢山知っているセンス

香川県 川崎 ひかり

相槌をうたねばここは納まらぬ

スコップが古代へ続く夢をほる

九十の過去を刻んだ深いシワ

捨てて下手でいつも娘に叱られる

ウツの日はまっ赤な服でシヨッピング

情けないもののひとつに物忘れ

唐津市 井上勝視

衰えを知られたくない酒の量

民話語る爺婆もなく世が冷える

傘寿だからパンツは派手な色にする

命乞いだんだん増えてゆく葉

長いものに巻かれるなんてもう御免

赤信号みんなで渡る族議員

唐津市 宗水笑

歯には歯を超えてしまったテロリスト

戦争は儲かりますと闇の声

飽食の街にどろぼう猫肥ゆる

幽霊の役は終わった枯れすすき

嫁が来て破顔一笑総入れ歯

来し方の落丁洗う紅葉宿

唐津市 山口高明

横丁の角で一ぱい飲む手付き

手を振って知人が消えた手術室

余震なお帰れぬ鳥を夢に見る

悔ると竹篋返しの冬の嶺

俸給を貰い戦争ごっこする

不況下にリストラ聞かぬ省と庁

和歌山市 古久保和子

公園のリスもしこしこ冬支度

趣味高じ暖簾揚げたと言う蕎麦屋

愛犬も会いたい人のいる散歩

右脳からじわじわ石に成りそうだ

駅前でティッシュを貰うおばさん度

飛行機が家の真上を飛んでいる

よく聞けば愚痴か自慢か分りかね

お近づきのしるし自慢の柿なます

やんわりと切り出されては断れぬ

今朝もまた悩み相談読むゆとり

別れ際の笑顔がいつも目に浮かぶ

菊褒めて菊の手入れも聞かされる

和歌山市 西山幸

信号の青へ不安ともの怖じと

朝刊もこころを病んでいるようだ

木枯らしのきびしい檄を聴いている

大向こうまでは届かぬ独り言

現実の暗さへ拍子木を鳴らす

泣いて笑って足踏みをして日が暮れる

和歌山市 榎原公子

感激で当分洗えそうにない

かたばみよ話せる友がいてくれる

すりむいた膝小僧にも意味がある

七十の少年になるiモード

縛るつもりないがケイタイ持てという

ペディキュアの指に真っ直ぐ冬が立つ

和歌山市 細川 稚代

初春や少し濃い目に紅をさす

メカニズムどこかとツボを押して見る

初霜をうけて甘味の増す野菜

天国へ届くメールをさがしてる

雨やどりあのひとときが縁となり

三姉妹女の歴史まだつづく

和歌山市 青枝 鉄治

金脈も人脈もなく鍬を振る

子育てに手出し無用と嫁のジャブ

ダルマに目入れてから風肩で切る

異議なしと言わねば酒が冷めてくる

抜く舌が多くてエンマ過労さみ

出向から戻れば椅子のない不況

海南市 三宅 保州

瑞雲も暗雲もあり初春の夢

輝いている騙されて買った壺

そういえば女は土下座などしない

一杯でない不安な冷蔵庫

本心が見えぬ振り子のない時計

金も出す口も出します親だから

京都市 高島 啓子

元旦やアラブ特産汗血馬

宴席もファイトファイトとゆうて出る

おおかたは空籤を買う人の列

勤め持つ友は上手に歳をとり

目薬をもって勤めに出てる父

友情と女性の方は思ってる

枯れきつてないから水を遣っている

二ワトリと卵とテロと報復と

敵だった人に九段は悪魔巢

点滅になつたら次の青を待つ

菰巻きを見ていて襟をかきあわせ

臨終に立ち会えたのも孝のうち

東京都 播本 充子

私にも女難の相があるそうなの

ツィット見られてからの風当り

ご主人によろしくなどと憎い彼

ピンボーでなくても食べる大根葉

花束贈呈美人でなくてよい

悪しからずオバサンだつて進化する

富山市 舟渡 杏花

土下座中かすかきこえるビーヒャララ

打明ける勇気が萎える月咄々

神無月養錢入れよか入れまいか

大太鼓今年限りの無我の境

慰めの当りさわりのないことば

ヘラヘラとおちよこで酔うてるろくでなし

弘前市 高瀬霜石

どうせ遇う風なら向かい風がいい

六十点同士でちょうどいい夫婦

核家族ロボット犬が出迎える

日本男児ステテコは離さない

政治家の芸術的な嘘を聞く

妻多忙わたしも多忙酒うまし

可児市 板山まみ子

パソコンの魅力に勝てず深夜まで

整理してまたしまい込む不用品

手作りがぜいたくになる旬の味

下戸一人酒の失敗ない悩み

悩みごとあればあんなに笑えない

アフガンに生まれただけで負う苦勞

島根県 榊原秀子

人形に帽子かぶせてやる立冬

荷造りの仕方も似てる姉妹

時雨して針箱あける久しぶり

私よりからす利口だなと気付く

倅せて人の不幸を忘れかけ

結び昆布今日はいい日と知っている

出雲市 園山多賀子

語り部も風化しました夫が逝き

綺麗ごとだけの自分史なら書かぬ

美しい歯で美しいお世辞言う

秋霖が明けて華やぐ照紅葉

愚直にも泡立草の黄に和む

満ちていく命を紡ぐ十三夜

出雲市 佐藤治代

半世紀ぶりに逢っても好きな山

言い過ぎた事を悔やんで陽が沈む

化けたいと思う鏡が化けさせぬ

愛想も争いもなし夫婦老い

上品な方と話して肩がこる

泣きたい日泣かせてくれる胸がほし

出雲市 小白金房子

美しい夕陽に解けるわだかまり

歛洗う川面に秋の陽が急ぐ

本心を語る眼だ信じよう

経本で今日が始まる老いの朝

純白のドレスを泣かす花の宴

子牛市あすへ別れの背を洗う

米子市 政岡日枝子

なんにでも触る汚いものはない

冗談に負けそうだから食べておく

私を跨いでひそひそが飛び交う

信仰の人の笑顔に魅せられる

身体中屈色になる怖さ
寝たふりをして風の乱やりすこす

米子市 鷲見正子

鍵っ子の頃の夕焼けが憎かった
なつかれて貧乏神が好きになる
予感的中買えば良かった菊花賞
不景気であくびをしてる駐車場
武器を持つその信仰は偽者だ
明日は明日今日も十時に眠ります

米子市 青戸田鶴

草をはむ親子の馬が絵のような
あぶなくても自転車だけはやめられぬ
生きる気力なくした友に手紙かく
うどん屋に寄って私も旅の人
いつのまにけやき銀杏も裸木に
長い冬守つてくれる築地松

米子市 澤田千春

手みやげの賞味期限を見てしまう
跳んでから川の深さが気にかかる
ジョーク一つあかるく変えた風の向き
春夏秋冬故郷のお山は美しい
冗談がスカッと言えた小気味よさ
母さんは草取り好きね嫁が言う

米子市 中村金祥

改めて人の愚かさ思い知る
テロリスト今も平気でいるんかい

ぎっしりのビルに地獄の穴が開き
国境へ罪なき民が列連ね
妻のナビ ストップばかりかけてくる
全山紅葉初冠雪に虹も出る (大山にて)

鳥取市 植田一京

母の掌も荒れてきました秋深む
夕やけ小やけ木の実一ぱいポケットに
軽い憂さコーヒー館へ捨ててくる
スタートの背のびに後が続かない
うるさい人も居らねばやはり寂しいね
群集の中で気楽に批判する

鳥取市 岸本孝子

うれしいと人にふるまう癖がでる
美人にはとても無縁な遺伝子だ
米と味噌あれば何とかなる暮らし
ほろ酔いの機嫌を読んで切り出そう
痩せなさい鏡が無理なことを言う
庭先の話で済まぬ人が来る

鳥取市 岸本宏章

順調に進んでいます脳の老い
聞き流すことにも慣れて胃が軽い
休憩へ庭師の時計狂いなし
古希近しやつと若手の域を出る
肥えた目で見るから男頼りない
読まれたら困る約款だから読む

鳥取市 武田帆雀

手を挙げて近づく友や菊の展
濠の水澄んでのどかな菊の城
討ち死にの形で傘が捨ててある
借りた妻美し過ぎる文化祭

勲章を逃した黒い掠り傷

自慢屋さんネタを切らして可哀そう

鳥取県 さえき や え

ごんたくんだてのうす着はしなさんな
冬はかけ足予定を立てて動いてる

大根あげよ銀杏やろうと冬の風

ない袖は振らず笑いをまいておく

女が上に立つといじめの手がのびる

生きているあかしゆらゆらつるし柿

鳥取県 西原艶子

おしゃべりは楽し聞くのもまた楽し

青春は終らず老いは今盛り

亡父母の恋の遺伝子継いでいる

いくたびも峠を越えてきた自信

主なき時計は知らずまだ進む

息を抜く庭にはいつも花が咲き

鳥取県 石谷美恵子

神さまが正直者にいけずする

しずしずと古を舞う緋の袴

間引くには惜しいが情けかけられぬ
運だめし神も仏も当てにせず
この門は札束が好き通りゃんせ
さまざまの命を食べて生かされる

鳥取県 土橋睦子

一陽来復二千二年の二重橋

子宝に恵まれ棕櫚も鉢を割る

齡重ね唇重い夫婦部屋

柏汁がおいしくなって年終る

ひび割れた石に根を張る藪椿

越冬の前に狸も事故に遭う

オレンジ色の干し柿すだれ温かい

鳥取県 土橋はるお

包丁に喜怒哀楽が出てしまう

股旅の演歌は氷川きよし君

泣く子も黙るような演歌を唄いたい

虫食いの野菜サラダがうまいかい

山頂に立つと叫んでみたくなる

鳥取県 鈴木公弘

それからのこと考えず子をつくり

錆びてきた滑車ラインを外される

木枯らしに負けぬ脂肪は付けてある

給料日まで羽づくろいしていよう

落葉焚くお礼ひとこと添えながら

妻の名を呼び間違えてから寒い

広島市 森田 文

竹原市 時 広 一 路

猛暑経て錦に染まるバナ林

ファッションの変化も目立つウォーキング

明日へ翔ぶ子の発信は見落とせぬ

新聞のおくやみ欄は無料らし

どの花も自然に枯れるまで待とう

竹原市 三宅 不 朽

万歳をどこかでしてゐる菊日和

馬鈴薯の花百姓さんとはい言葉

なあプリンいい音だろう五色豆

いいところうどん屋がある冬の海

おどり食い大好き むごいことを言う

竹原市 石原 淑 子

九十四可愛いかわい母で逝き

何をするでもないままに日の暮れる

いのち生み命育む土いじる

冠と婚一緒に来るとは本当だな

微笑みに見え隠れするヒトのエゴ

竹原市 古 谷 節 夫

花道はゆっくり妻と手をつなぎ

不器用をハートで支え夫婦坂

今が旬夫婦の会話六十路とか

足腰も老いたか影が走らない

猫嫌い干支がネズミと言う出合い

今日の月幸せそうだなあ丸い

間引き菜の一つ一つに確かな根

何処で線またも迷っている私

世は不況私は何も変わらない

医者でさえ風邪をひくから僕もひく

広島県 藤 解 静 風

水のない花瓶を置いて無人駅

押しの強さずるさとテレをもつ老父

泣いている老父の喉仏が動く

女は強ししみじみ妻のサロンパス

いい顔をしてる蟹食うときの妻

宇部市 平 田 実 男

混浴で値踏みされてるのは・お・と・こ

成長と見れば嬉しい口答え

暴走族一人になれば普通の子

はた目ほど仲は良くないペアルック

利子払う身へひと月が早過ぎる

美祿市 安平次 弘 道

現実に戻ればみんな夢だった

目の高さ合わせばわかる子の世界

諸行無常泣いてすむなら泣きなはれ

疑いは晴れずに終る失語症

仕合わせとは何だろ自問自答する

熊本市 永田俊子

アドバルーン右も左もない浮遊

回転寿司もひとつ如何と攻めてくる

活断層の上で踊っているコント

満ち足りて心の鬼を眠らせる

変る世に波長が合わぬ私の修身

熊本県 高野宵草

兵器みな捨てれば足りる地球です

誰よりも妻がきれいで恙なし

山菜が美味しい宿の洞穴の風呂

長電話煙をあげて鍋怒る

破裂するまで風船の有頂天

唐津市 樋口輝夫

クモ膜を修繕しての授賞式(佐賀県文学賞)

鏡山池の鯉にもボスが居る(県立鏡山公園)

大臣が牛を食つてる試胆会

後継ぎが無くてさびびれたコンバイン

徒競走わが子菌痒い走りぶり

唐津市 仁部四郎

世の中は椅子とおカネという説も

世の中と別の道行く寺社まいり

世の中に取り残されて犯す科

世の中に生きてお屠蘇のうまさ知り

世の中を見つくす歳のテレビ好き

唐津市 市丸晴翠

爪だけは元気な母を介護する

駅前の活気を車窓から探る

出すだけの介護保険で終わる夢

自慢ですお金に縁のない家系

戦場を花野に変える慈雨を待つ

松山市 丹下美津子

誘いがかかるうちよ夫と空の旅

根来寺も人紅葉の真つ盛り

口は重宝昨日の敵は今日の友

リストラは無いが残業手当減る

兄弟も年ごろ金のいる話

香川県 神保坊太郎

軽がるとすぐ手拍子にのりたがる

どこもかもガタついて来た適齢期

倒産を知らされてないまねき猫

これがまあ分身と知る我が影よ

衣きせた噂はだかで舞い戻り

香川県 池内かおり

金婚へマイカーの旅まだつづく

篝火が燃えて深山の月も冴え

コスモスの風情に蝶も戯れる

ひとときを店主と選ぶ秋帽子

気安さに言わずもがなを言い過ぎる

香川県 清川 玲子

鬼門にはうるさい父の青写真
指示通り走る馬にもある謀反
妻の顔子の顔浮かび耐えている
リストラに明日の動き止められる
貯めてなきや争うこともないだろう

香川県 成重 放任

軽装であしたを生きる老夫婦
月さまとうれし恥ずかし露天風呂
徒歩競争僕はビリッ子大スター
よく匂う隣は今夜秋刀魚だな
一頭の牛に國中蹴ちらされ

高知県 北川 竹萌

薬より効くよと主治医酒一升
長男は父を仇と先に逝く
百歳を目指し大地を踏みしめて
日曜市玉葱の苗捜す句
思い出はなおも尽きない応召時

高知県 赤川 菊野

一步退く勇気をくれた仏間の灯
帰り際心ゆさぶることを言う
機密費もヘソクリも無用一人者
お隣も婦唱夫随で仲がよい
病窓をのぞくつめたい昼の月

愛媛県 中居 善信

缶拾う少女明日を拓いてる
札束で納めてからは胃が痛む
良く笑う女が秘密抱いている
北の海気性激しい父に似る
覇気のない僕を丸いと言っている

砂川市 大橋 政良

締め直すネジよ今までありがとう
日めくりを使い尽して今達者
後ろにも目のあるような嘘をつく
手のひらを返す札束そこにある
かさぶたが剥けても我慢しいられる

弘前市 宮崎 ヒサ子

天に霜犬の遠吠え寒々と
ひらめいて忘年会の日時など
足の傷治癒せぬままに秋暮れる
後で気付くコンビニで会ったのは医師
心まだ渴かぬように紅をひく

弘前市 須郷 井蛙

体温で迎えてあげる寒い夜
万博のたんびに森が一つ消え
万策にメニユーたやさぬ母の胸
酒二升持つて本当の友が来る
賞味期限過ぎたワタシに役が来る

弘前市 今 愁女

歳月の流るるごとし秋の雲
台風のやさしく逸れてりんご熟れ
鴉の知恵さわらの垣に貯食する
ルノワールの裸婦とお別れ古曆
旅のこと後に書き足し日記果つ

弘前市 櫻庭順風

虎落笛北の恨みが深くなる
寝めた児のいつもと違う寝ころがり
逆転打不吉な予感吹き飛ばす
別荘を寝かせてくれぬ星の空
津軽そば浪速うどんと馬が合う

弘前市 福士慕情

猫まんま猫は見向きもしなくなり
先輩の技術を盗み独り立ち
あれほどの男結びを風が解く
重税をポンと払える悪い奴
紅葉の十和田絵筆に溶かされる

弘前市 蒔苗果林

体内の水分適度頬うらら
好きなことやれるまでやろう老い冥利
馬鹿になれあとで楽しいことが成る
寝る前の頭に体操押し付ける
小賢しくふるまった夜亡妻の夢

弘前市 一戸ツネ

こけら落し大阪ホール文化の日
ファッションの秋は七彩恋ごころ
うま年の坂をスタコラ白髪首
聴き上手愚痴も小言もアミダ経
致命傷軽いことばも瘥になる

黒石市 相馬一花

ライオンの躰を聞いている夫
やんわりと逃げればクマも諦める
独占をしたい美人がまだ来ない
男装の美人をばらす喉仏
露出度の高い女性がミスにされ

十和田市 阿部進

まっとうに歩めば倅に出逢います
良性のポリープだから飲んで居る
花好きな祖母の笑顔が美しい
老夫婦支えてくれる一人っ娘
あばら屋に住んでも心澄んで居る

青森県 西谷大吾

生きるとはただ一本の丸木橋
明日がある明日があるさと鉄を振る
ちぎり絵にただ一筋の道を描く
生かされて必死に渡る丸木橋
雪が降り津軽は寒くなりました

横浜市 清水 潮華

横浜市 保田 絹子

太らない予定高価な服を買う
出先から洗濯物の指示を出す
作るより買う食卓へ花添える
足組んで英字紙を読む通勤車
やりくりをして出勤の服を替え

横浜市 田中 笑子

川崎市 和泉 あかり

あれそれで夫婦生活丸くいき
若いわね言われクスツとする私
新人のナースに男優しい目
年齢にプラスアルファする病氣
挨拶が素直に出来る登山道

横浜市 菊地 政勝

静岡県 蘭田 獏杏

歴史ある千枚田まで休耕田
紅葉は次のいのちを出す祭り
虹色の声で迎える賞与の日
焼肉屋ヘルプと書いて客を呼び
アフガンに砂塵が舞って長い冬

横浜市 山下 省子

さいたま市 八田 敏

厨房を見通せる居間に夫住み
ゴメンねが明るくさせた君と僕
いい人を装う句など作れない
投げキッスされて返して下を向く
川柳にかける命の真半分

本当かと問えばらしいと濁される
平凡がいいと言いつつ凝る名まえ
副作用知ってたじろぐ治療薬
神仏 易もミックスさせて生き
諍いも昼のメニューで歩み寄り
ハッピーと思われているペアルック
修正がきかないおんなひとり住む
気休めの言葉を躲し白い闇
一周忌すませひとりの夜が重い
木枯し一号 真つ正面に冬
赴任した駐在頑固な国訛り
空青く心豊かに花を買う
健康上硬いベッドに買い替える
和服着て気分一新お茶の席
紅葉山思いやられる行き帰り

輪台をつければ菊も威儀正す
三十鉢並べ独りの菊花展
足踏み場ないペランダに秋溢れ
来年の夢描きつつ花の苗
ウエストが合わぬ背広を捨てられず

富山市 酒井 輝

してる気で体操を聴く六時半
部屋ごとの鍵で絆が細くなる
片方の義眼に肚を読む視力
すぐ傍に居ても分からぬバイオテロ
踏み台にされて叙勲をまだ祝い

富山市 島 ひかる

高高と塔に今年も夢を積む
神の鈴たった一つの願い事
初詣水掛け地藏撫でて済み
逢いたいと今年も書いてある賀状
山よりも街ですっかり疲れ果て

愛知県 早川 盛夫

働けと朝の布団をめくられる
何もない家だが笑い声があり
その儘がいいのに君は化粧する
パソコンへ家族の会話遠くなり
ふる里へ来て道を聞く変わりよう

京都市 都倉 求芽

あちこちでタカ派の卵孵化してる
冗談を反応次第で本気にも
意地少しカルテの告知には負けぬ
シヨックシヨック鼻毛にまでも白いのが
木馬館まっすぐ走る夢捨てず

京都市 小西 未佐子

パレスチナ龍馬出現せぬものか
寺巡り昔老人今ヤング（鈴虫寺）
老人の自立なかなかい気分
積上げし趣味教え合う老い楽し
正月に来る子や孫に干す布団

亀岡市 井上 森生

二ヶ月で抱かれ心地を選り分ける
もつともつとこころを核やバイオより
慎ましい暮しに帰ろ手と汗の
大国か日本はしたたかに小国か
争いのもとと神さま違うから

京都府 稲葉 冬葉

盾突いた頃なつかしい三ヶ日
飽食の街で元旦鮭茶漬
ジェスチャーの大きい人で淋しがり
厚生省許可疑いもなく取り寄せる
消化不良のまま人脈が動きだす

京都府 丹後屋 肇

占いのページから読む週刊誌
婚約が決って娘まだ迷う
白状をして留置場でかくいびき
鼻唄が出てくるローン完済日
ドングリを拾い集める七五三

大阪市 前 たもつ

成しとげて祝宴の主静かなり
ビル谷間今宵の月はまん丸い
菊花展人は勝手に賞をつけ
何が起るか焼肉屋だけではないぞ
週二回炊き出す鍋へ列続く

大阪市 渡部 さと美

置き引きに氣いつけ墓地で教えられ
お母さん気楽と娘過去知らず
早とちりう呑みに凝りず恥をかき
雑用は妻に押しつけええかつこう
歳重ねますます古代への興味

大阪市 鈴木 トヨ子

私との出会いを待っている紅葉
忘年会呂律危ない国訛り
あの人に会いたい朝のスニーカー
洗いざらい喋りすつきりお腹すく
野仏のエールで坂をのぼりだす

大阪市 川内 呷笑

忘れるなテロが刻んだ地獄絵を
定年後時間あれども根気なし
定年後妻の世界へついて行く
颯爽と風切る音に父を見た
遊歩道今はタヌキの獣道

大阪市 長谷川 会美

良く笑うあの娘は丁度お年頃
門付けの津軽三味線スターダム
まちがえた電話に頭下げている
紙くずと思つて捨てて探してる
石橋を叩いて渡り落ちました

大阪市 板東 倫子

愛と憎のはざまに揺れる人を恋う
鈍い脳がイエスカノーか迫られる
カリスマへ生命捧げて悔いなきや
分別が必要ゴミも人間も
大根が美味しいと知る肉無しデー

大阪市 中澤 伽羅

車窓から見えてる限り富士を追う
朱の鳥居神様だけの島らしい
百態の鳥を眺めて船の旅
介添えが六人ついて七五三
熟年が肩をすばめて戎橋

大阪市 清水 利武

初春だ無事に渡れた太鼓橋
一年の健康願う絵馬供え
思い切りお洒落して出る初詣で
年一度戦友と会う年賀状
好きやねん けつねうどんとタコ焼と

大阪市 杉澤 汀

妻旅行犬は私を離れない

痛風と肉屋さんから知れ渡る

なにげないその一言に身は凍る

休耕田コスモス咲いてはっとする

キリン草お前も異国乗っ取る気

大阪市 川端 一步

背伸びしてお鼻の先が折れました

怨念を捨てると虹が見えてきた

いのちある限りわたしは夢を追う

病み続き妻南天を植えている

二人して代走ごっこしています

大阪市 大塚 節子

天神さん高津回って生魂さん

生姜糖でぬくもって寝るクリスマス

しつけ糸とって新婚初詣で

新聞はテレビ欄だけ見てる日々

隣からのつべい汁来る寒の入り

大阪市 神夏 磯典子

日本はいいなお餅も数の子も

ばらばらの家族集めるお正月

神さまのお告げが欲しい宝くじ

除夜の鐘悲しく響くことばかり

才女ではないが夫に頼られる

大阪市 川久保 睦子

冷えきびし息をひそめる冬の庭

朝日さす刈田に霧の立ちこめる

行く年を思い湯舟にふかぶかと

明日ある命を思い灯消す

初いういし花をつけてる福寿草

大阪市 町田 達子

つるべ落しへからから走る落葉たち

祥月の仏に参る京の寺

炭疽菌の話などして墓洗う

残り一枚暦が背なを押ししてくる

音楽葬友の遺影が笑みかける

大阪市 松尾 柳右子

昔むかし刈った髪の毛ためていた

旅先のマツチためては悦に入る

ためようと努力してから貯まる銭

商戦にセールばかりをしてる店

大阪城平和の灯ゆらゆらと

大阪市 辻川 慶子

二〇〇二年朝がまぶしい程白い

文豪の意外に下手な文字もある

季の移りペンすらすらと秋夜長

歯がゆいと思えど口に出さぬこと

爽やかな目覚め早起きしてしまう

大阪市 中田 あい子

人のよい姑の支出に多い義理
ツーカーと見えぬ夫婦にある阿吟
華やかな一族にいる変り者
抵抗のあつた茶髪に目がなれる
亡き母に逢いそう秋の遍路道

大阪市 川原 章久

正月はパートの巫女も神楽舞い
葉漬け鈍い巡りに溜り出す
満ち足りて紅葉真つ赤な顔で散る
ダム底に消えた民話を掘り起す
早起きで花に元氣な顔見せる

大阪市 寺井 東雲

行くあてのある人ばかり大阪駅
秋が来て胃腸鍛えている私
粗食とはいわぬラーメン有難い
溺れても美人は皆んなほつとかん
売り声がテープラーメン味落ちる

大阪市 小糸 昭子

道産子の頼もしきかな太い足
床の間に新年の水馬の軸
自販機が何故か反抗して困る
浅漬けの美味さ残して家を出る
予定表無くて気ままな一人旅

大阪市 安達 はじめ

七日粥二人三脚今日を生き
十日戎みんな庶民の足の音
初空の凧に今年の夢をのせ
老いてなお燃える火種は持つている
春光のとどくあたりに蝶が舞う

大阪市 津守 なぎさ

フラフープ回した事もあつた腰
乾杯の音頭ながなが座がしらせ
オーロラは地球の地獄わからない
ログハウス森で住む気の安堵感
魚拓とる友の笑顔に嫉妬する

大阪市 津村 志華子

ふるさとは春を待つてる柿すだれ
ゆずられた席は情けで温かい
間違えたカードを拒む改札機
泣きごとは言わない母の割烹着
舞い落ちる木の葉に自分重ねてる

大阪市 奥村 五月

話し合うはずのお酒でまたもめる
ほめた後わさび一口きかす父
御先祖に叱られないか休耕田
間違えず動くロボット憎らしい
再婚を老人手帳考える

大阪市 清水 絹子

屠蘇を酌む春はそだと内障子

今年こそ無病息災初詣で

新聞読むだけに馴染みのコンサイス

腰痛も会えば忘れて孫を抱く

金運線あるのに飛んでいく諭吉

大阪市 本間 満津子

惨いこと生涯記憶消えぬだろ

天皇の涙か明治節の雨

菊日和よそに一人の友が逝き

生きて行くだけならライバル無くてよい

伝説の味大阪のみそ雑煮

大阪市 榎本 日の出

新年だ緩んだ脳に活入れる

数ができ鏡の前は素通りす

オンチでも順番くれば勇氣湧く

悪知恵も勇氣もなくて輪の中へ

情熱があつて足りない記憶力

大阪市 玉置 英子

ファンデーションやめたが紅は最後まで

お互いに足腰わるい古い友

幸せなことに恨んだことがない

ごきぶりの最後地球と共らしい

少しだけけれど歩けるありがたさ

池田市 栗田 久子

初日の出曙光に見えてきた希望

初雪が山の斜面を煙らせる

参加者の欄にだけ出るわたしの名

わたしにはあなたがいるという強み

目を閉じてもたれる胸がほしい夜

池田市 藤井 計光

天引きの介護保険に腹が立つ

フレッシュな監督次代担えるか

暗黒の夜明け避けたいテロの幕

出不精が妻の化粧を盗み見る

睦まじい夫婦でいつもベアルック

和泉市 中川 楓

澄む水のこころを持ちて初詣

アフガンの子へ鮮やかになる戦後

今年また袖子湯に浸る幸のあり

老い母に何度も同じこと問われ

物多くあふれ暮らしてふと寂し

和泉市 岡井 やすお

吉か凶か国を占う初みくじ

二年目ともなれば落ち着く新世紀

公的の資金まだ底なし沼へ

お正月スポーツみんな店開き

老い二人の仕合わせ浮かぶ屠蘇の杯

和泉市 西岡洛醉

交野市 山川日出子

赤い服女は夢を忘れない
一枚を重ねて秋を食りぬ
夫婦坂たまには丸い風も吹き
百歳へ期する事あり日々好調
一心を祈る素足の百度石

茨木市 島元ふみ

交野市 森本弘風

望みごと果せぬままに歳重ね
些細なことも老いには明日の夢になる
子の暮し煩わしたくない親ごころ
歳なりに今日は綺麗と背を伸ばす
いい子いい子と育ていい子になりました

茨木市 藤井正雄

チャンネルを競馬に座り直す父
尾を振らぬ犬で万年平社員
匙加減忘れた老いの一徹さ
正月帰省長男坊の東京弁
盆栽をほめて一鉢貰う仲

大阪狭山市 矢野梓

河内長野市 植村喜代

アルバムの中で思ひ出蘇る
深呼吸してしばらくは落ち着ける
喪が明けて元のおしゃれな友になり
体重が増えて体力落ちてくる
三食の支度手抜きを考える

山寺の宝の火鉢木の根っこ
身についたパリの匂いの岸恵子
クローバー冠にして孫がくれ
ガレキから金塊が出た米のビル
蝙蝠や土竜味方かピンラディン
シゲナルは出ていたらしいガン告知
還暦に手術してから今日は古希
ワープロで下書きをするラブレター
母傘寿生きる糧にとポランティア
爆弾のお返しします炭疽菌

カレンダー今年はテロがないように
親分を慕って鷹が星になる(借別杉浦氏)
こんには裏から入るお付き合
嫁と親決めた新居に僕も居る
快復のきざし病院食進む

蚊の攻撃受けて庭の柿を取る
深み行く秋へ何かをしたくなる
どこか皆思う歳来て宝減る
秋の夜向かいも遅い電気付き
七五三嫁も母親の顔になり

河内長野市 井上喜醉

温かい話が好きな夜の鍋
柿の木がホームを覗く山の駅
ミサイルへ曇るアラブの蒼い月
特ダネにわさび効かせる立ち話
天国へ一番近い寺めぐり

岸和田市 高須賀金太

一年の計など立てたことがない
看板娘消えて自販機が威張る
気分的には追いかけるのが楽だ
どう並べ変えても窓際のわたし
出足だけいつも好調なんです

岸和田市 井伊東吉

秋空に誘われ延びる散歩道
仏壇の供花も長持ちする立冬
焼肉のファン恐れぬ狂牛病
久しぶりBK脚光浴びている
鎮魂の勝利叶わぬヤンキース

岸和田市 岩佐ダン吉

長い目で見たらと他人様は言う
ケイタイに囲まれ腕組みがひとり
靴の底へらす友情だつてある
花咲かした土もしっかり褒めてやる
ふり返る道じくざくに歩いている

岸和田市 原 さよ子

ちよぼちよぼのくらし友情まだ続く
被災地へ打算などないボランティア
百年史私の顔も載っている
孫二十歳恋の気配のダイエット
はきなれた靴で出かける老いの旅

堺市 宮本 かりん

無邪気な目心の中を見られそう
待たすより待つてゆとりが出来てくる
流されてしばしやすらぐ淵もあり
いつからか子等に歩幅を合わせられ
健康法真似てあちこち痛くなり

堺市 齋藤 さくら

穏やかに生きて行こうと通夜帰り
ゆつくりと母の歩幅に合わせる
誘惑に負けて進まぬダイエット
頂いたロースの肉が歯に刺さる
衣替えしてるバツタに話しかけ

堺市 矢倉五月

初メール家族写真とおめでとう
元旦にやっぱりネクタイ締める父
家人寝た後が私の持ち時間
京に来て匂い袋は決めた店
今年吹く風楽しみに初化粧

堺市源田八千代

堺市神原文

つつがなく新年祝う三世代

キティちゃんとウルトラマンのポチ袋（お年玉）

元旦生れを祝い嫁にもし袋

子供等の干支の巡りも三周目

本年もカルチャー三昧なる暮し

堺市山本半銭

六度目の午の年なら跳ぶも良し

残照にまだ追い掛けるものがある

嬉しいね歯の浮くようなお世辞でも

年寄りの早起き犬と話して

言い訳を考える間に寝てしま

堺市柿花紀美女

高い雲秋をゆっくり引いて行く

百円市に麻酔かけられ買ひあさり

健康と暇で趣味を梯子する

悲しみ事友も一緒に泣いてくれ

甘え泣き女ごたく二刀流

堺市村上玄也

定年日さえも一日二十四時

芽の出ない男も持っている特技

ドックの日決まり体重減らす妻

描いてたシナリオ狂いだす余生

携帯の音色を競う満員車

非常時の妙な楽しみ異国行く

おやわたしテムズのほとり歩いてる

ルーブルにいるモナリザの小さ過ぎ

シェイクスピアグロブ今夜はわたしジュリエット

ケイタイが時差を忘れて鳴る夜中

四条畷市吉岡修

空翔る天馬そんなにあわてるな

婚殿を迎える包丁音たかし

モザイクが見てよ見てよと誘つてる

襟章をまず見るくせがまだとれぬ

探知機が鳴るかスリルあるゲート

吹田市大谷篤子

デパートの地下でいつもの秋を買う

ベランダで音より早い花火見る

病んでから視点をかえた明るい絵

電話する態度で相手推し量り

三歳の意見に耳を傾ける

吹田市穴吹尚士

花道を歩くと初心消えてゆく

口元は笑っているが目はきつい

へいこらとしても心は許さない

重荷にはなりたくないと独り住む

自分史に書くほどのこと何もない

股のぞき隣も尻を天に見せ

便箋に満ち溢れてた父の文字

川柳とひと瓶下げて友が来る

暑くとも寒くてもよし芋焼酎

しわくちやな手が音頭とる里のうた

吹田市 野下之男

午年は駆けて来い来い福の神

ハワイには行ったつもりで北海道

親しみはギリシヤの神の人臭さ

ステーキを気にして食べる味気無さ

雲間から光差し込むノーベル賞

吹田市 瀬戸まさよ

初恋のようにメールを待ち続け

軽いのが流行る器も人までも

気の毒にこれも閉店不況風

愛想よい変身それでよし老舗

主婦も買う夜の弁当よく売れる

大東市 児玉蛙

確実に夫婦はいつか独り身に

この人と決めた背中に愛を抱く

忙しいと言いつつ母の長電話

何しても物足らざりし独りの身

真剣に歩いた道に報われる

再会に友も白髪趣味豊か

満月を肴に昔語りする

木もれ日の光の中で鳥になる

口惜しいが文明の機器よせつけぬ

許可もなく税や保険をむしり取り

高槻市 江原秀夫

砂に還るバブルの海の夢の城

人は人鳥は鳥の知恵に生き

ふところもこころも冷える早寝する

気むずかしいメガネがずれる孫の声

寂しさに歌口ずさむ虎落笛

豊中市 井上直次

煩惱のなおおさまらぬ百八ツ

羊羹に抹茶で初春はつはるのティータイム

自販機に背筋伸ばせと千円札

自己診断脳のどこかが不調です

八十歳年相応の丸みおび

豊中市 吉田あずき

地球から戦火のやまぬお正月

日の丸の救援物資ガンバレよ

争いの無い世へ逃げてゆく風船

ご時世にいつも遅れる古泳法

何もかもスツカラカンから来た強み

豊中市 田中正坊

羽曳野市 吉川寿美

新年や唐三彩の馬飾る

スタートは横一線の馬の首

戦争を知らぬ男が勇ましい

自衛隊 第九条を知ってるか

空爆のニュースを消して虫を聞く

豊中市 安藤寿美子

ゆっくりと余生を歩く駄馬である

秋は良し新米新酒草紅葉

松茸もシヤツも韓国製でつせ

老人会やつぱり老人ばかりで

午年だ一ぺん馬券買おうかな

富田林市 大橋鐘造

守れない約束ばかり初暦

病院の梯子仕上げは地に還る

ひと時は神を恨んだ癌告知

人情の薄さ見て来た下り坂

人形になって忘れた好奇心

富田林市 中井アキ

寝たきりへ紅葉ひと枝持ち帰る

水を買うそんな暮らしが落着かず

見解のあいだに深い水たまり

だんご虫ころころ戦ない日本

舞台裏主役がひそと泣いている

肩の荷を降ろし安堵とわびしさと

今もって二つ違いの老姉妹

古希の坂まだときめきの火を囲う

幸せに馴れて低温火傷する

残雪や老いに逆らうべくもなし

羽曳野市 安芸田泰子

ときめきを忘れた夫婦の向い膳

栗を剥く指に通える山の音

縁側で済ます小春日の用談

銀杏散る金の小鳥が舞うように

同じ年のお用いから鬱続く

羽曳野市 三好専平

月の砂漠 難民の子の目がひかり

崩れたらみんな瓦礫になる都会

賃下げで労使協調する不況

突きあたりに住んでゆつくり花いじり

わからない時はゆつくり湯につかり

羽曳野市 酒井一壺

何はさて留守の空気を入れかえる

交際家電話をしてもいつも留守

ささやかに夫婦の誕生日

接待の後のピエロの縄のれん

宴会へ医者と坊さん両どなり

羽曳野市 西 村 りつえ

ピカピカの初孫そつと胸によせ
孫を訪うジバング倶楽部入会し
日向へと鉢植持つて派手にこけ
眼底検査此の世が霞ふわふわと
思い過ぎ外れてほつとするカルテ

羽曳野市 川 口 信 子

この上の幸せはない共白髪
心底を見せてあげよう冬の月
毎朝の顔を鏡に問うている
ゆつくりと老いに追われて医者通い
幸せは停年のない趣味を持ち

枚方市 宮 川 珠 笑

実行犯連れて妊婦が闊歩する
漫画字で書かれ法名落ちつけず
譲られた席でケイタイしゃべり出し
飼猫が野良に合流して恋
花ほめたばかりに庭中見せられる

枚方市 森 本 節 子

バイオテロそんな手口もあつたのか
着くまでに千と千尋を読み通す
窓あければ太陽の塔そこにあり
クリオネがいつも平和に泳いでる
琴坂は紅葉に早く興聖寺(宇治にて)

枚方市 安 達 忠 央

たけなわのうたげこつそりぬける下戸
たけなわの宴におはこも出しそびれ
犬吠えず近所愛玩犬ばかり
盲導犬迷わず渡る交差点
子に恥をかかさぬように生きてきた

枚方市 鈴 木 政 子

予定ではアメリカ旅行の真つ最中
一日の食事と同じ落葉掃き
外務省と対立して真紀子節
防毒マスク青春時代を重ね居る
地球儀でスタンの付く国首都憶え

枚方市 寺 川 弘 一

削除キーあると間違い多くなる
ブランドを買えない頃が幸せでした
リーダーを求めて群れる誘蛾灯
動く歩道のつもりで群れの中に居る
日曜日髯も安心して伸びる

東大阪市 安 永 春

こつこつと六根清浄山登る
テロ隠す火種もつ国ゆるせない
小島にも秋が忍んでやってくる
日を追って柿が色づく散歩道
この壁を破ればきつと碧い空

東大阪市 谷口 義

藤井寺市 中島 志洋

友達は死んでも友情はつづく

宴会の隣の席はお坊さん

忘年会あるので退院致します

八十の初恋だってあるだろう

ライバルと同じ香水つけている

東大阪市 北村 賢子

思い出のシーンにいつも母が居る

ジーパンがずり落ちそうなのもオシヤレ

長生きしてと小鳥の水と餌かえる

遠い国飢えと恐怖の子供の眼

まごころへ響く心は持っている

東大阪市 指宿 千枝子

表札の名はモモタロウ ゴリラの子

モモタロウ見てる優しい母ゴリラ

幼児の仕草ゴリラの子と同じ

関東の子らで賑わう法隆寺

法隆寺セーラー服の懐かしく

藤井寺市 楠 昭子

金さらきのおしゃれ私に馴染まない

うっかりと喋ってからの四面楚歌

可愛かったでしょう昔のわたくし

きのうの敵今はわたしの味方です

目の前が真っ暗になる一つの計

飲みながらテレビで拝む初詣で

ひよつとこの面をとつても同じ顔

福耳が儲け話を聞きもらす

万馬券勝ち馬人参貰うだけ

ワープロの賀状に添えた女文字

藤井寺市 太田 扶美代

嬉しさに家族の名前みな呼んだ

不本意な形で消えたところざし

歯の痛み忘れるほどのいい天気

妬いています古い妻ではありませんが

有意義に遣おうポケットの小ガネ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

折られて折鶴の首垂れている

シーソーの相手に頼り切っている

分岐点どうにか通過したつもり

好きなだけ恋とは少し違います

姫鏡 年の始めの願いごと

松原市 小池 しげお

ちよつとした事へ親子で来てくれる

もう年やなあとは分かってきた万年青

おはようとたくさん言うた弁当箱

腹の虫口から出たらもうしまい

歯を磨く言いたいことは言うつもり

箕面市 岩 津 ようじ

ヤダねったらヤダね人間また戦

テロは嫌けれど報復もつと嫌

絶対日本へ来るな炭疽菌

ヤケクソになって読んでる不況記事

ようやるな孫は飲み屋でアルバイト

箕面市 出 口 セツ子

聖夜^{イッ}独り衝動買いで埋める穴

何くわぬ顔が一番難しい

新年へ暗いニュースは厭きました

好景気平和を願う初詣

肝心なことはちつとも言えぬ舌

寝屋川市 柴 田 英壬子

梨むいてひと息入れる原稿紙

勇気湧くポインセチアの燃える赤

飛び切りの秋日和だがもう翳る

現代人になれない携帯も持たず

ポリ^ラピン 缶分別増えつづけ

寝屋川市 籠 島 恵 子

名月という名にひかれ買うりんご

人生の曲り角にもグーチョキパー

バトンタッチやと出来ませ役ひとつ

モノトーンこの世界に好きな色をぬる

カウンターで絵になるまではピエロです

寝屋川市 富 山 ルイ子

仏様のような従姉妹を持った幸

知り合えてよかったと友の褒めことは

付き合いがよいのか友がたんと居る

トイレ一寸貸してと知らぬ人が来る

死神がおいでおいでをして困る

寝屋川市 岸 野 あやめ

初詣で氏神様と決めている

昔風お煮^メ詰めて母の初春

数の子が欠伸しているお正月

松竹梅ひとりぐらしもそれなりに

Eメール仮の自分を名乗らせる

寝屋川市 堀 江 光 子

ひよっこりと好い顔が来る秋日和

言訳をしてる背中丸くなる

言訳のうまくなる子が気掛りに

子離れは早いがよいと祖母気丈

手から手に貰う朝刊温かし

寝屋川市 高 田 博 泉

ライバルに一步の距離を常に置き

定年が来たら元気な父戻る

大安に生れて大安待つて遊き

ひと昔前の浮気はもう許す

手をつなぎ歩幅の合うた老夫婦

寝屋川市 太田 とし子

門松をぼつんと立てててもものし
音のない部屋は平和と言いきれぬ
泣く日笑う日畳八つの真ん中で
寄り合い世帯春夏秋冬の植木鉢
歳のせいになすって今年も呆けようか

寝屋川市 平松 かすみ

丁寧にメモ一月のカレンダー
絶食日ほしいと思うカレンダー
カレンダー旅の予定はありません
塩漬けの株は内緒のひとつです
寒氣して漢方薬の出番なり

寝屋川市 北岡 波留吉

当り年祝い神馬に注連飾り
テロの無い時代を祈り初詣で
臨月の嫁に代りて初詣で
今年こそ再婚せよと子が急かす
お雑煮が一味違う新世帯

寝屋川市 酒井 勇太朗

便り無きは無事の知らせと不孝者
糖尿病皿も茶碗も小さくなり
ライバルと誰も思つて無い気楽
肝硬変嚇されたって止めぬ酒
降圧剤酒を飲むため世話になり

八尾市 宮崎 シマ子

木枯しが三日も吹いて冬に慣れ
金粉の酒を飲み干し客帰る
宅配のずしりと母の米届く
舐めてから子供に飲まず風邪薬
サイレンに犬の遠吠え落着けず

八尾市 高杉 千歩

二千二年自立自立と初祝
幸せな友だ主人の愚痴ばかり
二黒土星変革運に期待する
万一へ六甲の水五リットル
尽してつくして古い女です

八尾市 井尻 民

この先は四の五の言わずひたすらに
やすみなく親指族のEメール
人間のもろさジんクス抱え込む
野に立つて次の思案をねっている
デパ地下で一張ら着ていわし買う

八尾市 篠原 いつふみ

初詣で晴着同士が値踏みする
ベテランの無言威圧に縮こまる
希望聞く決定権は妻にあり
誕生日聞こえるように独り言
飲み放題今夜の月は二つある

真白な頁に昇る初日の出

迎春をみな整えてみてひとり

買った株ばかりをテロが狙い撃ち

人の和の内側にいる駄馬でよし

己れ打つ鞭をもっている走馬

へそくりを足して月末切りぬける

しゃべり過ぎだんだん傷を深くする

早よ寝てもおそ寝ても朝寝坊する

キャベジンの瓶に一円貯めている

よくしゃべる今日はこの人淋しいんだ

無愛想な茶店もはやっているもみじ

家族からはなれひとりになる貴族

一つずつ傷はなやかにして加齢

一呼吸おいてこれから先の知恵

生き恥と一緒に今日を脱皮する

歳のこと忘れ挿木に余念無き

姑を偲び菊を次々活け添えて

湯豆腐の湯気に言いたい事納め

吊し柿ゆききに取りられ縄のれん

もう母の掌には戻つて来ぬ手毬

八尾市 内海 幸生

八尾市 吉村 一風

八尾市 宮西 弥生

八尾市 長谷川 春蘭

人の欲へロポット今に横を向く

生き甲斐に夢のいくつも編み足して

速効の薬気になる副作用

器用さがわざわい主役には遠く

爽やかに生きる善行積みながら

セクハラを言わずホステス良く稼ぐ

ど忘れが多い自分に腹が立つ

自由奔放そんな男に憧れる

腹の立つ時に割る皿きめてある

切り替えが早いストレスさようなら

初詣で景気回復祈る波

バックした一年前の鏡餅

三代にわたる秘伝のたれが生き

お歳暮にそつと忍ばす魚ごころ

好きなもの届いた歳暮忘れない

登り来た汗にむくいる岩清水

見えぬ手に支えられての一年間

君思うゆえに我あり一周忌

ダイヤきらきらなぐさめられることはない

幸せな過去を力に生きていく

大阪府 米澤 俣子

大阪府 澤田 和重

大阪府 初山 隆盛

神戸市 木村 貴代子

神戸市 山口 美穂

難題も視点を変えただけで解け
ジングルベル不景氣暫し忘れさせ
願いごと多くて神さま迷てはる
地図のない道歩く旅が人生か
大根一本抜いて貰った散歩道

神戸市 池田 善守

人の道クネクネと先見えず
もつたいない儉約の性根は深し
わたし先俺が先だと死に談義
副作用おさえるためにまたクスリ
一方通行それでも見てる右左

伊丹市 小熊 江美

お年には見えぬといわれ良い気分
娘がくれた帽子に飾るバラの花
破格値といわれつられて買った服
幸せは今日も元気でカルチャーへ
秋澄んで予定あふれるカレンダー

相生市 中塚 礎石

辞書にない意味がちよっぴり胸にある
歳の順明治が居ないのが寂し
言いなりに絶対ならぬヤジロベ
川柳の小径で拾う夢の数
えんやこりゃ軌道修正夢の道

尼崎市 長浜 澄子

氣負わずに話すと花も樹も笑う
円周を計り兼ねてる定年後
異分子もほど良く混じり起爆剤
躓いてから本番の四コマ目
シンフォニーホール之余韻と歩く御堂筋

尼崎市 奥山 美智子

新しい思いを抱いてお正月
孫にやる充実感のお年玉
正月は買ったおせちで華やかに
強力なパンチ菓の副作用
生きるとは矛盾だらけが胸を突く

尼崎市 内田 美也子

立往生させて紅葉天下取り
安らぎを貰う絵手紙菊香る
行き先を大きく貼って母の留守
年金より先へ出たがるお付合
多事多難無事乗り終えて除夜を往く

尼崎市 松下 比ろ志

落葉焚く紫煙一条秋昇天
置き去りの球一つあり暮れなずむ
こおろぎ鳴いて独り飲む酒佐し
道端に座って食べる子の世代
人の森に愛憎絡む蔦葛

尼崎市 春城 武庫坊

天馬空翔けて平和を祈る新春

快いだるさで夕陽眺めてる

空の虫籠まだ鳴き声が残ってる

美術館出ると汚れた街に会う

木枯らし一号食べたくなったキムチ鍋

尼崎市 春城 年代

愚痴はみな私に戻ることと知る

コスモスの矮性むかし恋うている

とことん老いて居直るような力湧く

おもしろい縁だと気付く夫婦とは

ドイツでは氷雨が降ると孫の声

尼崎市 的場 十四郎

少子化の午後のブランコ風にゆれ

言い負けて妻はいつものだんまりこ

孫の名を太く大きく書く茶の間

造花にも実り果てたい夢がある

ぐるぐると喋り回って妻達者

川西市 米原 雪子

ほろ酔いに冷えた外気が頬を撫で

手術後の元氣医療の有り難さ

嫁の留守食事当番続きそう

朝昼の温度差ファッション狂わせる

挿し芽からお札のように花が咲き

川西市 西内 朋月

食って寝て飲んでるうちに深海魚

すぐばれる言い訳してる酔っぱらい

気の合わぬ人も来ている七回忌

季節感狂わず苺食べている

持っている金は残さず逝くつもり

川西市 松本 ただし

人情のかけらまだある社会面

テロの二字見えぬ新聞探したい

人生の十字路青が出てこない

もう少し生きよか蚯蚓這うている

クオーツ時計正確すぎて腹が立ち

三田市 久保田 千代

歳月を重ねて気付く無駄なこと

本心が行き交う茶の間罪がない

本物の淑女オホホと笑うだけ

札束の威力魂までも抜き

勢揃い母に嬉しい日を贈る

宝塚市 嵯峨根 保子

還暦になかった古稀という美学

だんまりが下手で何時でも損をする

原点にグリコのおまけ持つ仲間

もう歳の親に隠して叱られる

執刀医ステキに見えて予後がよい

西宮市 亀岡 哲子

良い名だと言われ信じている老後
蜂蜜入りの梅でまったり生きている
咳コンコン水飴巻いてくれた祖母

ままごとの料理上手なお父さん
泣きに来た子の恋人と泣いている

西宮市 西口 いわゑ

絵心のないのがくやしきもみじ狩り
脳に巻くネジが欲しいと思う日々

どんぐりの数珠に石仏目を細め
ユニークな答えをくれた三歳児

助言したはずの事件に巻き込まれ

西宮市 牧 渕 富喜子

さし芽した花が今朝咲き秋纏う

無理をせぬつき合ひだけになって 秋

散り際をこんなに燃える掌に受ける

まだ知らぬ風景があり迂回する

一日の終りを告げる円相場

西宮市 秋 元 てる

自分では欲張りだなど思うてない

最後には面倒掛けたと眼が言うた

当選しそして地元を忘れ出す

相手ない少年ボール空へ投げ

ばんやりと見てたらティッシュ二つくれ

西宮市 山本 義子

母の小箱今でも詰まる子守唄

マンションも長年住むとわずらわし

ラーメンの見えないほどに野菜入れ

両の手にたっぷり油さしてやる

いたわれ嬉し哀しの歳となり

西宮市 菊池 トミエ

年賀状だけは書いてる筆不精

同窓会何年振りかの見栄を張る

方角にうるさい父は暦出し

焼芋の笛につられて飛び出した

ぶどう狩大きな房を嬉しそう

姫路市 古川 奮 水

ビールから水割りまでの忘年会

好物を盛り上げ祖父の誕生日

髪染めてEメール待つ初詣で

表題につられて買った週刊誌

体重が増えて暫くビール断つ

兵庫県 大谷 幸次郎

小回りの利きそうにない太い腹

姑さんの眼鏡にとても叶うまい

木枯しに路地を落葉が逃げまどう

間引かれる立場の気持など問わぬ

やりくりがつけば眉間が晴れてくる

奈良市 米田恭昌

金の要る節目子と孫やつて来る
目立ちたがりの本音はきつとさみしがり

愚妻呼ばわりしてたお人の紙おむつ

姑の世話苦勞汲みとる夫がいる

終電を待つおっちゃんの背がまるい

香芝市 大内朝子

終章の恋をしてやるぞ今年

まわり道ムーンライトに酔うふたり

老いるつてやつぱり淋し木の葉髪

友達のいいとこ取りをするメガネ

はちきんと言われて弱音など吐けぬ

大和郡山市 坊農柳弘

オルゴール壊れたままの冬の章

母さんを囲むとまーるい風が吹く

流麗なひと筆がくる年賀状

小振りでも新春祝うしめ飾り

餅を焼く姑の手捌き嬉しそう

大和高田市 岸本豊平次

わが人生凡人の役やってます

ここの嫁も夫を氣遣う淡い味

太つてはいけない秤容赦せず

道端に座つた若者避けてゆき

若者がこんなに居たか秋祭り

奈良県 渡辺富子

隠しても感情線が乱れてる

出会い系で恋に酔わせる罪な嘘

親に背き子に背かれる人生譜

薄っぺらな義理を包んだのし袋

求人欄拡大鏡で見る日課

和歌山市 山口美千子

屁理屈をこねて正論遠去ける

惚けぬよう家事分担もやつと馴れ

性急な伴侶エンジンかけて待つ

テロニュース脳裏かすめた子の安否

地下街で迷い一会の風の情

和歌山市 木本朱夏

甘栗の殻積みあげて冬麗ら

猪鹿蝶覚えた指がよく笑う

人生の秋には秋の眉の位置

着膨れて恋に何年遠去かる

民族のDNAが騒ぎ出す

和歌山市 玉置当代

まんまるい顔に癒やされてるオフィス

秋風に野菊揺れます母の忌に

菊の花手向けて在りし日を偲ぶ

ありがとう野辺の送りへ紅葉散る

譲り合いの勞りあつて行く余生

和歌山市 楠見 章子

水ゴクンゴクン百まで生きる音

ご先祖さま菊に噎せんでいらつしやる

含羞みがみえる可愛いおばあちゃん

ソプラノの音色にお姫様おわす

新聞紙石やきいもを恋しがり

和歌山市 牛尾 緑良

みんなおいで秋の実りが呼んでいる

秋の夜長を休んでくれぬテロと事故

一気に冬 笑顔で心温める

善人でいよう光射す日まで

手を合わすことで半分減る悩み

和歌山市 川上 大輪

パソコンを習おか仕事やめようか

思い出の所々を虫が食う

ライバルがこつちを見てる笑つとこ

秋を食べ尽くして冬を待っている

日曜日電話も鳴らず人も来ず

和歌山市 福本 英子

出し遅れないよう年賀ハガキ買う

生返事言いたいことは明日にする

座禪草この世の鬱をひき受ける

ポックリ寺へ行くのに薬飲んでから

丁寧読んで効き目が薄らいだ

和歌山市 松原 寿子

涙粒ほどの夢です掌に宿す

杭いっぽんになつてあなたを守り抜く

一念の瞳で鏡拭き直す

綾取りの縄れを解いている温み

繕うた翼ではるのドア開ける

和歌山市 田中 みね

鮫鱈には納得ゆかぬ吊るし切り

寝た切り十年母よ笑顔を忘れたか

在宅介護母は幸せだと思ふ

天気晴朗うれしい知らせ聞く電話

どちら様もどうぞお先に終の道

和歌山市 桜井 千秀

ウツソーホントのけぞる程でない話

焼肉もみんなと食べりや恐くない

木枯らしへまだ立ち向かうペダル踏む

メール洪水何方もお気の召すままに

しんしんと凍てつく月と差し向かい

和歌山市 山根 めぐみ

古里のいくさが辛いハナミズキ

グツグツの音から匂い出すおでん

姑に洗脳されていい嫁に

おくれ蚊がおつとりと来てしたたかに

ひきつった笑顔をみせているエール

和歌山市 福井桂香

サバイバルゲームに賭ける春の駒

嘶けばきつと吹き飛ぶ不況風

子等の夢わたしも包み込む木馬

迷走してやがて眠りにつく夜明け

一歩ずつあるくクオリティ・オブ・ライフ

和歌山県 中後清史

慣れてくるほどにマナーが乱れます

頭では覚れぬことを知る身体

その時は喉の支えを吐き出そう

煽てにはもう乗ってこぬランドセル

合掌の手からこぼれる悔いの数

海南市 谷口義男

ポックリと逝ける事だけ祈る老い

青春を国に捧げて古希なかば

ド忘れをすればボケたとけなされる

しわくちやの顔が笑って同期会

優先席で狸寝入りを決める奴

倉吉市 松本よしえ

ほっとかれ不機嫌になる酔っぱらい

赤ちゃんはふわり重くて温かい

諦めはまだまだ早い残りくじ

パートナー病んでステップ揃わない

声出して明日のスピーチ読んでみる

倉吉市 淡路 ゆり子

我が国の日の丸立てるチャンス来る(皇太子妃ご出産祝)

どん尻も神の加護だとあせらない

早寝して明日の元氣たくわえる

爪伸びる生きる力は溜めておく

袖のジャムはじめて作る乙な味

倉吉市 猪川 由美子

やり過ぎて結局カヤの外になり

死ぬるまで恋の炎は燃やします

許可も得ずハート盗んだ憎きヤツ

花嫁へ大きな期待手控える

臍帯は息子の嫁へ預けます

倉吉市 野口 節子

身の内の揺れを鏡に咎められ

情けたつぷりいただきました旅帰り

見つめられ枯木わくわく芽を吹いた

忘れもの日常茶飯になって来た

欠伸こらえて自慢話を聞いている

倉吉市 米田 幸子

じいちゃんの寓話を孫は丸暗記

枯木でも女の性はまだ芽吹く

かあちゃんが互角にものを言い過ぎる

傾いた軒端に妻の突ツ支い棒

許容量誰にも負けぬ父の胸

倉吉市 最上和枝

米子市 木村春枝

賞味期限切れたわたしを炊き直す

あらしいは嫌いそばの花揺れてます

露ほどの気遣い人の隠し味

こぼしては拾うしかない愚痴の玉

枯れそうな脳へお水を張っておく

倉吉市 牧野芳光

飲んで耐え笑顔上手になりました

達筆でないが私の筆で書く

欠航に安堵している連絡船

幸せが減るから今は喋らない

冬の景たった二色でこと足りる

米子市 中井ゆき

いなないて駿馬は青い空に跳ぶ

三十年紆余曲折の一人旅

午年にけられぬように先をゆく

コスモスは風の気配に敏感だ

席順が決っていてもゆずり合う

米子市 光井玲子

珍しい父の冗談しまっておく

飢えた日のうどんはまるで宝もの

売薬ですぐに反応こわくなる

戦いの犠牲となった馬悲し

馬の足に徹した父の一言よ

諸肌を脱いで燃えてる大太鼓

うどん屋は肩の凝らない旅仲間

ライバルが走り出すからまた走る

喧噪の地球憂いて月は冴え

今年こそ天馬の運ぶ平和待つ

米子市 白根ふみ

ぶな林混むのは県外車ばかり

シルバーが林のごとく三脚を

不真面目な冗談だから笑えない

退屈で大事なことを忘れてる

退屈になると無口な友と呑む

米子市 林瑞枝

大国さまの出雲とっても親切だ

神さまの青い素敵な未来たち

小さい倅アフターサーピス眼科から

冠雪の大山につこり夢を売り

蝶になる毛虫落葉でお正月

米子市 神庭詩郎

受験する孫有り祈願の初詣で

まだ八十もう八十歳より若い

夫婦茶わん金婚式の記念品

齢重ね少し頑固になって来た

資源保護割りばし集め紙つくる

人妻が意外な愚痴を吐く散歩

鳥取市 杉本孝男

ライバルの妻はひと際美女に見える
飲み過ぎは特にうるさい妻である
夕暮れの寂しさを連れる縄のれん
言い訳のコントを抱いた朝帰り

天かける馬へ今年の夢託す

鳥取市 春木圭一郎

おだてれば驚馬もそこそこ走り出す
照れもせず白馬の騎士を演じ切る
馬が合う友はやっぱり酒が好き
夢運ぶ日本一の駄馬目指す

初夢は天馬に乗って宇宙旅

鳥取市 富山檳榔樹

脱皮して人生一度変えて見な
無限への道仏に悪魔良き伴侶
夢に出る起床ラッパが胸を刺す
ダルマさん不況に強く出番です

鳥取市 近藤佳子

夕焼が好きだった頃大家族

先を読み出世街道踏みかため

母さんは美人だったと言う鏡

突然の友の訃過労との噂

月のない空はやっぱり寂しいよ

締め飾りと御神酒が初春の幕を引く

鳥取市 西村黙光

お神酒供え無病息災祈願する
ワンカップ新春の幸せ独り占め
ストレスの避難場所だよ縄ノレン
消え失せた夢の構図を酒描く

遠回りゆっくりしよう陽は高い

鳥取市 倉益一瑤

歩かねばこのまま風化してしまふ
満月に呼んでみようかかぐや姫
大粒の涙にこころ吸い取られ
乳母車ばあちゃんの夢少し乗せ

五十年「おい」よりほかは呼ばれない

鳥取市 岩原喬水

猫の子は増え過ぎひ孫まだ出来ぬ
黴菌の恐さ大砲では打てぬ
老化して脳がだんだん軽くなり
餌よりは安い卵を産まされる

鳥取市 夏目健一

あかぎれは遠い昔の語り種

ありふれた意見ばかりで寒くなる

難民を思い一食断食す

九十の母と握手がしたくなる

人生を先送りしてひとり酒

鳥取市 美田 旋風

背くらべの跡が家宝の四畳半
寶石をせびらぬ妻へ気が引ける
感動の映画は銭を出して泣く
風向きが変わると手のひらも変える
沈黙のあの顔ノートと読んでおく

鳥取県 宍 子

老人会無縁ワタクシ高齢者
ねじれ戸を押して叩いて引いてあきらめ
子らに継ぐ地球丸ごと洗いたい
これ以上地球穢さぬ春であれ
初日の出世界隔ずみ清めてよ

鳥取県 奥谷 彩子

夕焼けに明日の幸せ予感する
貴婦人の菊をさかになに酒を酌む
うれしさも発酵させて冬ごもり
老けたくなくて鏡に呪文かけてみる
ゴーゴー踊り踊って元氣冬木立

鳥取県 羽津川 公乃

大根の白さに嫉妬秋深し
宝くじ時どき買って運試し
やりくりの頭痛抱えて瘦せもせず
ユニクロで胸算用の冬支度
誘惑に負けても悔いの無いケーキ

鳥取県 西川 和子

晴れの日も胸のつかえが付きまとう
検診の数値正常範囲内
眉を引く鏡はミスを見逃さぬ
難民の寝ぐらを思う夕焼けよ
盆栽を並べ身動き出来ぬ庭

鳥取県 岩崎 みさ江

ワルツ舞いながら落ち葉は地に還る
安心をさせまい老いが加速する
挑戦の峠は高いほうがよい
峠から向こうは雪の無い世界
うらなりの茄子にもあったへたの棘

鳥取県 吉田 孔美子

気力体力峠を押し上げる
峠には宝探しを用意する
さしかかる峠は吹雪母の里
快樂の帰路に峠が仁王立ち
別れた峠は今もうつくしい

鳥取県 石尾 かつ乃

遠まわりしてから見える山紅葉
故郷の土の香りを御近所へ
初恋の人とぼったり汽車の席
くり返し読んで飽きない娘の便り
三DKせめて箱庭ベランダに

鳥取県 津村 八重子
むらさきになり紅になり舞う落葉

久々の友の見舞に涙ぐみ
今日もまた家族の温さにかこまれて
流れ星明日の体調気にかかる
ゆめにうく亡母の温顔やさしいな

鳥取県 近藤 春恵

税金のいらぬ空気に感謝する
機密費だワイロだ税が誤魔化され
よく動くカードで口座軋み出す
リハビリの足少しずつ動き出す
村長が動いて村が活気づく

鳥取県 黒田 くに子

廃校を包み夕焼け美しい
鏡にうつる顔に歳月ふりかえる
童謡の音痴を五線譜が笑う
野菊の歌うたつて野菊に逢う散歩
テロの余波のつびきならぬ日本丸

鳥取県 太田 幸枝

屋根裏でこっそり読んだラブレター
合わせ鏡自信あるかと笑つてる
筋の良い嫁をもらつていびられる
ひめゆりの塔に乙女のさげび声
テロの余波世界の空気が狂わせる

鳥取県 山本 正光
紅葉のもえる庭木が二本ある
タクシーに近道指図しきらわれる
アルパムのみんな終ったことばかり
七十六鯖の缶詰あけて飲む
ときめきもまだあり今朝も髭を剃る

鳥取県 田村 きみ子

針と糸忘れず持つて行く旅行
傍観者にまだなりきれず世話をやく
七色の虹に乗れたら行く宇宙
七癖もすっかり減つて一歩引く
計量カップとても真面目に使う姑

鳥取県 原 みさを

アフガンの素足へ続くうろこ雲
ラマダンの砂漠を月が見ておるぞ
老いという目盛り足から刻まれる
風いでいる鏡は知らぬふりをする
絞り込んだ反射鏡から火をもらう

鳥取県 権代 康女

なめらかに出来た夫の手打ちそば
場なれしてだんだんほんね出してくる
新しい布団で今夜暖かい
うつぶんを晴らす電話の長いこと
じゅうたんの赤い心がおちつかぬ

鳥取県 谷 口 次 男

鳥取県 堀 江 芳 子

そのあととは必ずケンカする二人
約束は霧の如くに消えてチョン

黒幕は大臣さえも弄ぶ

不景気も日本が一番平和なり

どの顔もコビーのような群雀

鳥取県 上 田 俊 路

老年のあせりパソコン笑つてる

口下手の友が多弁のEメール

秋風が考え方を変えさせる

コスモスに呼ばれ気軽な旅に出る

輝いていたく仮面をはずせない

鳥取県 橋 本 多 哥 由

肩書きは凄いが天下とれないよ

言い訳に嘘一ついれ感謝され

看護婦を嫁にもらって遊んでる

苦労して悩みが増える恋をする

森の中毎度女神に逢いに行く

鳥取県 林 露 杖

汐風に神代の息吹美保ノ関

健やかに一汁一菜掌を合わせ

家中の時計がどれも合っていない

自分史に真実書ける訳がない

年よりを自認してはや二十年

騙されたほうが気楽に顔会わず
包丁を研いでさくさく音で切る
爪切って心せいせい雨しとど
戦盲の元気が沈む物忘れ
総入れ歯でも口惜しさを知っている

鳥取県 多々納 テル子

鉄瓶と未だ気長にお茶をのむ

ラブソング歌って心リフレッシュ

順々に山塗り替えて秋の彩

青春はいつまで続く古希の坂

山と谷歩き続ける人生譜

鳥取県 森 茂 美

鳥たちを育てて生きる野よ山よ

軒ごとにさんまが香る過疎の里

女房へ風がささやく洗濯日

老妻と二人で越えてきた峠

美しい山を飽かずに見えています

鳥取県 伊 藤 寿 美

秋深し母が居た日の柿のれん

積み残した夢を息子が積んでくれ

自己嫌悪ごしごしと手を洗う

お寺から仏語暦が来る師走

ちちたちが蒔いたむかしを刈っている

松江市 川本 畔

母逝つて鍋が重たくなつた秋
ひそひそと谷から湧いてくる噂

一族の争い背中向けている
運命線辿れば空へ消えている
眼裏に巡礼の鈴鳴り止まぬ

松江市 津川 紫 晃

冬からの使者の名刺は散る紅葉
首ふれば首の音する秋の暮れ
出迎への傘で夫婦の話する
ポストまで行くとひらめくことがある
前略と書いて貧乏ゆすりする

松江市 小川 注 湖

八十路生き良心捨てた日もあつた
お祝辞が短く後は盛り上がる
テレビつけ昼寝しているおじいちゃん
辛口の苦言素直に聞いている
満月に童話とシャトル同居する

松江市 銭山 昌 枝

トツプにもピリにもならず越えた坂
親に似ぬ美形の孫を連れ歩く
手古摺った子が真つ先に飛んで来る
評判のうどんの長い列に居る
新調の服で行きたい所がある

松江市 佐野木 みえ

借りた傘返してバラの花に逢う
傘の雫おとせば虹が鮮やかに
紺碧の海に沈めた日記帳
紺緋修羅場潜つた藍の色
遠花火儂く消えた夢一つ

出雲市 伊藤 玲子

秋霖に編棒の手もハイピッチ
障子はりせめて温もりある暮れに
うれしくて靴が片方とんでつた
小さな手つなぎまんまんちゃん参る
探す手を握れば母は眠りこむ

出雲市 久谷 まこと

無人駅今日はちらほら初詣で
弥陀の前しばし無心の手を合わせ
運不運背中合わせにバスは行く
ブライドをまだ持っている腹が立つ
幸せは四季折おりの花に逢え

出雲市 城 多喜

玩具ではないが電話とよく遊ぶ
とれたての話が弾む電話口
嫌なこと嫌とはつきり言っておく
落葉舞う終の踊りを見せながら
横切つた犬にたたらを踏まされる

出雲市 竹 治 ちかし

出雲市 岡 あきら

組皿が壊れてただの皿になる
三世代パンも御飯も同居する

感動もなく銀飯を食う怖さ

南天の箸に茶碗は左馬

コップ酒似合う男の太い指

出雲市 青 山 久 子

お隣と温いリズムで話す

ひとときのほかほかパンがあればよい

いつまでも笑っていたい傘の中

友が来る部屋をまあるく掃いておく

ケセラセラ口笛吹いて未練刈る

出雲市 吉 岡 きみえ

ポットと話そうお湯を注ぎながら

七三の湯割りがわたしを喋らせる

酒とろりとろりと美味し秋深む

雨しとど うとうとねむくなりました

年寄りにどこか腑抜けたところがある

出雲市 岸 桂 子

泣いて笑って束の間だった半世紀

もう少し素直になれば描ける花

万華鏡のぞいて秋の日の無限

スイッチを切って人間らしくなる

情熱という武器だけは持っている

その秋は澄みきっていた誕生日

産婆より先に飛びだし六十九

させられる写経如何ほどある功德

人の顔した鬼という同じ星

反面を盗み支えとして生きる

岡山市 川 端 柳 子

お利口な馬を選んで初ごよみ

満開の花かんざしがゆれて新春

暇人のひまデパートのお買物

日本人です自慢の種が徐々に失せ

思い出し笑いえくぼのお裾分け

岡山市 井 上 柳 五 郎

まつ白い日記帳にて初春迎う

生酔いへひらめくヒント酒がくれ

年寄りの小金を政府あてにする

またふえた薬しつかり呑んでます

老妻に尻たたかれて冬支度

倉敷市 小 野 克 枝

温かくきびしく母の月丸し

長男に川の深さを言うておく

通過駅風の想い出ふとよぎり

天秤にかけると恐いことになる

貝の砂妻に言いたいことがある

倉敷市 井上富子

体重のコントロールもままならず

投技で見せる土俵の晴れ姿

新しい工夫を入れたフライパン

風を読み風を掴んだ奴風

別嬪の方へよろめく千鳥足

岡山県 富坂志重

何もかも忘れる事も愛なのか

二つ有る耳でまたまた聞き漏らす

健康とやさしさだけをくれた父母

一杯の酒から漏れた父の秘話

色々の思いを隠す小引出し

岡山県 大石あすなろ

塩壺の位置は変えない妻の意地

昇る陽に生きるよろこびもらい受け

二日酔明日も仕事が続っている

出会い系サイト親には内緒です

首筋が賞味期限という鏡

岡山県 山本玉恵

燃えるものそつと抱えて風の中

カタカナの花の名前に買いそびれ

納得のゆかぬ答を引き摺って

ユニークな名刺で顔を売りに出す

ひとり住む砦に冬のしのび足

竹原市 岩本笑子

鍋の中から喝采のリズム取る

一本の線だが県境霧の中

虹を見た記憶お手下つないでた

葦もススキも私も急がせる冬だ

熊本県 岩切康子

湯上がり足の足に硬貨機マツサージ

背泳ぎに足の衰え自覚する

大鍋の出番お味噌の豆を煮る

定年後講演会や旅の伴

香川県 瀧井勝

年一度墓に不孝を詫げる旅

外に出てみれば日本もよい国だ

背かれてなお許してる母の胸

難民キャンプ心に笑顔いつ戻る

弘前市 相馬銀波

雪予報重ね着ばかりまだ微熱

演歌にも時どき見える横文字よ

核芯は死守する秘書の予定表

夢ひとつ抱いて明日へ初詣で

弘前市 岡本花匠

わだかまり解けて掻き揚げ良く出来た

やけ酒の愚かさ論すわさび漬

あやとりの橋が郷愁誘い込む
雪予報聞いて心の窓曇る

弘前市 高橋 岳水
押し切ったしこりが残る多数決
横車押しして墓穴を深くする

車座になれば本音が言いやすし
働いた男の背なが夕焼ける

弘前市 小寺 花峯

以下同文で授かっている感謝状

僕だけの秘密を隠す足の裏

饒舌な人とは意見噛み合わせ

行く先を語らぬ雲の一人旅

横浜市 小野 句多留

振り向けば男言葉の小ギヤル達

オムライスお前は八方美人だな

秋深し蚊の刺す針の淋しかり

ゴネ得といわりよと動かぬ一軒屋

富山県 増田 紗弓

戦果ない釣り糸らしい孤独な背

万歩計を森へ連れ出すほめ上手

十八番出て補聴器オフにしておこう

生きてきた錆が書かせる一行詩

静岡市 安本 晃 授

矢印のない一本の好きな道

仕合わせを知ると靴音軽くなる

割腹の刻を描いて冬木立

過疎地帯父のレールは日々軌む

富士宮市 渥美 弧秀

初日の出孤高の富士へ合掌す

くじ運がよいと妻にはおだてられ

泣くまいとしても臉があわて出す

富士山の重唱妻も声弾む

滋賀県 中 宗 明

ゼネコンも青息吐息不況の世

小包にぎっしり詰める親の愛

予定表ぎっしり記入息詰まる

あさはかな考え捨ててのんびりと

奈良市 天正 千 梢

あなたに尽くすちよつとだけ損をして

一粒の種が生きざま変えてゆき

今と言う時間おいしく味わって

滝落下轟きを吸う小宇宙

檀原市 居谷 真理子

行ったことないけど酔えばラテンの血

ぬくい手を誰も握りに来てくれぬ

ペットショップ特価の犬の大あくび

思い出は体臭のない人でした

三田市 北野 哲 男

番犬に合鍵括って先寝ます

まあええか明日明後日も二人きり

来年は敬老パスが来るらしい

へらず口叩く間はまだ可愛い

伊丹市 山崎 君子

福助だるまお江戸の香り菊花展
来世にはせめて孫をとひとり言
シヨウウインドー白馬に平和のせている
電話口無沙汰の詫びが長くなる

西宮市 井上 松煙

人きらい犬に情けを貰つてる
盆栽の苗木を採りに老い一途
絵画展出品をしてうれしい日
生き方に上手下手あり定年後

松江市 安食 友子

ひっそりさんも燥ぎやさんもおころりよ
つごもりに何故かわくわくするポスト
怯弱へにんまりとして寄るサタン
てくてくと傘を駆まで純だった

出雲市 板垣 草丘

注連で青刈り稲の生きる道
晩秋のアミタケ汁は隣から
予告より長い命へ聴診器

何処へ行く日が暮れてから出るカラス

出雲市 板垣 夢酔

ビュービューと独りをおどす寒吹雪

今日を終え吐息吐いてる雪電車
凍えつくからだ熱爛溶きほぐし
降る雪に炬燵で猫はじつと耐え

出雲市 石倉 芙佐子

赤白のワインで静かに春迎え
逢いにいくワインレッドの服を着て
きらきらと火花が散つてくるお酒
さよならのワインを知らず夜は更け

出雲市 小玉 満江

めんどろな話になった忘れ物
もう若くないと膝からSOS
坂道でピンポン玉は疲れきり
約束の実をたずさえて渡り鳥

出雲市 富田 蘭水

人も紅葉も刺激強いと映えてくる
親と子の合わぬ意見が皆光る
癌検診でいねいなナスめぐり逢え
ピフテキの牛を信ずる肚を持つ

大阪市 鶴田 遠野

我がままに超三流で生きている
付き合つた散歩で妻にほつとかれ
あれほどの化粧あつさり落とす妻
倦怠期妻をだんだん派手にする

大阪市 榎本 舞夢

うれしくてどう告げようか迷つてる
母さんの弁当いつも残り物

クラス会元気なだけで目立つてる
おしゃれた時に限つて出合わない

大阪市 岡本久峰

政治家の無策日本ひび割れる
細々とのれんを守るやせ蛙

国境の親日感にふれた旅

失業者溢れ木枯し吹き荒れる

池田市 岡本吉太郎

あんとと呼ばれドキッとする今日びです
許してる親の背を見て涙する

陰口を言わずに過し今がある

理想を掲げ革命しても死人の山

岸和田市 宮野みつ江

親友の電話はいつもだしぬけに
プロポーズされてんうどん食べながら

だしぬけとちがうよ熟慮断行や

時間ならやりくりせずにとんとある

岸和田市 藪野けい子

アルツハイマーになるのかな今輝かす
あと五皿コースを頼む焼肉店

四国三ヶ所残して余命つなく

手と手をにぎり会話する友の温もり

岸和田市 原苑子

新しい年あたらしいこと生み出そう
幾歳月門を守って松凜と

ひっそりと咲いて好かれる福寿草

鏡台に葉専用小引出し

岸和田市 木村正剛

稲よりも稔るセイタカアワダチソウ
襖越し妻の躰にひと安心

気苦勞に惚ける暇ない老後かな

総入菌味も素つ気もない鯛(するめ)

豊中市 樫谷郁子

老いの身は子に従うて引越しを
思い出が両手に余る嗚呼伊丹

新住居鍵穴探す幸さがす

岩かげに誰を偲ぶか萩の花

豊中市 岸田知香子

目覚め好し生ある今日のスケジュール
暇と金惜しまず並ぶ菊花展

コードレス内緒話は二階から

木枯らしを耳に宅配灯油待つ

吹田市 早川棲世

かすがいになった幼児期だけの孝
ニュータウンモダンな産科駅ごとに

不況日本に外人がきて稼ぐ余地

主婦誤算パトカーがきたラブゲーム

茨木市 堀良江

無防備で腹出して寝る猫のひげ
ピエロにはピエロの野心幕が開く

出棺を見送るパール三連で

デートだな新のバッグを持って出た

守口市 結城君子

政治屋とノーベル賞の顔くらべ
眼の奥に残る紅葉の南禅寺
おととつと風に負けるな影法師
眼帯の下でうずうず旅予定

守口市 井上桂作

それ邪推心淋しい友と知り
人嫌いやがてあなたも嫌われる
思い出を手帳に溜める旅に出る
枯山水大雨降って水流れ

泉佐野市 山本蛙城

先人の試食の凄さ蛸海鼠
質屋出る気分百円シヨップ出て
レジ袋までもとせこい税の策
ラマダンを切り札にして蟻地獄

堺市 黒田真砂

住所録だんだん朱線ふえて秋
胃カメラと聞いただけでも胃が痛む
知ることにくらべ忘れる事多く
都合よく忘れることも生き上手

枚方市 二宮山久

孫帰るお部屋に写真飾りつけ
ひい孫の話へ母はまだ元氣
二十余年我が家の裏に立つ病院
二〇〇一年炭疽菌にゆれた年

鳥取市 福田登美

動けてるうちは心に化粧する
追い風は待たずゆつくり風を読む
重い荷があるから命張っている
つましくも心豊かに今日生きる

鳥取市 前田一枝

浄土行きになるかも知れぬ切符買う
竹の子も一肌脱いで垣根越す
野菊にも大輪に咲く夢がある
もすが鳴きもみじ色づき山下りる

倉吉市 山中康子

太陽に恥じる地球の争いを
極めたい老母のころにほんまもん
今日という一日の味まろやかに
究極はテロ撲滅を乞い願う

米子市 門脇晶子

コスモスの花へストレス置いて来た
私のメガネいくら拭いても老眼だ
毎日の食事を同じ席で食べ
米子弁だけの陽気な酒の席

米子市 永井三津子

忍耐と泣きなき越えた山もある
老いるとは他人事だと思つてた
視力失す目にも優しい陽の温さ
喜怒哀楽亡夫に語つて二十年

第68回
大阪川柳の会

日 時 2月5日(火) 17時開場・18時締切
 会場 サンケイビル本館322号室
 会 場
 題と選者 △器用・牧浦完次△囁く・久保田元紀
 △宴・前たもつ△笑う・磯野いさむ
 各題2句 席題なし 会費千円

よく来たね峠の風は待っていた
 鳥取県 国 森 武 子
 きれいだよバラに一人で声をかけ
 鳥取県 乾 喜与志
 バラ作る息子に腹で感謝する
 世界中いくさの罅にも聞こえ
 靖国の祭りいよいよ思案する
 天神さんの梅はおいしく漬けてある
 道鏡と言う人と会う日を逃がし
 岡山県 矢 内 寿恵子
 愚かさに徹した母の子育て期
 人間のエゴたしなめるパンの耳
 巻き戻しすれば息づく半世紀
 美しい言葉の中に含み針
 岡山県 福 原 悦 子
 太鼓打つ男の貌が生きている
 夕焼けに詫びねばならぬ罪のかず
 化けるのは下手でも信用されている
 決断の朝を踏みだす眉濃く

第3回 文学ルート川柳募集

文学ルート (松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市)

募集作品 文学ルート (5市) 周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳。(未発表のオリジナル作品に限ります)

宿題・応募先 (宿題に応じてご応募ください・各2句)

松江市「城」「そば」	松江市経済部 観光文化課 〒690-8540 松江市末次町86	TEL(0852)55-5293 FAX(0852)55-5553
尾道市「路地」「古寺」	尾道市産業文化振興部 観光文化部 〒722-8501 尾道市久保一丁目15-1	TEL(0848)25-7366 FAX(0848)25-7293
今治市「渚」「海峡」	今治市教育委員会 文化振興課 〒794-8511 今治市別宮町一丁目4-1	TEL(0898)36-1608 FAX(0898)25-1700
松山市「花廻路」「マドンナ」	松山市企画財政部 国際文化振興課 〒790-8571 松山市二番町四丁目7-2	TEL(089)948-6634 FAX(089)943-9001
高知市「自由」「鯨」	高知市教育委員会 社会教育課 〒780-8571 高知市鷹匠町二丁目1-43	TEL(088)822-6394 FAX(088)823-9361

応募方法

- ・専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品 (FAXによる応募可)
- ・応募作品には「宿題」及び、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記してください。(雅号の場合は本名も明記)
- ・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。

応募締切 平成14年3月31日(日)(当日消印有効)

出品料 無料 選考 平成14年6・7月
 発表表 平成14年8月、入賞者に通知します。(表彰式は、平成14年11月を予定しています)

選考委員 (第二次選者) 仲川たけし・吉岡龍城・橘高薫風
 (第一次選者) 長谷川博子(松江市) 小島蘭幸(尾道市) 渡邊南奉(今治市)
 楠本知由(松山市) 荻谷たかし(高知市)

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

自選集

橘 高 薫 風

午の歳午の刻なり初比叡
過去長く未来短し初詣で
初光赤兎馬老いて嘶かず
老いらくの夢油然と万華鏡
佳き年の後ろ姿へ除夜の鐘

田 口 虹 汀

お会式も改装中で四時で幕
外泊も中止静かな紅葉狩り
蓮生桜滅の生涯ですネお祖師様
師走日迄お天気ですか年賀状
百人に深謝年賀の五十円

板 尾 岳 人

おめでとう妻もわたしも元気です
初日の出母も何処かで手を合わす
柏手を打つと振り向く父の髭
徳を積む年になりたやお元日
あと指をさされぬように御来迎

八十田 洞 庵

トマホークあなたも戦好きですか
床ずれもさせぬ介護の母こまめ
北齋の波見る湯船ひとり旅
いくさ場へ男の決意朝が出る
残照の中に立つ群れ戦友よ

西 村 早 苗

雪虫に気付かれる前の雪囲い
師走風うそを上手に紛らわす
冬の樹とやさしい風が好きのよう
いい夢が目覚めた初春の三ヶ日
風邪ひいてこじれた女ののど仏

阿 萬 萬 的

騙された振りをするのも年の功
そんなことわかってますわと老妻笑う
やっところさ老妻その気になつてくれ
食べてチヨン年金暮らしにある平和
二世帯同居頭の切り替えさせられる

宮口笛生

喜寿祝う正月うまい酒をのむ
元気です喜寿です楽し正月だ
貧乏に馴れて真つ直ぐ生きている
ネクタイを締めて紳士になつている
停退後停年の無い農作業

榎本吐来

公園の秋をささやく古い二人
ワン公に遊ばれているお爺ちゃん
ワン公のプライド尻尾立てたまま
テロ不況痛み抱える新世紀
カタカナの文字が威張っている街路

藤井明朗

景気まだ忍耐がいる午年
歳のせい時々難産する句帖
ひい孫と長寿へ感謝初詣で
意欲まだ友のお世話の出来る幸
御神酒いただく決意あらたに三ヶ日

西田柳宏子

頼るのはあんたと嬉しいこと言われ
スイッチオンあとは寝て待つ洗濯機
ええご趣味ですなと何もしてぬ人
言いたいこと言える家族の和にとける
日進月歩着々進んでいる病魔

舟木与根一

農業とは田圃上手に遊ばせる
うどん屋が繁昌米がまた余る
助っ人が手ごわいと知る果たし状
人間も犬も調教する芝生
花畑夫唱婦隨の振りをつけ

堀端三男

参列者へ愛の灯点す披露宴
玉稿をスペース空けて待つてます
理路整然然しい出語る祖母達者
唐草模様の重い布団が性に合い
夫婦別姓友情のまま添うている

石川侃流洞

神棚と仏壇同居平和だな
座禅から見えないものが見えてくる
ケイタイへ妻の手綱が伸びてくる
公園の鳩 老人と仲がいい
野良猫に餌をやり白い目に出会う

小林由多香

川柳の仲間で群馬熱くなり
重い荷をいただき群馬から帰り
大臣賞そして知事賞までもらい
国文祭もう鳥取は燃えている
国文祭あなたの席をあけて待つ

河井庸佑

藁帽子被り微笑む寒ボタン
止め石にそつと向き変え巡る庭
お互いがよきライバルで今日がある
句読点ひとつで話行き違い
共通の悩みへ弾む話の輪

月原宵明

結局は砂を土産に甲子園
青空へ提げているのは万歩計
裏通りいつもの顔が往き来する
契約書虫眼鏡なら読めるかな
腹立てた顔が写っている鏡

竹内紫鏞

カラオケのキー下げますかお父さん
水で切る科学 石工の労を消し
斜張橋ボクよいとまけ覚えてる
慰めはモザイク斜張橋わたる
七夕の竹 炭に良しリサイクル

土橋螢

恋びとを待つ好日の喫茶店
一番早く走った記録持っている
金婚の姿をうつす大鏡
龍胆りんどうが咲いて庭からよい天気
何のために生きる信心のこたえ

恒松町紅

初日の出眼鏡に映えている傘寿
絵の馬も筆も色紙に躍つてる
席順にこだわっている出雲弁
実行が三日坊主の弱い腰
昔ならベダルを踏んで越えた坂

野田素身郎

自分史に書けないことが一つある
木枯しへ指がかじかむ後遺症
ゆうゆう自適新聞半日かけて読む
秋祭り稚児を務めて半世紀
夜の部のチャンネル権は妻が持ち

玉置重人

免許返上自転車だけが頼り
油気も毒気も抜けたまるい背な
いざという時のカードは離さない
怒ったら負けだと思ふヤジロペー
以下同文右に同じの列にいる

藤村メ女

いい電話らし明けてましてお目出度う
振り向けば九十年は夢の如
あらたまの御慶にはずむ初詣
箸紙にそれぞれ名前曾孫待つ
よい年へお宮の鈴は鳴り止まず

八木千代

木村あきら

大会大会わたしいくらか自閉症
夕暮れる庭の薄い黄薄い赤
つつましく枯れたいものを秋桜
折にふれ筋も変えまます散歩道
夢は夢うつつはうつつ朝の散歩

遠山可住

黒川紫香

目の見えぬ世界見えないものが見え
まだ逢えぬ思慕大切に地隠蔵う
らんらんらん今日はたこ焼き焼いて妻
後継ぎのいない鉋を研いでいる
水平線星の平和を子に託す

斉藤 岳

両川 洋々

一粒の米にも米のいのちあり
難産の牛に手を貸す午前二時
一声を掛けよう傷はまだ浅い
木の葉髪寂しい話せぬように
声掛け合つてボランティアする介護

工藤 吟笑

越智 一水

波風を立てないように丸く棲む
自家野菜いっぱい背負い母が来る
日の丸を掲げ明治の顔をする
メモ帳に行事いっぱい日曜日
きれいな虹バアちゃん天へ行つた橋

初詣で阿吽の呼吸仁王門
獅子舞が街中を行く松の内
垣根越しオカズが行き来する絆
方言を入れると冴える祝い唄
童謡を唄う夕陽が真っ赤つか
元日はいいなと思う酒になり
忘れてた顔浮かび出す年賀状
お医者様と仲良しになり歳を積み
周囲みない人ばかり恵まれる
お若いと言われ鏡を見てしまう
酒よ酒ああ落日の章を書く
しつかりと俺の目を見ろ嘘はない
捨て石の僕にも風邪は温かい
夢さがすピエロで僕が終りそう
へい毎度春が裏口から覗く
こんな世と知りつつ無駄な煙を打ち
植木職人音立てて飲む茶一ぷく
紅葉冷え老妻へコートをうちかける
幸せを甘え上手がよくつかみ
妹を亡母が叱つたよう叱り

小西雄々

人並みの幸せ欲しい初詣で
明日を読む炯眼に虹見えてきた
夕焼けに詩情が湧いた葱坊主
何時の日か天を駆ける児腕の中
火傷する覚悟で間引く社の人事

芳地狸村

教皇を守るスイスの衛兵隊(ヴァチカン市国 5句)
目を見張るミケランジェロの大壁画(最後の審判)
感動のアダムとイブの天井画
キリストを抱いた聖母が美しい(ピエタ像)
日の丸が人気呼んでる料理店

正本水客

箸置に今日一日が有難い
曲り角にいるのをしらない
欠伸かみころしているのはしっている
寝る前に朝からのことかんがえる
肩書きをはずして物が言いやすい

波多野 五楽庵

女です涙の闇に閉じ籠もる
とぼとぼと雨の場末の映画館
捨て人の軽さよ北のなれの果て
レモン手に思慕の重さを確かめる
海軍じゃないか泣かない約束だ

森下愛論

艶福のころは知らず無為かこち
咲いて散る花のころの沙羅双樹
ひまわりの拗ねて咲くのは逆を向き
ふと吐息つく間に白蓮開花して
良心を包んで歪んだ道走る

川島諷云児

背伸びにも限度こころで句読点
運命の神はいたずら好きらしい
つまずいて転んで亡父の歳を越す
心配ご無用蓼食う虫もいる
煙草やめれば治る持病と知りながら

野村太茂津

人生に絶望はない穿ち哉
限りなく試行錯誤の時が好き
静謐を乱す穿ちの錐の先
もっと優しく穿ってほしい俺の穴
二年目も穿ち続ける筆の先

河内天笑

敬と愛これから僕のキーワード
正月の色紙に酒がのりうつり
酒やめたなどとこれから言いません
タイガース星野で気合い入れ直し
野生馬となりモンゴルの野を駆けん



板尾岳人選

西宮市 坪井孝一

神戸市 両川無限

父さんが給料明細連れ帰る
ライバルの指す方角はけもの道
酒偏を外し真面目の行ふやす
写経中 精進料理が邪魔をする
近松が恋路助ける類被り

鳥取県 前坂美佐枝

キリストも仏もいらぬ君という
美しい人ひきたてる役回り
美しい一度は言われた言葉
冗談の中の真に気づかない
精一杯いきて退屈など無縁

神戸市 伊勢田毅

婦唱夫随新年の計妻が樹て
三ヶ日パンを許さぬ父がいる
改革を画餅にしたい族議員
定年後大きく見える妻の影
年金の小舟が揺れる不況風

きつちりと筋道通すから溝が出来
ああ夫婦宿題いつも抱いている
欲張った墓穴こっそり埋めておく
向こうから折れる短気と知っている
このまんま許すと僕の負けになる

篠山市 谷田多美子

木守柿やさしく熟れて空に照る
たこ焼きが誘う夕べの難波駅
振り向けば一期一会の秋桜
一張羅着てもシヤキツとしない腰
師走風残りコスモス凜と咲く

尼崎市 河津正治

果物の匂を問わない世のひずみ
満月を合わせ鏡で母に見せ
痛いところ衝いて噂の風が抜け
譲られぬ野心に燃えるループタイ
五欲には遠いが万事生臭い

尼崎市 山田耕治

歓迎会答辞の主は泣き上戸

カンバスをかかえて逃げるきつね雨

稲の穂を半紙で巻けば神います

束ね髪パートタイムの巫女が舞う

律儀にも大安の朝訪れる

東京都 清原悦子

向かい風いろんな知恵が養われ

便せんの花に気付かぬラブレター

どんな子も一度は童話読んだはず

平坦の道にもあつた悩み事

住み慣れてマンネリ化したスケジュール

和歌山市 上地登美代

物差しの違い認めて一つ屋根

風ばかり読んでチャンスの芽をつぶす

いびき快調楽しい夢を見てる妻

丹精の柿へカラスのテロ襲う

歳時記の通り山柿熟れている

河内長野市 大西文次

天国へ今頃妻はどのあたり

いないいないしたばあさんは帰らない

空腹に聞き分けのない腹の虫

秋空へ行く当てのない髭を剃る

普段着のまま出かける見合なれ

河内長野市 山岡富美子

まだ夢を残したままの欠け茶碗

少年の窓から見える白い地図

裏表なくて秘密が守れない

昔嘶ること煮てる自在鉤

もう少しゆとりが欲しい割烹着

横浜市 長島亜希子

席譲るべきか否かで迷う歳

他人には捨てろと言つて捨てられず

悪気ない言葉だらうが眠らせぬ

ポリシーを持つて不便を選んでは

故郷を新幹線が寂れさせ

横浜市 川島良子

人間のこころの中を読む瞳

ありがとういっばい詰めて亡母送る

これしきの事で凹んでいられない

変わつてゐる奴だなウマが合いそうだ

つまずいてすこし人間らしくなり

広島県 馬場利子

香川県 原賢

明日に咲くバラにコントが落ちて
絵の中に小さい冬が紛れこみ
人形にマフラー巻いて冬を待つ
飽きるほど種を残して散る野草
初春へわたしの虹が浮いて来る

唐津市 岩崎 實

このことは余談ですがとつけ加え
扇面に余白を生かす筆の冴え
戦友へ余命を捧げ生きていく
週二日休んで余暇をもて余し
祭笛豊年太鼓に血がおどる

唐津市 坂本 兵八郎

くたびれた顔の鏡に蓋をする
光線の加減で拾ったただの石
愛想が良くて誤解の種をまき
モンローの風が駆け込む自動ドア
ハネムーンの頃もあつたね畳替え

香川県 伊勢 八重子

酔芙蓉咲いて母の忌巡り来る
探し物問うすべも無し一人棲み
山頭火句碑をたどりて行く遍路
言うだけで気のすむ愚痴を置いて行き
欲捨てた分だけ元氣ほしくなり

秋夜長 即席詩人が月を詠む
展望が開けぬ農の軍手干す
翔び立つ日 夢見て爪を研いでいる
見栄などは捨ててピエロを演じ切る
生き下手も笑える風がきつと吹く

愛媛県 宮本末子

人前をさけて覗いたコンバクト
四十年嫁いで替えて来た舞台
気にかかることは消火器期限切れ
やりくりは近い海だが深すぎる
だまされていれば楽しいほけの花

今治市 塩路 よしみ

霜降りて未完のままの毛糸玉
終章を飾るヒントが掴めない
やさしさに触れて嬉しい菊日和
人生観かえて余生へ虹を追う
遠ざかる尾灯へ愛の未練抱く

松山市 高橋 宏 臣

言い切った言葉迷いが深くなる
捨て切れぬ自負の一つが絡み付く
こだわりを捨てて住めよと屋根の草
深読みはしないでおこう風が吹く
矢印に安堵道草したくなる

高知市 小川 てるみ

座標軸ゆれて反省ばかりする
風の日は風の心に触れてみる
何ひとつ私を飾るものがない
青い空磨き足りない窓ガラス
暴論が正論に勝つ自己保身

高知県 桑名 孝雄

秋深し残暑の不眠取り戻す
チャンネルに修羅と平和が同居する
以下余白そう単純と思えぬが
散り方はどうするたつた一度だけ
雑音に従い雑に生きている

札幌市 三浦 強一

カラスにもあるゴミの日のスケジュール
矢印がないと進めぬ蟻の列
目印の銀行消えた街の地図
人殺すひと指し指という凶器
勝敗は言わずに汗を褒めてやる

川崎市 小林 久美子

遺言を書いておけよと子に言われ
待たされたマグマ呑み込む歳の功
心ない噂勝手に歩き出す
ごめんねと言えば許してあげるのに
厚化粧こころを磨き忘れてる

町田市 土田 今日子

手に職を持つとは母の女性論
五分ほど待って 変身しますから
スタンスを変えて素顔を覗かれる
あの人もまだ元氣そう賀状来る
お互いの命愛しむ一つ屋根

横浜市 石原 三郎

年金の額が暮らしの指示をする
断りの優しい言葉を考える
晩酌は注がれるよりも好きに飲む
席探す美人へ少しずつやり
株買って一喜一憂呆け防止

横浜市 芦田 鈴美

自己流の育児たつぷり愛を入れ
完璧を求めて路地へ迷い込む
ファックスもメールも声で確かめる
大切に扱わずに転げ落ち
絵手紙を喜ぶものと決めて出し

横浜市 近藤 道子

清貧の美学若者笑うだけ
歳とって自慢話の風あげる
極上の笑顔で老母と食事する
むずかしい話はよそう老母といる
冬の街淋しだけが吹き溜まる

横浜市 金森徳三

春菊を花壇に蒔いて鍋を待つ
歳ですなあ雨戸開け閉め骨が泣く
秋の蚊にこれが最後と血を与え
抵抗は利かぬ老化の隙間風
年も暮れ惜しい話は忘れよう

横浜市 荒井広和

瘦せるのは難儀ですなと皮下脂肪
家訓から神と仏の顔が透け
青春の夢が溢れる大ジヨッキ
聴き役もボランティアだと徹し切り
アルバムに僕の縮図が貼つてある

横浜市 三村八重子

束ね髪つるべ落しに人恋し
針を持つ才女女の貌になる
松茸が御飯の中でそり反り
本持つてテレビをつけて夢を見る
奥の歯で言いたい事を噛みくだく

横浜市 伊藤ふみ

人の道堪忍袋踏んで行く
霜月へ軽い一年思い知る
新しい顔一つ増え春の膳
行き当りばったり過去は恥ばかり
里帰り思い出の道消えている

横浜市 秋元和可

無理矢理の当て字で期待する名前
酒好きに酒が出てこぬ下戸の家
聞きとれぬ言葉に返す笑い顔
一日を布団の中で巻きもどす
過去曝す古い日記の置き所

京都府 前上英一

一筋に尽くし通したのれん分け
谷いくつ越えたか夫婦旅つづく
終点で気ままな靴に履き変える
埋めきれぬ不孝を詫びて墓洗う
根回しの釘が効かない時もある

大阪市 小泉ひさ乃

Eメール照れずに妻へありがとう
女には歳などはなしレモン風呂
未来永劫ふたりの地図を描き続け
月光が花の淋しさ包み込み
約束を秒読みで待つ秋帽子

和泉市 横山捷也

苦勞とは言わぬ母親背が丸い
言いわけをしながら妻の肩をもむ
ライバルの背を見る位置に居る安堵
居酒屋に定年だとは知らせない
年金にひびかぬ程の酒にする

大阪市 三浦 千津子

人間の弱さ転がる吹き溜まり
童心になり切つて背の寒さ会
満月が美し過ぎて背の寒し
翔ぶつもり種火をそつと掘り起こす
舟下り白秋の碑に会う風情

吹田市 木下 敏子

秋の暮れ一文惜しむ無駄遣い
棘のある言葉丸めて流す耳
竹を踏む踵老いなど寄せつけぬ
好い言葉かけあいながら行く余生
御先祖に合わす掌今日を締め括る

大東市 南原 正和

眼鏡掛け物の見えない時がある
さりげなく熱い瞳が絡み合い
過ちを背負つて歩む重い道
理の籠がゆるみ心がこぼれ出し
縄文の太古を偲び仰ぐ杉

高槻市 生田 義一

買物の度松茸の盗み嗅ぎ
新米の香りかすかに今日の膳
故里へ今日も急ぐか茜雲
旅に出る前夜眠れぬ空模様
元気が先ず挨拶の老いの友

東大阪市 田中 美弥子

嘘ひとつ抱いてころが重すぎる
思考回路混線答え出ぬまんま
幾たびももつれを解いた太い糸
背負う荷の重すぎ跳べぬやせ蛙
庇い合い濁流渡る丸木橋

八尾市 山本 宏至

残り火に期待をよせるフルムーン
女房と同じコップの水を飲む
剪定に春の芽吹きを願ひこめ
金のこと心配するなまわり寿司
叱られたあの日と同じ夕茜

八尾市 田中 トシエ

年賀状十人十色の顔が好き
母の顔宅配便の中にある
プラス思考何と立派な長寿薬
葉書から飛び出しそうな干支の馬
ドアを開けて一歩ふみ出す二〇〇二年

八尾市 松葉 君江

やつと出た芽に大輪を期待する
欲一つ捨ててそれからよう眠り
日だまりの老母の影も丸くなり
青空を背なに野鳥ののど自慢
手をやいた娘から届いた胚芽米

八尾市 平川幸枝

日によつて好きだと思ふ曼珠沙華
四苦のほか火種はもたぬ抗老期
お金持ちくさいあなたの主義主張
平均の寿命におんな賭けている
波高い年に小舟は乗り切れる

奈良市 乾 春雄

ライバルに踏まれた影がまだ疼く
引き際の美学静かに去るポスト
誇り捨て見栄捨て橋を渡り切る
脳の奥消えない火傷抱いている
都市砂漠風より寒い無関心

奈良県 江波正純

ゆるやかに時が流れて妻と酒
賞味期限すぎたどうして旅をする
月曜日もう怖くない定年後
かみさんにFA宣言されている
お日さんはまだもうちよつと雲の中

和歌山県 中村君枝

四十八手鬼を上手に飼いならす
口車乗つて欠点見失う
足るを知る事も忘れて出る不満
神の前座れば願ひ届きそう
帰り支度老母の涙が袖を引く

鳥取県 澤 裕子

善行のニュースに今朝の茶が旨い
宝くじ夢を見たくて今日も買う
受け皿の母へストレス吐きに行く
やりくりも夢のためなら苦にならぬ
このままの幸せ続く日を祈る

鳥取県 小谷 はるみ

人は人 私は私 深呼吸
自分史を正気なうちに書いておく
きつちりと固めた嘘が崩れだす
正直もほどほどにして世を渡る
悲しみの涙は風化させ耐える

鳥取県 吉田 弘子

デリケートな体になつて老い加速
相手読み加減乗除のおつき合い
負担にはならぬと決めて娘に期待
萎れても筋金入りの顔を持つ
勝てるはずないと悟つて聞き流す

鳥取県 竹森 富久江

彩りになじんで訛り転び出る
乾杯のひびきが白い歯に当り
苦勞した跡を隠している化粧
情操のこころ繋がり子の未来
年輪の痛みを庇うのも化粧

鳥取市 山宮愛恵

気配りが廊下の隅にまでとどき
目も舌も満足させて秋がゆく
シャンソンを聞こうか秋を道連れに
プロセスに満足のありうどん食う
今がしゅんとんで弾んでピンク色

鳥取市 横田春名

親友のかけ込み寺になつてゐる
だんだんと家族が減つて背な曲る
父の背に蔽しと消えて子は惑う
体調におせち料理の数を問う
カレンダー残る一枚幸祈る

鳥取市 田中憧子

駅ごとに温い訛りが乗つて来る
胡座かき乗る話ではなさそうだ
おさな児の輝く瞳冒險家
晩酌のつまみに愛を試される
賞味期限切れない内にふたり旅

鳥取市 森美智代

嘶きを我も一声挙げてみる
傷心の旅を見送る花時計
湯豆腐の浮いた人生掬われる
食べ頃を浮いた豆腐は主張する
散る定めおわりの一葉ひらり舞う

鳥取市 録沢風花

雑音を遠くに聞いて野菊咲く
新しい芽が出る運と書いてある
残された峠荷物の子に預け
兄という大きな明かり里に消え
悲しみに遭う度悟り深くなる

松江市 三島淞丘

人生は危険信号続く旅
山門の女見上げる彼岸花
茶心は無いが名器と褒めて置く
胸の内いい事ばかり溜めておく
吹き溜まり街の噂も寄ってくる

倉吉市 牧田賀寿恵

なれそめの頃から夜霧好きになる
七転び八起きをさせる親の背
人気者それはやっぱりお母さん
欲すてて静かに肩の荷を下ろす
三日間あまり静かでノックする

尾道市 光吉裕

手を貸そう余裕はないが見ておれぬ
解凍に手間どる妻の凍てる愚痴
冗談を聞く暇あれば頼まない
本気だと眼に描いてあるだろう
見解の相違が減つて来ぬ夫婦

広島県 福島 万年

愛媛県 花岡 順子

武器援助受けて流血止めどなし
空缶を蹴り蹴り帰る独りぼち

ブッシュさん二丁拳銃打ちまくり

涙腺が緩んでからの好々爺

竹原市 正畑 半寛

富士山と父の話をしています

栄枯盛衰 果たして山は崩れるか

騒音の中で地球が哭いている

言い切れば貝になりたくなくなってくる

宇部市 高山 清子

何もかも呑みこむ父の優しい目

車椅子押すにもコツがあると知り

聞いてやるただそれだけの力添え

不景気に貧乏神も疲れだす

北九州市 岡田 幸生

年金へ錨降ろした海は風

洪抜き苦勞語らぬ柿の艶

苦勞する家計に妻の底力

籠に水汲む愚かさのまた戦

愛媛県 黒田 茂代

字余りを上に乗せたり降ろしたり

似合わぬと決めて帽子はかぶらない

筆を持つ下手がいいに励まされ

生きている実感のない水中花

手も口も疲れ眠ったままのバス

ソロバンが夢の味方をしてくれぬ

本心が見えると情けない遺産

正月の準備障子を張り替える

愛媛県 安野 案山子

晩秋の晴れ着を羽織る並木道

リハビリの妻に合わせる散歩道

色付いた紅葉が詠う恋心

食べ過ぎに見えるポストへ年賀状

今治市 野村 清美

菊人形だんだん衣裳派手になる

転んでも起きるダルマに教えられ

病窓の朝日に勇気つけられる

リハビリに耐えて嬉しい試歩の杖

今治市 中村 好恵

五百羅漢やんわりとした顔もあり

ふしくれた手に働いた自負がある

白魚の指でナースが脈をとる

イヤリング自慢ばなしを聞き飽きる

香川県 松村 輝夫

裏表見せて自分の位置決まる

見て欲しい見ないで欲しい薄化粧

ほどほどに食べて病が寄り付けず

西暦ですぐに貴女の歳がばれ

出る杭も私は除けて歩きます
高知県 百田 幸

ほどほどの欲で余生をまろく生き
雑草とイタチごっこをするわたし
底辺のくらしを愛で支える娘

高知県 近森 功

点滅の赤信号に似た余生

余生への夢を孫から借りてくる

悪友の訃報へ何で追加酒

仲裁へ一升瓶の顔も借り

南国市 小原 圭二

予定表埋まらない日の草むしり

野放しに一人勝ちしたキリン草

ウエディングケーキにナイフ入れたテロ

戦場へ研究に行く軍艦旗

日高市 根岸 方子

一万歩特効薬と信じてる

いればいいそんな人にはなりきれず

テッペン柿を残して鳥と分け

大根の虫にも生きざる知恵があり

青森県 福士 トキ

テロ事件聞けば砂漠となる心

小春日を一日惜しむ冬支度

赤トンボわたしに惚れて肩にいる

風が来て落葉のかけっこフラダンス

折もおり雨後の竹の子評論家
秋田県 湊 修水

イチローへ賞は榮譽を越えている
職安に藁一本が見つからず
世界一速い尚子のいい笑顔

秋田県 秋野 宏

雑魚だから処世の辛さ知りつくし

感謝する涙あるからヒト科です

いつなにが起きるか知れぬ人生譜

雑草の遺伝子少し欲しくなる

東京都 井上 つよし

秋風にワインレッドの服を出し

逆境の節が友を振り分ける

山寺の鐘に頬張る握り飯

悔しさをシュレッダーして握りしめ

東京都 やまぐち 珠美

等身に心は映さない鏡

比べれば真の私が嘘を言う

美しいしかも男の脚の線

絶対を口に宿して神を着る

逗子市 神戸 みず帆

陽のあたる街へ少年背を向ける

道端でしゃがむヤングの自由主義

遠回りして本題に触れて来る

振り向くとだあれも居ない気の焦り

藤沢市 妹尾 安子

雑草の根性岩を割いて伸び
たつぷりと説明させて買わぬ客
売れ筋と抱き合わされる棚下ろし
肩のこる返事ついつい出し遅れ

野田市 那賀島 雅子

そら耳かふりむく顔に雨の粒
数々の疑問符胸に秋の空
死ぬほどの話でないとお茶をつぐ
飛びたがる帽子押されて山紅葉

川崎市 大島 三四朗

健脚を自慢してたら蹴躓く
腹の虫宥めすかして苦い酒
大吟醸心を許す友を待つ
ご都合が悪いと呆けたふりをする

川崎市 浦野 昭志

雑炊が出ると静かになる酒席
会葬で贈った花輪見届ける
ピルの上でも名月は愛でられる
奉納の額を談合しています

川崎市 中村 泰竜

請求書スマイルマーク付いている
ペアグラス喜怒哀楽の乱反射
ただ酒と知ってピッチが速くなる
ハードルを下げると跳んでみたくなる

横浜市 生坂 サト子

満腹に片づけロボが欲しくなる
指小疵 絞る雑巾まで支障
どの地でも鳩に餌やる人に会う
甘んじて扶養家族の欄に居る

横浜市 平 達也

鈍根に生きて運には恵まれず
思い出は妻に言えない事ばかり
秘密をも語りライバル友とする
おしどりは気にする事は語らない

横浜市 鈴江 純子

病変が見付かり謎が解けてくる
余命表見据え明日の風を聞く
おだてられ誉められ励み歩が戻る
わがままを叱る人無く温暖化

横浜市 山梨 雅子

コート裏目見せてたたんで粹ぶつて
ストレスも柳に風と楽に生き
紅葉にパレット賑やか交じり合い
ロボットに遊ばされてる老いの午後

横浜市 布山 嘉信

運天に任せ結果に未練もつ
淋しさを誘う枯野のカラスウリ
ローカル線手動の扉なつかしむ
名木が腰に菰して冬支度

横浜市 巖田 かず枝

休日のたび虎刈りになる植木

速達が来るとドキッとさせられる

子も躰出来ぬ我が家に来た仔犬

家族には生きた玩具になる仔犬

富山市 松見 たえ

手土産の効果なかつた配置替え

迷い猫頑固親父の膝が好き

欲の皮も少し混じっている古墳

思い込み三日ばかりのピエロ役

新潟県 高野 不二

同級の訃報一日酒をやめ

積み上げて積み上げ捨てるものはない

雑音がない放送は韓国語

法律で勝って理屈に負けている

静岡市 中西 雅

大空を吸いこむような嬰兒の目

生かされて文句そのまま飲みこんで

十六夜のみごとに清い青い空

お茶の花貴婦人のごと楚々と笑み

尾張旭市 三浦 きぬ

遺言状書いて安堵と空しさ

つい口が滑りチャックを締め直す

他人から見れば私はどんな女

良い老人見ざる言わざる聞かざるか

京都市 三宅 満子

どうしたの 今年は二度も咲く蘇芳すおう

物忘れ頭振っても出て来ない

かけ引きも知らず息子は巢立ち行く

人のこと氣遣う線が切れている

京都市 清水 英旺

生き残り蚊のひと刺しに力なし

混沌の世に生き生きてつい弱気

切れ味がさぞ鋭かる鎌の月

すず虫の臨終の声聞かぬまま

京都市 山本 磔

まだもつと走り続けるのですか

さすらいを誘ってくれる縄がある

人格と言う不確かな恐ろしさ

負けておくことの多さよ冬寒し

大阪府 高木 道子

ほんまもん空の青さと柿の赤

アフガンの子等の笑顔に涙する

病院の待合室で風邪もらい

鈴なりの柿に鴉も満ち足りて

大阪府 小栢 こずえ

葉が落ちる人は淋しくなるばかり

いくたびも転んだ分だけ丸くなる

のんびりにわさびのきいた嫁が居る

ハイキング笑顔はじけるにぎり飯

大阪府 畑 中 節 子

白壁に影くつきり柿すだれ
秋深し夕日の菊にほほをよせ
冬ハエ テレビの前を翔んでおり
満月に見られ恥かし露天風呂

大阪市 浦 田 綏 子

路地裏に爪を抜かれた鷹が棲む
色一つ足りない虹もあるという
手話で知る情けは人のためならず
生き残り過去から届く請求書

泉佐野市 大 工 静 子

大阪市 伴 洋 子

和尚様は盆にお経の話する
大峰山一度は参る義務らしい
説経師石コ山路を忍び足
知らぬ地で角がとれたと娘の便り

泉佐野市 稲 葉 洋

手招きをする子へ親が立って行く
暗号を金庫に貼った几帳面
鏡台の裏でコトリと鬼の面
白状をさせられてから妻の乱

大阪市 木 村 青 生

禁煙を今更という言い逃がれ
だとしても卒寿壮健とは見事
除夜の鐘煩惱三つ消し忘れ
正月もまた来ましたという程度

大阪市 熊 代 菜 月

風邪の子にウルトラマンも駆けつける
花でさえ触れ合いながら落し合う
縄のれんコップに酒を盛り上げる
三面鏡閉じれば声まで化けており

柏原市 永 浜 加 津 子

合格へみんな輪になる手巻き寿司
子が出来て嫁の優しさ芋の味
嫌な夢消した娘の弾む声
そこここにまだ亡母のいる更衣

大阪市 星 野 きらり

すれ違いわたしもあんな感じかな
じゃじゃ馬で跳ねてみようか年女
パラサイトシングル見切り嫁ぐ春
愚痴るまいけど聞いても貰いたい

岸和田市 小 島 笑 司

二十世紀梨も名前を変えようか
金木犀匂いやさしく自己主張
ガーデニング ライバルの花よく育ち
名月に酔って孤独を思いしる

近いけど上げ膳据膳夫婦旅
秋深し極みを探るひとり旅
留守宅が気になり行けぬ黄泉の旅
行きたいがまだまだ怖い空の旅

丹精の花が眩い披露宴

自分史の涙もにじむ名刺入れ

この靴のおかけ此処まで踏ん張れた

時刻表捨てて拾った優越感

河内長野市

木太久 正一

元氣遣り元氣を貰う友がいる

秋冷の庭から響く百舌鳥の声

久しぶり友と健康立ち話

故郷の唱歌に元氣もらう秋

高槻市

左右田 泰雄

相談をするあてもなく貝になる

言い逃れの台詞を用意して半身

誰もいない野原で恐い風に会う

天高く若さ弾けるかぎホック

高槻市

乙倉 武史

コスモスは芯の強さを見せて揺れ

健康に良いとリュックを奨められ

顔の皺年輪として悪びれず

まだ生きる積り苗木を買って来る

豊中市

藤井 則彦

すつと抜け宴のあとのご相談

逝く友の男ばかりが気にはなり

それぞれが過去をほかして夫婦会

年賀状出したあとから喪中です

村上 直樹

排気ガスあの山やがて丸坊主

古稀迎えわが家の明治消えてゆく

いくたびか曲がり角みて古稀迎え

写真帖めくると亡母の声がある

羽曳野市

福田 悦子

生きてます賀状私に語りだす

えべっさんの帰りにつちり食べてくる

大吉が出たと笑顔の初詣で

初夢の午は馬券をくわえてる

羽曳野市

山本 たけし

財テクの興味も失せた株価格

自尊心捨てればちよつと気も楽だ

老いてなおまだまだ学ぶことばかり

長々と昭和を語る喜寿二人

東大阪市

今岡 貞人

一応は余白だらけの手帳開け

来年の命を信じ舞う落葉

北風に耐えて花の芽春を待つ

打開策ないが火中の栗拾う

藤井寺市

若松 雅枝

リフォームで亡母の晴着が活かしている

金婚の祝いに妻も少し酔い

抽出しに女の業も詰めてある

天高くまだ口紅が離せない

寝屋川市 岡本 勲

藤井寺市 西村栄一

竹トンボ一途に空を恋しがり
友達とチビリチビリとやつてます
雑草の生きるしぶとさ学ばねば
笹舟と一緒流れに逆らわず

八尾市 與田明

舗装路を土に戻れず舞う落葉
足腰がぼつぼつ攻めてくる寒さ
脳のさび止めによく利く広辞苑
コビーより自筆の重味見えてくる

兵庫県 安達厚

赤いべべ着る幸せな歳になり
パソコンと時の流れは子に学ぶ
杯は嘘も本音も知っている
健康法大きな声で読経する

兵庫県 山本泰子

大切なものを失くした日の涙
悩みごと相談されても出ぬ返事
大きな字書けば素直に動く筆
延命はするなと医者にたのんどく

兵庫県 黒崎美紗子

流行へ背のびしてみる試着室
結論はうちで相談すると言う
思い出のみんな大切工具箱
我が家にもやつとファックス仲間入り

セールスマン吾子と同年負けました

断食で平和を祈る寂聴尼

食べさせる苦勞がわかる妻の留守

他人には話の出来ぬ愚痴喧嘩

応接間金魚の居ない金魚鉢

網の目の警備を抜ける炭疽菌

健康の秘訣などない歩くだけ

アメリカの一声日本の示す旗

各論の遅れを株価待ち切れず

わが歳を基準に見てる計報記事

OB会 会えば瘦せたね太ったね

ケイタイの友は奥様監視つき

拝んでも何にも言わぬ神仏

三カ日何の小言も言わぬ妻

ワープロに宛名を任せ出す賀状

すぐすむと言つても妻の厚化粧

神様のお咎めはじわじわとくる

泡立草の強そうな自己顕示欲

検診の前夜はいつも模範食

建て替えてここも表札二つだな

尼崎市 尾宮弘治

尼崎市 桑原東園

尼崎市 軸丸勝巳

川西市 井本清山

神戸市 木村忠義

神戸市 森 本 みはる

主張する続きシャンパン飲んでから

神はいつも中立なのか冬木立

紅葉はしない木の葉の自己主張

一粒のダイヤ妥協の位置がある

神戸市 山 口 光 久

飲めぬのに義理一遍のおつき合い

キャッチセールの話術につられ乗るわたし

嫁姑の痛し痒しの仲にいる

鍋囲む笑顔が減って二人きり

篠山市 円 増 純 子

リサイクルちよつと得したいいい気分

金婚は間近割れずにきた茶碗

合併の証の地図を塗り替える

地図にない橋を渡って来たわたし

姫路市 北 条 てる代

折りおりにもつれる絆赤い糸

今日の罪引きずるように夕陽落つ

姑がまだ持っていそうだかくし玉

はみ出した日記へ孫の自己主張

奈良県 古手川 光

朝刊が投函される音を待つ

携帯の中毒患者蔓延し

少しずつ借りを返していく暮し

最敬礼してる苦情の電話だな

和歌山市 武 本 碧

深追いをし過ぎ溺れた水溜り

赤旗を揚げる自信のある昼寝

マニユアルも良いがたまには変化球

虹の橋信じて向かう試金石

和歌山市 今 一 歩

舟遊び古都の紅葉胸に積み

一大ニュース イスラム世界近くなり

他人ごとと思えぬ戦肩重し

千人針昨日のように思い出し

和歌山市 前 岡 健三郎

旅の宿民話が生きる一軒家

少年の悔し涙のえひめ丸

終電車憂さを託した酒の酔い

テロ恐怖炭疽で冷めた旅行熱

和歌山市 松 尾 和 香

思い出を抱いて半生一人旅

母さんの働く姿慈しむ

思い出は家族揃った囲炉裏端

秋の夜に神話の星が喋り出す

和歌山市 根 田 美 子

嫌な夢パツと忘れる年の功

この次はいつ着るのかと喪服干す

反戦歌陽気に歌う人もいる

熱爛で今日一日の幕下ろす

留守電へ空虚な声が記録され
地球儀の上は平和な空である
人間のゴミへ命をつなぐ蟻
未来図はきつとピンクの花になる

鳥取県 小谷 孝美

食卓の菊が会話を弾ませる
ときどきは笑顔鏡に見せる
幕の内蟹の姿に食すすむ
悩み事山に入って考える

鳥取県 岡村 孝明

母さんの呪文で毎度動かされ
妻の乱このままじつと見過ごそう
黄泉まではまだ道草の余裕あり
正直な鏡に今日も励まされ

鳥取県 山下 節子

つらくてもテープ切るまで走り抜く
生きている証だ今日も腹が立つ
慌てない今日が駄目なら明日がある
聞えても知らぬ顔する知恵もある

鳥取県 鳥羽 直市

高揚り尻は尻尾で身を保つ
細々と尻尾の名残り余生あり
轍ありわが生涯の名残りなり
嫁姑 持ち場持ち場で息をつぎ

鳥取県 池澤 大鯨

回れ右しても若さは戻らない
短い日長い日があり一人住む
心には拭いても消えぬ傷がある
レントゲンうつらぬ影が一つある

鳥取県 西沖 彰雄

遠い日に子等が見上げる木を植える
晴れた空嘘はひとつも乾かない
父の胡坐広くないから世が乱れ
傾いてばかり私の一輪車

鳥取県 西垣 美知子

息が合う家族で今日も丸く生き
笑い声絶やさぬように工夫する
散る時を知っていながら咲く誇り
ほどほどの生活で良い財布持つ

鳥取県 橋谷 静江

遠慮なく柿の頬つべにキスをする
絵手紙に欠かせぬ赤のちびりよう
恋文を夕焼色で読むムード
雪だより赤い花から眠ります

鳥取県 松川 行男

何時までも温い思いの鍋と蓋
昭和史が時どき火の粉降らせゆく
封筒の中で辞表が出るを待つ
陰で咲くウコンの花と妻の功

鳥取県 平井 栄翁

鳥取県 蔵本悦子

冬が来る脳にビタミン溜めている
ゼネコンも近頃涙もろくなり
老いの父明治の風を恋しがり
アフガンの月もさぞかし辛かろう

鳥取県 下田茂登子

鬼の面そろそろ外す古希の坂
輪廻とは私の道の子が歩く
お隣の庭を褒めてる来訪者
口止めをされてしつかり口を拭く

鳥取県 竹信照彦

やりくりは妻に任せて雲になる
殺戮を歌う愚かな幕が開く
換気扇つけて雑念外に出す
引力の法則ですと落葉言い

鳥取市 永原昌鼓

ねだられて空の財布を振って見せ
空っぱの愛が戦争また始め
空っぱの脳にも欲はたと詰め
空の皿 笑顔をのせて返される

鳥取市 田村邦昭

憎しみを忘れる今日の風に会い
逆らった風が孤独になりきれず
県境を越えて訛りが温かい
忘却をひと飲みにする海がある

鳥取市 近藤秋星

カレンダーも俺の頭も薄くなり
一生を駄馬で終わってなるものか
開き直って俺も凶太く生きてやる
大根も一役買っているおでん

鳥取市 宮脇道子

留守電もついていなくて秋深い
炭疽菌人をおどしに生まれたか
伸びたゴム縮まるように友話す
指揮棒が声を束ねて心うつ

倉吉市 大下智子

赤ちゃんは寝ても覚めても人気者
百円でもぐら叩いて気を晴らす
エンピツと紙を可能なかぎり持つ
可能性見つけて奥にまた奥に

米子市 猪森スミエ

コーラスの喉を揃えて振るタクト
やりくりでどん底抜ける知恵袋
反応が顔出して来る不整脈
急かされてついつい釘掛け違い

米子市 足立由美子

しきたりのように毎年絵馬を買う
さも生きているよな馬が描いてある
どの眼鏡かけても見えぬものがある
美しく老いる修業を積んでいる

出雲市 加藤 スズコ

空模様予報で今日を組み立てる
名無し草小さい花で秋を抱く
風に乗り秋はドラマを包み込む
灯を消してポツポツ語る秋の宿

松江市 松本 知恵子

大山の初雪聞いて出す炬燵
アリバイのない曖昧な主婦でいい
キッチンで日毎読みつく平和論
白鳥が来たとうれしい冬便り

松江市 松浦 登志子

波風を立てる器が見つからぬ
傘の花群れからはなれ恋を知り
傾いた思いをつなぐ絹の糸
つきものが落ちるがごとき海の紺

安来市 原 煩惱児

野良犬も太り昼寝をする日本
聖戦は怖い神風吹かすから
秋深し妻と一日バスタア
農一筋生きた証の太い指

島根県 毛利 幸

温暖化地球が汗を出している
古里の山に向かって呼びかける
ストレスを溜めて吐き出す現代人
時々流れに逆らい生きています

島根県 武島 ちよえ

年明けただけで昨日の顔でなし
人情の重さ秤にかけられぬ
石露の花の無口がいじらしい
四捨五入 四捨は地球のこみになり

岡山市 藤原 一平

この辺で思い切らねば矢が尽きる
賛成も反対もせぬ頑固者
あなたとは渡れぬ橋が一つある
今日もまた笑顔一杯花を買う

岡山市 大森 純子

美術館めぐりも平和なればこそ
報復戦正義のようにマスメディア
憲法のすきまが見えぬわたしの目
犬でないわたししっぱは振れませぬ

倉敷市 家守 政子

一匹狼気炎を吐いて四面楚歌
身籠りて女冥利に躍る顔
微笑みに耄碌燃えてくるいのち
飾らずに一代終えた母の汗

岡山県 国米 きくゑ

玄関に紫式部匂いたつ
静と動極める筆の舞に酔う
円満の仮面包んだ頬被り
焦るからすぐにつまづく老いの坂

益田市 岡田竹夫

遺言を書いて置けよと子に言われ

財産分けする程財は持つてない

換気扇いっぱい回し焼く秋刀魚

愛媛県 山之内 八重美

秋告げる空に広がるいわし雲

どことなく仕草が似てる血の絆

義理と言う二字が重たい老い一人

今治市 渡邊 伊津志

退職後財布に鈴がついている

旨いからうまいと叫ぶ舌鼓

波に乗るコツを覚えて生きている

日立市 加藤 権 悟

豊穰の棚田に汗の鎌多弁

休田のあわだち草を見てかえり

二次会の酔いにそろそろ出る本音

川崎市 塩 沢 ひ で

茶柱にエプロンシヤキツと今日良い日

冬木立遠くの山が迫り来る

初詣り五円玉だけ願いごと

武蔵野市 亀 井 円 女

ありがとう何度言うたかはや日暮れ

欲深い夢のおかげで長生きを

持前の短気がさせぬ聞き上手

府中市 岩本雅代

待合室菊一輪の無人駅

新世紀早一年の師走来る

そろそろとそばが恋しい風が吹く

横浜市 北 沢 街 湖

温暖化冬を忘れてしまえそう

褒められて縮んだ心浮かれ出す

二度転びやたら用心深くなり

横浜市 豊 田 羊 子

一人ずつ食事介護の苦勞知る

リハビリに今日の成果を問うてみる

船底で家族にすぎるうめき声

横浜市 山 本 為 佐 子

老妻が主治医のような口をさき

その裏を読めずに重い朝が明け

敬語などいらぬ友がありがたい

横浜市 吉 田 裕 峰

おもちゃにも鑑定団のお墨付き

間引き菜のようにリストラされて行く

乗り過ごし引き返したら通過され

横浜市 福 田 由 美 子

一人では歌う楽しさ知る音痴

出張日夫も妻も羽根のはす

物忘れ忘れた事に気がつかず

綾部市 藤田芳郎

詫びに來た男へ酌めば泣き上戸
聖戰の地球に神が多すぎる
妻の笛がないと今では踊れない

大阪府 前田忠子

雅子さまの笑顔嬉しい年始め
ピンラデインの柄のシャツ売る田舎まち
木枯しに山柿一つ意地を張り

大阪府 桑田ゆきの

満点に上手に使う鉛と鞭
満天の星を眺めて宙返り
いばら道越せば広がる花野あり

大阪府 野田栄呼

ゼロからと思えば怖いものはない
持病あるが動き話せる食べられる
天の声元氣を持つとうひとりでも

大阪府 藤井郁代

おせち詰め梅の小枝で春を添え
元旦の抱負我が家は省略で
寝正月落ち着かないが骨休め

大阪府 東文江

秋なすび嫁と一緒に食べてます
テロと牛炭疽菌までおびえさす
舞い落ちる一ひらの葉も秋惜しむ

和泉市 小坂凡英

止められぬ晩酌苦いテロニュース
ついた嘘楽しからずや生きている
七十の手習い孫に褒められる

大阪府 岩崎公誠

世の中は味方の顔で敵が住む
人情がほこほこぬくい路地暮し
呑み仲間大言壮語仲間割れ

大阪府 内海綾乃

ふきもどし肺活量をためされる
日替りのコスモス飾るお仏壇
剪定で自分の心よく似てる

大阪府 中川千都子

満月は今もやっぱり顔がある
神無月今年の目標たて直す
煮詰まって見上げた闇に風の吹く

大阪府 大川道子

故郷の香り運んで來た葉書
言われれば芸術品に見える壺
天高くしっかり肥り出すわたし

大阪府 中村叡子

老いふたりお通じ加減話し合い
我が庭の小菊満開仏花に
ゴムの木のさし芽素直にみんなつき

定年を目前にして社が潰れ

石橋を叩き渡らぬ石頭

小の虫殺して平然大の虫

大阪市 中村忠敬

大阪市 伊藤博仁

自慢だがおしめを替えたことがない

目にごみが入ったところに友が来た

木を切った根を抜くことを忘れてた

大阪市 小川恵美代

時空間こえて思考の一人旅

夕景は屋根の向こうの裏通り

里の秋テロも不況も夢の中

大阪市 中井正秀

珍しく妻が書いてる祝箸

柘榴って可愛い花を咲かすんだ

憂鬱を寅さんを見てブツ飛ばす

大阪市 尾崎黄紅

老いの夢にもキミがいてボクがいる

仏壇にわが三十の亡父がいる

あとさきは言わず看ますと誓い合い

大阪市 平井露芳

老人は七十五歳に格上げか

万歩計に見離され痛む足の裏

覗いたらマンガ読んでた会社員

過疎の里水の流れに励まされ

きつかけを掴みそこねた共白髪

個性的民族みんな同じ顔

門真市 矢阪英雄

岸和田市 亀井皎月

初光 真剣磨くお元旦

健康が話題の年賀書く歳に

面影を浮べて年賀状を書く

堺市 荻野像山

虫つくな付いても欲しい親心

早起きの機嫌が分かる妻の語気

腕組んで夫婦今更歩けるか

堺市 大橋錦

雨あがりずんずん秋へ染めていく

秋晴れに剪定の音聞く平和

仏壇の掃除しながらクラシック

堺市 渡辺さだを

新米ができすぎ処置に困る国

飽食の世なのに不安満ちている

才女とは俺の愚妻をいうのかな

堺市 梶本哲平

受付も才媛芭蕉記念館

お手近の駅舎の将棋記念館

余力試す旅路の果ては山寺へ

吹田市 二宮 栄子

温泉に心の垢を置いて来る

止まり木はしっかりと決めて住んでいる
ごゆっくり言うてくれるがせからしい

吹田市 須磨 活恵

多情多恨水に流して年が明け
生きたとは毒も痛みもしがらみも
とるところと種火燃やして春を待つ

吹田市 木村 無緑

遣伝子を未だ残してる古稀の坂

テレビ見て腹立てている今日の幸

虫の音が途絶え早々年賀状

高槻市 安田 忠子

趣味多く現役時より忙しい

宮参り千歳飴下げハイポーズ

若作り優先座席に座られず

高槻市 西谷 治三郎

赤ペンで書きもせんに赤字とは

両替機シワを伸ばせと怒ってる

ケイタイは私の自由をおびやかす

高槻市 執行 稲子

両肩にはのほの伝う絆の手

アドリブが冴える友には適わない

こつこつと傘寿を越えるマイペース

高槻市 大崎 侑子

道草を食ってる暇はないお歳
宴果てて幹事漸く一人酒
宴会の欠席裁判盛り上り

豊中市 源田 啓生

高原の芒が世塵の窓を掃く
木霊する太鼓稔りの穂が揺れる
この不況鎮静剤が効きすぎる

羽曳野市 永田 章司

不便さが人の心を育んだ

マドンナも皺を刻んで同窓会

紅葉が老いの二人を招いている

東大阪市 笠井 欣子

白組を応援してる赤い爪

馬の絵を書いている友は五黄の寅

うたせ湯に心あずけて秋の空

枚方市 小川 良吉

舞妓さんミニも似合った先斗町

賽銭を札か硬貨か迷ってる

ストレスを捨てに来ました紅葉狩り

枚方市 荘司 弘之

スパーへ遅く駆け込み得をする

パノラマの舞台幕引くにわか雲

新世紀テロに見舞われ目が醒める

枚方市 大昇隆 広

どうしても買えぬ自然を消すお金

酒旨し今日の苦勞も些細事で

夢は棚に上げて妻子の笑みと生き

枚方市 二宮紫鳳

どの顔も孫中心に丸くなり

Eメール孫の笑顔が飛んで来る

存在感残して帰る空ベッド

藤井寺市 吉田喜代子

降りましょか聞いてるような空模様

賽銭箱願ひ願いと詰め込まれ

お正月芸能界は眠れない

箕面市 寺井柳童

ミサイルの誤爆素直に笑えない

難民の列 国境へ重い足

笑ってる阿修羅の顔はすごかろう

八尾市 高橋明子

赤とんぼ小雨の夜は軒に来て

独り居は良くも悪くも淋しいね

四畳半手足のばしてテレビ見る

八尾市 中島春江

食べ頃の隣の柿は何日挽ぐの

喜寿になり無理をするなと膝笑う

高飛車にノーと言えない世相です

八尾市 鷺見章

菊活けて秋の夜長は美しく

秋風に背ながされて夜の食

窓外の景も見る町車椅子

兵庫県 徳平毬子

咲き誇るコスモスゆれて悩み解く

この月をあなたは何処で見えますか

紅葉の如く燃えたい秋一日

兵庫県 広瀬房江

尾を振れぬそんな私も好きじゃない

追憶のデートトリップに逢う深夜

三日月に掛けてブランコしてみたい

兵庫県 岩本美緒子

通り一べん昨日の道へ戻れない

真実より嘘がやさしい顔をする

邪道では描けない水の岩飛沫

伊丹市 延寿庵野霧

底冷えへ千枚漬のうま味増し

パンの耳揚げておやつの子沢山

寂聴のことが耳に今も生き

篠山市 倉垣恵美

視線から逃れたいよな杖をつき

クラクシヨン鳴らされているのはわたし

人間をわがままにする冬ごたつ

宝塚市 飯西 ミサヲ
自慢する何もないけど歯を磨く
話題切れだまったままで茶をすする
あせるまい今日が駄目でも明日がある

姫路市 服部 一典
二刀流酒とビールで祝い酒
カラオケへ健康兼ねた万歩計
五十年支えて妻は先に逝き

生駒市 飛永 ふりこ
ポケットに温めている片思い
握手にて思い込められ不整脈
写真ブック開けてセピアが回り出す

生駒市 小西 稔
若き日の思い出多し食べ歩き
実る秋自然の知恵に感謝する
昔ながら人種がわかる髪の色

奈良市 田中 賢治
親心みのると命名神棚へ
ドライヤー熱くて気付く薄い髪
大臣もビフテキ食べて道化役

和歌山県 村中 悦男
あいまいな返事をさがす処世術
家の隅今亡き母がひよいと出る
妻のすね働き過ぎの故障かな

和歌山県 森下 順子
イベントで蛸焼いた小半日
傷ついた心を癒すのは仕事
気を抜けば萎んでしまうわが老後

和歌山市 土屋 起世子
雲間から月出てペアの影一つ
戦場を思い薄着で風邪をひく
空と水転居通知が自慢する

和歌山市 橋爪 佐一
憲法の枠はどこまで自衛艦
老夫婦ヘソクリだけは知らぬ顔
不況風感冒用と置き薬

和歌山市 宮本 三喜夫
鳴り潜めまた椅子ほしい策を練る
辞めてみてお呼びがないと騒ぎ出る
不景気よ年末籤に夢託す

和歌山市 芝 あつむ
意気投合ラストダンスは迷わない
腹かかえ笑う咄が見当らぬ
長い物巻かれていれば恙ない

和歌山市 吉田 比佐子
遠回りきれいな花をみて帰り
年金の予算に合わず交際費
まだまだとチャレンジしては老いを知る

巻雲が絵心誘うビル谷間

海南市 堂上 泰子

アフガンの民唄びつつ酔う美食

バッファローセールに揺れる主婦の群

鳥取県 岩崎 和子

人生は寄せては遠のく波のごと

湯上がりの夫が香り連れて来る

雨止まぬ読書三昧暮れて行く

鳥取県 鳥羽 玲子

ストレスも明日がなんとかしてくれる

庭の草闘争心をかきたてる

早春譜歌って春も早く来る

鳥取県 平木 公子

カラスにも柿の実一つ残しとく

辞めるまで妻に天下を預けとく

もみじの手どんな夢でもつかめそう

鳥取県 福西 茶子

自分史を読んだらきつと泣くだろう

三本の弦で津軽の冬を視る

ジョギングに明日のちからを溜めていく

鳥取県 山岡 久枝

角たてぬ豆腐の良心好きになり

ひよつとこにならない化粧して町へ

失敗にくじけちゃならぬ明日がある

弱虫で人の後ろが安心だ

鳥取県 細田 裕子

きつちりと片付け過ぎて窮屈だ

かかあ天下父は静かに酒を飲む

鳥取県 奥田 保子

空っぽの貯金箱ならたんと有る

遠く住む娘もこの月を観てるかな

このままで終つちゃ駄目と活入れる

鳥取県 平尾 菜美

こうも皆違う運命の土がある

土となら咲いてもみたいぬれ落葉

まっとうに生きて世間の目が恐い

鳥取県 鈴木 一弘

菜っ葉服幼い頃の国の色

借金を門前払いして済ませ

縄のれん溜るストレス払い出し

鳥取県 河本 晴子

太陽の匂う布団でよく眠る

時時はレベルの高い空気吸い

久しぶり働き過ぎか眠れない

鳥取市 福島 庸二

年の瀬の忙しさを追う年賀状

どこ見ても電話ボックス閑古鳥

見て見ないふりが出来ないお人良し

ああうまい うまいうまいが娘の料理
運全部使い果して妻と居る
罪憎み人も憎まずにはおれず

鳥取市 加藤 茶人

美人ではないが笑顔へ好きになる
体重計秋の味覚にはねあがる
平凡な主婦に意外など根性

鳥取市 岡田 信恵

七転び癒えない傷にうんざりす
蚊が頬に打つまでじつと息をとめ
白い雲わたしの夢を御存知か

鳥取市 渡部 伯坊

赤と言えば頼れる旗の日の丸よ
世の溪流あなたに逢える橋ほしい

鳥取市 川本 菊香

白い粉がテロと握手し人脅す
振り返る道は虹色ピンクです
芸無しもヨイシヨ煽てに乗り出した

鳥取市 河田 のり代

逆境もさだめと笑う楽天家
絶対と言った後から忘れてる
不況風百円店がよくもてる

鳥取市 谷岡 清子

暦代の御子の誕生すこやかに
華やかに見えても命ない造花
はかなくも落葉と老いの似た姿

鳥取市 山口 千代子

立ちこめる霧が二人の距離ちぢめ
思わざる月への旅も可能なら
忘年会呑んでのまれてしめ括る

倉吉市 森川 あらた

命ある限りあなたを見つめてる
人形の目にもわたしは映らない
汚れてるころを洗う水を飲む

米子市 森脇 麗

勝つことの宿命背負う競走馬
くるくるとステップ軽く落葉舞う
辞典読むこれが結構おもしろい

米子市 小塩 智加恵

のんびりと真紀子いじめを見て過こす
大写し女優は皺を金で消す
枝一本切るに華道の妻の指示

鳥根県 菅田 かつ子

気が向けば節目へ油さしてやり
菜園の野菜で夕餉みち足りる
人生の節目へ鯛の姿焼き

島根県 松本聖子

年輪を重ねて人情丸くなり

売り出しのあの手に此の腹の虫

湯豆腐に酒がほしいと言う息子

島根県 持田多輝子

日本の明日が見えぬ子の未来

亡き夫の遺影支えにマイペース

母さんの笑顔エプロンよく似合う

出雲市 川島和歌子

手ぶらでも一寸寄りたい家がある

もみじ狩り観光客の列にいる

柚子の香に故郷思う仕舞風呂

出雲市 梅ミツエ

柿落ちて味覚の秋も終る頃

朝霧に人と犬とが見えかくれ

いちょうの葉庭一ぱいに敷く黄色

松江市 福岡芳枝

芋を掘る夫婦へ秋の陽が余り

人一人許して菊を活け変える

忘れない記憶が覗く曇り窓

松江市 山根邦代

人情に触れてうれしい田舎道

ふるさとの土つき野菜届けます

満天の星いいことが降るような

すねるだけすねて我が儘ほつとかれ

世話役の好意あふれるクラス会

道草が何より好きなベレー帽

岡山県 清水金太郎

退院の時は暦で日をえらぶ

結局はなるようになる諦める

神詣り雨が降るのでやめにする

倉敷市 撰喜子

日本中同じ物買う販売機

村おこし昔の偉人をつぎだす

青春切符疲れかくせぬ歳となる

第73回 京浜川柳大会

日時 4月29日(祝) 10時
 会場 かながわ県民センター (JR横浜歩5分)
 第1部 (出席者のみ) 各2句 締切12時
 「待ち遠しい」関水華選・「曲がり角」成田孤舟選・「間延び」大木俊秀選・「丸呑み」斉藤由紀子選・「瞬く」堀井勉選・「溝更」須田尚美選・「マジック」鈴木柳太郎選
 特別課題(一句詠)「舞う」小山一兔選
 会費 2000円(昼食、発表誌呈)
 参加吟(自由吟) 1・2部通し1句
 第2部(投句専用) 2句詠
 「真似る」小金沢緩子・横溝賢二共選
 「マウス」加藤友三郎・高橋里江子共選
 「まばら」竹内寿美子・久保木博共選
 用紙葉書大 氏名明記
 締切 3月10日
 出句料 1000円(郵便小為替)
 出句先 〒223-0057 横浜市港北区 新羽町1747 荒井広和方 京浜川柳大会第2部係 TEL 045-542-3272
 主催 横浜川柳懇話会

国民文化祭・ぐんま2001開催

第16回 国民文化祭・ぐんま2001は、11月11日に群馬県吉井町体育館で開かれた。事前投句者は、高校生・一般の部2672名、小・中学生の部3718名、当日投句者573名。大会各賞は次のとおり。

◎高校生・一般の部

文部科学大臣奨励賞

牛の歩で足りる新世紀は長い 広島 定本 広文

国民文化祭実行委員会会長賞

そよ風を連れヘルパーが来てくれる 神奈川 後藤 洋子

群馬県知事賞

眉太く書いて台詞の無い案山子 岡山 番場 洗之

国民文化祭群馬県実行委員会会長賞

旅人を牛はやさしい目で迎え 青森 北村 吾朗

群馬県教育委員会教育長賞

ふる里の風だ荷札がついて来る 茨城 蛭町茂美路

吉井町長賞

絶筆という荘厳な結がある 熊本 富安清風子

国民文化祭吉井町実行委員会会長賞

鼻先の人参にある落し穴 東京 森崎 清三

吉井町教育委員会教育長賞

ぬか味噌の味です嬢天下です 千葉 田制 窓彦

社団法人全日本川柳協会会長賞

真実がハンセン病の門開く 群馬 勢藤 隆

◎小・中学生の部

文部科学大臣奨励賞

牛からの白い素敵なプレゼント 鳥取 坂口 愛実

国民文化祭実行委員会会長賞

ゴロゴロとかみなりどうしけんかする 大阪 酒田 怜佳

群馬県知事賞

授業中こつそりお触れ書きがくる 鳥取 砂川 裕子

国民文化祭群馬県実行委員会会長賞

お互いにわかりあうため手紙書く 兵庫 小林 友佳

群馬県教育委員会教育長賞

牛の目が物言いたげな日曜日 香川 三橋 悠

吉井町長賞

今までを書き直せたらいいのにな 群馬 川島 千穂

国民文化祭吉井町実行委員会会長賞

牛くんは鼻ピアスしておシャレだね 滋賀 政明佳奈未

吉井町教育委員会教育長賞

雷の音響くなか夏祭り 群馬 見供 遥

社団法人全日本川柳協会会長賞

雷鳴のとどろくなかをひた走る 大阪 東田 薫

敬宮愛子さま御誕生を祝す

(順不同)

まばゆい玉と生れませし敬宮愛子さま

橋高薫風

よろこびをわかせた列島揺れ止まず

宮西弥生

愛子さまゴヨウツツジが似合います

板尾岳人

岩戸から光り輝く姫宮さま

宮崎シマ子

敬宮誕生歓喜新世紀

前 たもつ

祝福を胸一杯に愛子さま

川内叭笑

愛子さま既に気品の笑い顔

林 瑞枝

愛の結晶生まれ日本安堵する

塩谷八重子

鶴愛敬うた日の記帳

古川 奮水

めでたさは愛のブームが来る予感

玉置重人

雅子さまめでたく愛子さま誕生

藤井 明朗

新宮の命名祝う十二月

西内朋月

美しい母の笑顔の雅子さま

上田 俊路

こうのとりに運んでくれたプリンセス

森下順子

お手柄の雅子妃よかつたねと涙

板垣 草丘

日の本の敬愛給う宮の御名

坊農柳弘

姫君に平穏祈るこうのとりの

西村 りつえ

新宮の健やかなれと絵馬に書く

川久保睦子

愛されるお健やかなお育ちを

山下 省子

コウノトリ愛を抱いて舞い降りる

田中笑子

宮様と古希を祝って八坂様

長谷川 司

おめでたい赤ちゃんの声皇居から

小林 由多香

こうのとりの姫宮つれて舞い下りる

木村 春枝

姫宮の誕生新しい世紀

吉田 あずき

内親王敬愛されるお子さまに

池尾 保子

ご出産にあやかり終れ少子化も

湯浅馬洗

平成に輝き添えし愛子様

宮崎 ヒサ子

目度さはうちの子といっしょ愛子ちゃん

飯西 ミサヲ

一隅を照らす産声しかと聞く

内海 幸生

愛おしく吾子を抱かれたプリンセス

西川 更紗

姫は愛子めでたく歩む新世紀	相馬銀波	日の女王は愛受け給い分け給う	奥田みつ子
待望のゴヨウツツジに沸く日本	相馬一花	一度だけ敬宮さまを抱きたいわ	寺井東雲
日本丸内親王得 帆を高く	水谷正子	お七夜に元氣健やか響く声	川原章久
敬愛の文字が躍って歳を越し	太田昭	御命名発表を待つお座布団	稲葉冬葉
お健やかに願いは一つ愛子さま	田中みね	天も地もことほぎ申し空青し	山本義子
エンゼルの様に日本の呱呱の声	吉岡修	愛される御子へ大内山は春	菱田満秋
万万歳万世一系女帝誕生	梶本哲平	菊の香の中で敬愛される宮	森下愛論
お健やかに敬宮さま乳房吸う	一戸ツネ	大内山ゴヨウツツジが愛らしく	都倉求芽
呱呱の声ゴヨウツツジよ健やかに	伊藤玲子	愛子さまご誕生明るい新春を迎えられ	福本英子
敬愛の念すこやかに内親王	津守柳伸	敬宮様産声清し日本晴れ	松下比ろ志
平成の御代安泰の呱呱の声	津守なぎさ	女帝でもそうでなくても健やかに	三宅保州
木樹すべてお花咲きます御所の庭	井尻民	ちよろずのほのほの祝う愛子さま	亀岡哲子
愛子さまへポインセチアが紅く燃え	楠見章子	万世一系弥栄あれと敬宮	海老池洋
プリンセス国中が湧く愛子さま	山中康子	新宮の祝賀提灯流れ行く	長谷川会美
しゃんしゃんしゃん神様姫宮プレゼント	石倉美佐子	待望の皇女は「愛」という御名	伊藤寿美
新世紀のトップニュースだ愛子さま	石原靖巳	産声の津津浦うらに菊日和	石田清泉
愛姫に日本繁栄賭けてみる	橋本多哥由	新宮と初春を迎えるめでたさよ	和泉あかり
内親王國中笑顔の旗の波	坂上かづゑ	お赤飯炊いて我が家もおめでとう	小玉満江
八年の歳月待った敬宮	宮口笛生	愛子姫御所に天使の笑顔満つ	清水潮華
みちのくの地より万歳申し上げ	波多野五楽庵	愛し子が國中照らす年の暮れ	成重放任
新世紀のアマテラスサマ愛子さま	小池しげお	千代八千代栄え新宮愛子さま	松本よしえ

平和を願う愛子さまのメッセージ

東雲の 大空に舞う鶴の声

いろはには新宮様に教えねば

列島が笑顔に沸いた愛子さま

かぐや姫竹の園生の弥栄え

高らかに産声ひびく祝い歌

宮様の命名寿ぐ旗の波

愛子さまお健やかにと拍手する

いつくしむ心ほのほの内親王

敬愛に明日の世開く宮の御名

愛子さま世紀の初頭飾る幸

抱かれし愛常しえに敬宮

愛子さま不況を救う女神様

暗やみに光一筋愛子さま

愛子さま列島曙光ありがとう

思わずも拍手の沸いた御誕生

御来光迎える如く愛子姫

鶴の思し召しとや敬宮

新宮様のニュース世界の目も和む

バンザイで列島埋まる愛子さま

望まれて御所に華咲く愛子さま

銭山昌枝

小西雄々

高田美代子

羽津川公乃

園山多賀子

多々納テル子

小白金房子

松尾和香

河合楽子

三島淞丘

毛利幸

吉田喜代子

大下智子

宮脇道子

岩崎和子

西口いわゑ

吉川寿美

桜井千秀

吉村さち子

江口度

榎本日の出

愛子さま愛しい御子と読みましよう

民草が夢を一つにした朗報

日の丸を揚げてお祝い菊香る

弥栄の御子抱かれた女神像

孟子から命名された敬宮

愛子さま女王姿夢にみる

日本中沸かし新宮御誕生

国中が明るくなつたご誕生

燦燦と御所に光を愛子さま

限りなき平和へ愛の御名ひとつ

愛子さま誕生に沸く昼火花

愛子さまゴウツツジの咲くお庭

愛子さま愛し愛され燦燦と

愛子さまの御声新風よぶ兆し

明けの空凜と輝く愛子星

待ってました内親王のご誕生

愛子さまおすこやかにと祈ります

皇孫へ国旗はためき日本沸く

十二月一日国を沸かせた鴻の鳥

生誕の産声すでに天下取る

鏡抜きお祝いムード盛り上げる

太田扶美代

星野きらり

山原昭二

中村叡子

飛永ふりこ

安達忠央

乙倉武史

黒川紫香

岸本孝子

後藤早智

石谷美恵子

森茂美

清水絹子

保田絹子

鈴木トヨ子

中島志洋

伊藤アヤ子

岩崎公誠

石中時子

畑中節子

久谷まこと

こうのとりの大内山に舞降りる	大石	あすなろ	生まれ来る子供よみんな愛になれ	小寺	花峯
愛子さまひたぶるお待ち申し上げ	森	茜	産声に沸き命名に慈しみ	菊地	政勝
ひと足早く春をもたらす愛子さま	吉村	一風	新宮の誕生ただただおめでとう	山口	美穂
十二月一日女王国期待	安藤	寿美子	新宮へ初冬の日差し暖かく	村上	玄也
愛むすび大内山に呱呱の声	青枝	鉄治	愛子ちゃん御名したしく呼んでみる	嵯峨根	保子
日本に幸せ運んだコウノトリ	川崎	ひかり	御慶事に大内山に春がくる	木村	あきら
プリンセス生まれ徳利が躍りだす	中後	清史	一億の願い希望の星となれ	池内	かおり
皇室の産声敬や愛子姫	久保	正剣	ピリオドを打ち舞い降りたコウノトリ	澤	裕子
孫宮は女ばかりで華やぎぬ	山本	希久子	日の本の敬宮瑞雲とこしえに	富田	蘭水
雅子妃のあい健やかに歩みあれ	小野	句多留	おめでとうよろこび我が家溢れさす	榊原	秀子
健やかに千代に輝け愛子さま	古谷	節夫	喜びで列島がわく新世紀	大谷	篤子
愛しさも愛らしさもあるプリンセス	岩本	笑子	愛子さま拳国一致でおめでとう	神原	文
内親王ゴヨウツツジの華が咲く	池	森子	産声と愛が世界の空翔ける	木村	富美子
二十一世紀はばたくようにプリンセス	松川	芳子	鶴の首のように待たれた愛子さま	松本	聖子
笑顔笑顔笑顔の中の愛子さま	牛尾	緑良	不況時に明るさ灯す愛子さま	山本	たけし
万歳を一〇〇回言つてまだ足りぬ	福士	慕情	東宮の庭で微笑むこうのとりの	初山	隆盛
日本列島一気に沸いた呱呱の声	大内	朝子	父母君にお似ましなされ愛子さま	岸野	あやめ
ま新しい命すこやか愛子さま	北村	賢子	皇室の未来を照らす愛子さま	三宅	満子
皇室にコウノトリ来る十二月	斉藤	島	お印の百合より白きシロヤシオ	高島	啓子
生れまして寿ぐ御名も愛のみ子	城	多喜	祝います皇孫生まれ光さす	宮本	三喜夫
愛子ちゃん一億人に愛される	高瀬	霜石	御名からして庶民的な愛子さま	今	愁女

快哉を叫ぶ筈が鳴り止まず

高橋 岳水

待ちに待つ夢を見たよな愛子さま

梅 ミツエ

国民が双手でお迎え愛子さま

大橋 鐘造

敬愛の念冠し女帝へ第一歩

源田 八千代

敬宮福福お育ち祈り上げ

平松 かすみ

鶴愛を届けてホツとする

鷺見 正子

内親王バンザイアフガン消しておく

遠山 可住

御祝福天使姫君健やかに

西脇 日出子

愛ちゃんと同じ日生まれ愛とつけ

岩原 喬水

陽のひかりいとおだやかに松の御代

松本 はるみ

愛子さま十三年のお身ぬぐい

太田 とし子

初春のめでたさ倍に愛子さま

米澤 俣子

日の国の御子ご誕生祝う新春

山口 三千子

よろこびのゴヨウツツジは白く咲く

最上 和枝

愛子さま希望の光民の夢

熊代 菜月

皇孫に其の御名床し愛子様

谷口 義男

待ちましたみこの誕生ただうれし

玉置 英子

愛らしい産声日本を明るくす

中村 忠敬

待望の姫宮さまにゆるむ頬

小林 てい子

ロイヤルベビー迎えて国が芽生え沸く

国本 悦子

プリンセス誕生月がまん丸い

岸本 宏章

列島の師走色どる愛の花

谷口 寿子

慶びの声が日本中春にする

谷岡 清子

積年の刻敬宮御誕生

岸 桂子

あかねさすニュース沸かせて愛子さま

吉岡 きみえ

沿道のご会釈優し母の顔

篠原 いつふみ

姫宮の光あまねく国包む

舟木 与根一

世界から愛されるよう敬宮

徳山 みつこ

一億のよろこびに沸く竹の園

前田 喜美子

まん月にかぐや姫のように御降誕

小栢 こずえ

愛子さま朗報聞いて沸く茶の間

藤井 一二三

新宮の喜び愛の鳩を見る

加藤 スズ子

一燈を得て慶びの二重橋

玉置 当代

雅子さま笑顔の中の愛子さま

深田 定子

ニュース見てゴヨウツツジの苗を買う

鈴木 公弘

愛子さま萬歳お待ちしました

岩屋 美明

おん健やかに直ぐしく幸くあらせませ

榊本 宏子

愛されてゴヨウツツジがパツと咲く

牧田 賀寿恵

皇孫誕生津々浦々に歓声とよめく

八木 千代

十二月列島が沸く宮誕生

野田 栄

持田 多輝子

愛子さま生きるよろこびくだされた

さえき やえ

姫宮からやさしい力頂いた	敬愛に光明を見る新世紀	千代八千代寿く宮の御誕生	皇室の慶事浪花も盛り上がる	すめら苑久しの御子よすこやかに	こうのとりの大内山に温い風	私の愛する国の愛子さま	愛の字が私も好きで娘に授け	コウノトリ来たる日本中わらう	父の誕生日に生まれた愛子さま愛し	愛の字にあやかり川の字で寝てる	御誕生地球を愛で包みたい	国中からスポット当たる新宮さま	日の国に天使降りくる十二月	おひいさま明るいニュースありがとう	二人目は親王様と町の声	内親王の誕生に沸く日本	和ませる風従えて愛子さま	ほんとうの愛は敬う心持ち	列島に笑顔走った御誕生
中井ゆき	藤田芳郎	恒松叮紅	田辺鹿太	的場十四郎	岸田知香子	福島万年	森井菁居	藤解静風	小島蘭幸	時広一路	出口セツ子	富山ルイ子	木本朱夏	河内月子	穴吹尚士	小林妻子	安達由美子	土橋益子	西村益子
プリンセス津々浦々へ幸ひろげ	皇室に明るさ増して愛子さま	ご生誕祝しバンザイ沸く我家	列島に寿ぎごと旗の波が沸く	皇室の空に希望の女星	新宮に心ほのほの晴れ渡る	愛子さま見つめる殿下とろけそう	おめでとう姫宮様の御誕生	愛子さまきつと愛敬ある姫に	おめでとううれし涙が出てしまう	お姫さま明るい兆しおめでとう	日本中夢をばらまく愛子さま	新宮の輝き歓喜国を挙げ	大内山に新宮さまの産声が	御誕生皇居の空は日本晴れ	姫宮誕生松の園生の弥栄に	愛子さまやんちゃに育つて下さりませ	列島の耳へ産声プリンセス	ことほぎの色紙書いてる嬉しい日	愛子さま暗い世相に光差す
谷口泰良	石田安男	東章代	桑田ゆきの	清水英旺	権代康女	高木道子	若松雅枝	俣野登志子	楠昭子	酒井一壺	中澤伽羅	福田登美	山本玉恵	武島ちよえ	矢内寿恵子	渡辺さだを	指宿千枝子	笠井欣子	米田幸子

麻生路郎物語

(1)

東野大八

著者ご遺族の了解を得て、昭和50年1月号から「川柳塔」に掲載されたものを原文のまま再掲載します。

まえがき

八十余歳の宝寿を生駒市の寓居に自適されている麻生路郎先生夫人葭乃さんを、一度お訪ねしたいものだと思願してから久しい歲月がたつ。それが思わぬ機会からかなえられ、秋の十月の最中そのデートは成功した。

日時を双方定めあつての十年近い再会であつたが、玄関先の出会いはいとも気軽な近所なみの挨拶ですんだ。このことは月毎の川柳塔誌上のおなじみに加え、日ごろの文通繁き余徳に由来しよう。

葭乃さんから私あての書信は、すべて四百字詰原稿用紙で、現在までに左様いうに二百

枚は超えていよう。その文体は情思こまやかに簡潔明快、筆勢流麗、適度の風刺やユーモアもまじえられている。批文のたびにこれら八十余歳の老女の手になるものかと感銘しきりで、もしわれ彼女の適齢におよんだとき、これ程の達意の文筆が保てるであらうかの危惧の念を抱かしめられたことである。

ともあれ、葭乃さんが寄寓先のご当主、令息の麻生アトさん御夫妻へのご挨拶のあと階上の彼女のお部屋へと招じられた。部屋中央にひときわ眼にたつのは、路郎先生の赤銅色の大きな胸像である。そして部屋一方にはその日暮しも軒に雀がこぼるよ、路郎の見事な大幅が眼を奪う。

「私はもはや路郎に殉死した身体」

とある葭乃さんの書信の一節が忽ち胸に甦るたはずまいである。これらの遺品を見上げる部屋中央のこじんまりした長火鉢の座につくと、その中の南部鉄瓶が温く湯気をはらんでいる。見回すと、あたりの壁や小さな書庫のあたりには、画家、俳人、芸能人、川柳人の大モノ、小モノの額や色紙や短冊が風雅なムードをかきたてている。

板敷一枚を加えて横長七畳、面白い部屋でしよう——と微笑しながらお茶をいれて下さる葭乃さんと、やがて雑談しきりの一ときだが総じて路郎先生生前のお話ばかり。その茶話も一きりのあと

「路郎に関する門外不出の、とつておきのお資料があります。お見せしましょうか」と葭乃さんがおっしゃる。願つてもないことと大きくうなづく私の前に、やがて古色蒼然たる古文書の一冊がとり出されてきた。黄色な故紙に変じた、それはコクヨ野紙が背クロス表紙でとじ込みになった部厚いもの、表に「麻生路郎先生伝記資料 福田山雨楼記」とある。

書かでものことながら山雨楼といえは、柳界熟知の川柳評論家で、路郎門下の高足、晩年は川柳雑誌副主幹となり、その活躍が期待されていたが、昭和三十年六月十六日惜しく

も宿痾昂じて死去された。本名福田義達氏、享年五十七。私の手にしたその古文書の一冊こそその山雨楼先生貴重な遺品の中の一品に相違ない。襟正す想いの卒然たる私へ葎乃さんが

「御覧になるならお貸し申上げてよろしいのよ、川雑に因縁浅からぬ、ほかならぬ貴方のことですから……」

と仰有る。実のところ、私は二の句がつけず呆然となった。歡喜僥躍とは正にこの事だ。

午前十時過ぎから午後二時まで、アート御夫妻の心のこもる昼食の膳に、葎乃さんとおふたりで箸をとる光榮に浴して、私の長つちり訪問もやがて時間とはなつたが、訪問の収獲たるやまことに絶大である。山雨楼先生遺品の資料に加え、葎乃さんがとっておきのこれ一冊という麻生葎乃句集「福寿草」まで強引に拝借しておいとました私だから――。

ここまでくれば「麻生路郎伝」を――帰りの車中でかく決意した私は、早速に帰宅すると同時に、この旨を葎乃夫人に伝えた。折返えしのご返事はつぎの通り。

「実録麻生路郎伝のような伝記風にすればよほど年月日も正確に調べてからかねばなりませんから、その辺はあまり肩の凝らないタイトルがよいと思います。もの忘れのよい私

に、しかも時間の觀念のない私に、あれこれについていつごろのことかと訊かれても困るのです。(中略) まあ、貴方のいわれる「路郎物語」をあなた様のご企画通りにお書きになって結構です。大変お世話になります。がよろしくお願ひいたします」

まさに身にあまる過分なお言葉と、そのお便りが心にしみた私である。

右手に貴重な葎乃書簡、左手に山雨楼メモ、補足は山なす川雑のナンバー、加えて手持ち資料に路郎先生門下の諸賢雲の如し、意を安んじて筆がとれる。かくて大胆不敵にもこの「麻生路郎物語」をスタートさせることにした。

葎乃夫人もご指摘の通り、私はこの路郎

尾 道

麻生路郎は明治二十一年（一八八八）七月十日、尾道市十四日町に生れた。路郎は柳号で、幸二郎が戸籍名である。父善七三十四歳母くに三十一歳の折の出生である。

十四日町（地元の呼称はジュウシニチチヨウ）は、尾道市西部の本町筋に続いていて近くに尾道郵便局（本局）があった。幸二郎

先生伝は、率直にいつて実伝というより一篇の物語と名付くドラマに仕上げたいのである。すなわち「川柳」なる特殊なジャンルの文芸にその生涯を燃焼しつくした一川柳人の人生――いいかえればその川柳なるものに悔なく殉じていつたある夫婦の物語――といつてもよい。随つてこのストーリーの主人公は路郎その人だけではない。ある場合には葎乃夫人その人の物語でもあるともいえる。むしろ私にとつては、ある川柳人の妻に捧ぐ……とすらサブタイトルにつけ加えたい想いでいる。

なお、本稿は進行の構成上、すべて文中敬称を省かせて貰うことにした。ご諒承願いたい。(S49・10・25)

の 風

が産ぶ声をあげたとき生家は陶器商を営んでいた。この稼業は祖父久助の代からのもので、父善七は通称久七で親しまれていた。

出生した幸二郎だが、どうしたわけか後程なく尾道市の対岸にある向島の漁村に里子に出された。母くにはその翌年に他界している。数え歳十一歳まで父母の愛も知らぬまま

彼には里子の生活が続いた。「写真でみると、母は明治初期型の面長の美人だが、麻生家の嫁にきてから晩年は病身で、海岸通りの寺で養生する生活であった由だが、この母の兄は三条小鍛冶なんとかという刀鍛冶だったとき」(山雨楼メモ)

里子に出された相手方の育ての親の名も、部落の名も、山雨楼メモには記載なく、関係者の間でも全く記憶されていない。

小宮豊隆著の「夏目漱石」出生のくだりに、つぎの要旨のことが記されている。

「漱石は生れ落ちると里子に出された。彼がなぜ里子に出されたか、それは分からない。漱石の母が、初老になって懐妊するのは面目ない、といったところが、それだけの理由ではなさそうである。漱石の出生が両親から歓迎されていなかったことだけはたしかである。漱石には腹ちがいの姉が二人あった。同じ腹からでも四人の兄と一人の姉が生れている。そのうち二人は漱石の生れる前に亡くなったと言つても、はげしい渦を巻いて刻々と動きつつある当時の社会情勢の中で、一人でも荷厄介が殖えるということは、少くとも父親にとつては、大変な重荷に感じられたものに相違ない」

漱石自身、作品の「硝子戸の中」でつぎの

ように書いている。

「私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里にやつてしまった。その里というのは、無論私の記憶に残っている筈がないけれども成人の後聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡世にしていた貧しい夫婦ものであつたら

しい。私はその道具屋の我楽苦多と一所に、小さいザルの中に入れられて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝されていたのである。それがある晩、私の姉が何かの序に其処を通り掛つた時みつけて、可愛相とでも思つたのだから、懐へ入れて家へ連れてきたが、私はその夜はどうしても寝つかれずにとつと一晩泣き続けに泣いたとかいうので、姉は大いに父から叱られたさうである」

漱石の出生は慶応三年(一八六七)で、彼が二十一歳のとき、路郎が生れている。この間二十年だが、時代環境と親、とくに父親意識には、往時漱石の父のような家庭感覚が多かつたらしい。明治初年生れの筆者の父親も、かつてそのような処世談議を試みていたのを記憶している。

夜店の寒いザルの底で眠っていた漱石に対し、路郎はどうか。

「七歳のとき学校へ上がる年齢からか、生家へ引き取られることになった。だが、家へ

帰るのはいやだと駄々をこねるので、兄が背に負ぶつて海岸通りを慰めながら、長いこと説得していたが頑として承知せず、ついに家の方ではあきらめて島へ返えした。私はその島の小学校へ上り四年生になるまで通うことになった」(山雨楼メモ)

薄情な生みの親に対する里子のどこか本能的なレジスタンスみたいなものが、漱石にも路郎にも感得される。荷厄介な幼児を里子に出した親側の身勝手さも、ともにこの両者の話の底に漂っているのも心にくる。

駄々をこねる強情な弟を背負つた兄の名は福太郎、路郎にはこの兄と、二人の姉がいた。上の姉は神戸へ嫁し、下の姉は大阪の嫁ぎ先で年若くして死亡している。(名は不詳)

「私が二十四歳のころ、岸本水府君と二人で神戸の姉のところへ立ち寄つたとき、若い二人を前にして姉から、若いのに川柳をやつたりしてはいけない、そんなことは老人になつてからやれときつく叱られた。然し私は老人になつてはホントの恋はできない。僕が川柳をやるのもそれと一緒に」(山雨楼メモ)

壮年期の路郎が、ひところ漱石に熱中して、句会にまで漱石の著作のものを携へ読みふけつたと、山雨楼メモにも記されているが漱石

の生い立ちや、その家族関係などが、ひどくわが身に似通つての上の、それは親近感からもきている、そのようにうけとれぬこともない。この辺で路郎が出生し、里子の一時期を過ぎた尾道という町についてふれておこう。なぜなら路郎の父母が住んだ、いわば彼の故郷の土と海でもあるからだ。

尾道市は海と山との接点に東西へ細長く伸びた町である。すぐ前に向島という大きな島があるため天然の良港を形づくり平安時代から瀬戸の良港として栄えた。

建武三年（一三三六）足利尊氏が九州征伐の際、ここに立ち寄り浄土寺観音に戦勝を祈願した。この際、尊氏の募兵に応じて多くの尾道の漁師たちが船出に随つた。そして死者も出た。この因縁からかこの町には寺が多い。江戸期に入ると北前船がこの港に出入りするようになり、北日本の物資をどんどん陸揚げした。このため尾道は時の豪商で埋つた。思えばこの頃が尾道港の最盛期であつた。

明治四年の廢藩置県後、近代港湾の面目を發揮する広島周辺に船は片より、尾道港は次第にさびれ、小振りの商港化し漁船の舟だまりとなり、向島に日立造船が根を下ろしたことに伴い港内ムードは一変していった。ところで尾道という町だが、奇妙に政財界

文化関係の名のある出身者が皆無である。路郎が生前よく口にした法曹界の名物男花井卓蔵にしてからが尾道出身ではなく実は三原市である。とにかくどの人國記をみても尾道市はアルカリ地帯で、強いて探せば頼山陽の愛人玉蕚ぐらいのものだ。

観光尾道の看板千光寺の山頂から、少し下つたところに「文学のみち」が出てきている。ここには尾道の地に関係のある作品をもした作家たちの文学碑や歌碑がずらりとたたらだら坂の道ぞいに建っている。数えてみるとなんと二十前後もある。

尾道に旧宅を遺した「暗夜行路」の志賀直哉の碑文より、筆者は林芙美子の「放浪記」の自然石の文字の方が好きだ。「海が見えた海が見える」にはじまる碑の文字は、彼女の短篇「風琴と魚の町」を筆者は憶い起す。魚油のしみついて汚れて光る尾道の石畳にオイチニの葉の手風琴が流れていく。その筋骨のついた古びた軍服姿の父のあとから、みずほらしい親娘が風に吹かれてついでいく。

「オイチニの新馬鹿大将の娘じゃ」と蔑すまれる芙美子のこの作品のあとに「市立女学校」がつづく。漂泊の養父母と暫くここに止つて卒業した尾道高女（現東高校）には、つぎの彼女の詩碑が建っている。

「巷に來れば慰いあり 人間みな吾を慰めて 煩悩滅除を歌うなり」

筆者はこの詩碑のさびた面を憶うたびに川柳詩人路郎の幼き日の姿を想いうかべる。くろずんだ夕焼雲の弓型の渚（なぎさ）に、ぼつんとふところ手でひとりたたずむ男の子、独りよがりて片意地で、ひたむきな直情さである癖に、どこか人の世に泣虫で、後年の路郎の性格を織りなす生成の片鱗は、尾道の里子の暮しを吹き抜けていった潮風にもあつたことはまぎれもない。

「寺や鯛で知られる故郷の土を、もう二十余年も私は踏まない」
そう述懐したのは昭和九年、路郎四十七歳のときである。

第20回川柳Z賞作品募集

応募作品 創作30句を12組。今年発表作品

か未発表作品

締切 1月31日消印有効

選考委員 橘高薫風他9名

応募用紙 4B専用紙（事務局に請求）

参加費 不要。入選句集希望者は千五百円

賞 大賞・風炎賞・優秀賞

問合わせ 川柳Z賞事務局

〒730青森県蟹田町145

TEL・FAX 0174-422-3537



特集 お正月

(順不同)

振り返れば

榎原 公子

我が家のお正月今昔

木村 あきら

七十数年前の記憶を辿ってみることにします。昔は大変寒い旧正月で祝っていました。

大晦日の前から裏山より何十キロもある大きな松を伐って帰る座敷の天井に飾り、その下に神棚をしつらえ海の幸山の幸を供え、玄関には松竹梅を飾り、窓という窓には七五三縄(しめなわ)を取り付けていかにも正月らしい風景でした。

除夜の鐘を合図に井戸から若水を迎えて来てそのお水でお雑煮を炊く。家で朝晩の食事時、家長に向かって「お芽出度う御座います」と挨拶しないと食事にありつけなかった。

また食事時に他行中の者(陸海軍に在隊中

の者を含む)がある時は、床の間に陰膳を据え、尚酒盃に酒を注ぎ供えることを忘れない。また家長は家を代表して初詣での後、親類縁者や村長宅、村の有志宅へ年始回りに出掛ける慣わしがあり、なかなか忙しい事でありました。

今頃のお正月は新正月で祝うことは勿論、元日の朝一回だけ長上に対しお芽出度うの挨拶だけです。また七五三縄飾りや神棚を祀っていない家もあるらしい。

その代わりにか愛車には高価な七五三縄を前部に飾っている。信仰を通り越して一種のアクセサリー気分であろうか。

何とも西暦二〇〇〇年ともなると様変わりもいところか、老人が見ると苦笑物である。

いやはやとんだ愚痴話でした。皆さん、どうか今年も素晴らしい一年でありますよう祈りつつ筆を置きます。

しがない田舎の月給取りの暮らしの中から、特筆するような正月風景は思い浮かばない。さて困った。何を書けばいいのかわからない。さて十一月半ば、十歳の孫が「早くお餅つきたいな」と言い出した。

スイッチ・オンをするだけの全自動餅搗器で捏ねる風情のない餅つきも、孫たちにとっては正月行事の「コマ」として、楽しみの一つになっているのだろうか。

一九四五年前後、日本が荒廃の極みにあった頃小学生の私は食べ盛りの日を送っていた。祖母、両親、兄弟七人の十人家族が食べることにのみ心を奪われている極貧の真つ直中にいた。しかし母はどう工夫したのかお正月だけはたっぷりとお餅をついてくれたのである。毎年十二月二十八日の早朝から臼と杵が用意され、台所はごった返した。殆ど一日がかりで十臼のお餅をつくのである。一臼が二升であるから合わせて二斗(三十キロ)。白餅(餅米とうるち米)、福餅(小豆を入れる)、俵餅(小麦粉が入る)、柿餅(渋柿を入れる)

蓬餅など、あの手この手で少しでもお餅の量を増やしたい母の苦心の賜物であった。

そして、その日のうちに一臼（二升、三キロ）のお餅が、私たち兄弟のお腹の中に消えていった。今も兄弟の語り草になって笑いあっている。

時を経て私は洋裁を生業とするようになり結婚・子育てと並行するように高度成長期の超多忙で、髪振り乱し仕事に追われる日々が続くようになった。

年末最後の仕事を仕上げるのが三十日の暁。それからが大変、まずお正月用品の買い出し三十一日の朝から掃除、床の間の薄端に若松を、玄関に盛り花、打ち水をして掃除完了。すでに夕刻になっている。お鏡を飾り、仏壇と神棚にお光りを灯す頃、迎春らしい静謐さが漂いはじめる。この厳肅な空気でやっと一年が終わったという解放感と、新しい年への緊張感で非常に清々しい気分になるのである。日頃、あたふたと何事も中途半端に打ち過ぎていた日常であっても、せめて年末年始のけじめはつけたいたい私の一人よがりである。生きてきた世代によって正月の風景も思いも異なるが、果たしてすでに父親母親に託している我が家の子供には、どんな正月の記憶があるのだろうか。後ろめたい限りである。

子に残すお正月

出口 セツ子

お正月といえば、お正月準備に私の実家では門松を立て、わいわいと家族全員でお餅をついたり、つきたての温いお餅を食べたり、手作りお節と大きな鯛と、一杯の数の子を用意し、除夜の鐘を聞き終わると電車で初詣でに行き、それから眠る。元日も一家全員が揃ってお祝いをし、カルタ取りを楽しんだ。

子供たちにもそんなお正月を体験してほしかったが、野菜嫌いの子供たちはお節嫌い。すき焼きやカレーが良いと食べないので、数年前からデパートのお節に変わった。

お餅も両親が年老いて親戚に貰っている。この鏡餅の飾り方が同じ大阪で主人の家と違う。私の実家ではお餅に昆布や干し柿、橙を飾るが、主人の家ではお餅の回りに五穀豊饒を願う米をまく。喜ぶの昆布や橙が無く、勝ち栗といって栗を置く。そして鯛は、家族の中にその年の干支の人が居ないと用意しない。

お正月一番のイベントは神主さんを決めることである。村の神社には神主さんが居ない。松の内に村人全員が集まり、台の上に全員の名前を書いた紙を載せ、前年の神主さんが御幣を振る。その御幣にひつついてきた紙に名前の書かれた人が、その年の神主さんになる。神様に選ばれた神主さんになると良いことがあると言われるが、神主さんになると一年間大変である。しかし、遅れてきた人や欠席した人が当たることが多いので、皆、定刻にちゃんと来る。

そんな村のしきたりや、日本のお正月の良さを子供たちに引き継いで行きたいと願っている。

海苔のお雑煮

富田 蘭水

お正月、なんというすばらしい言葉だろう。待ちに待った新年お正月、一家全体で元旦を迎え出発する松の内。老若男女を問わず、正月の魅力は希望に燃え格別である。

さて我が家の正月は、年末に、煤払い、餅つき、玄関に輪メめを飾り身も心も浄めて除夜の鐘をきき初春。暗い中に産土の神への初詣で。神の国出雲地方のわが家では、しきたりによって、歳徳神の方向に手を合わせ、今年最初の水、若水を汲む。昔は井戸水であつ

たが廃れ、水道水になり物足りなさを感じるも時の勢い。おめでどうの中にも頂く屠蘇お雑煮膳、私の幼時は一人一人別の箱膳であったが昭和二十年代の後半より廃止改正された。

この雑煮について少し詳しく書いてみたい。雑煮は昔は毎年、新筵を注文して床の間神前に敷き、その上に、つき立ての大きな平餅を行儀よく並べるのが子供の役目であった。平餅の裏に筵跡がついたのを、醤油で煮て頂く時に、汁椀の餅の上に、つかみ海苔（海の岩に自生の生海苔）か岩海苔をあぶってかけ頂く。これがわが家の雑煮のしきたりである。他の調味料、食材を入れるとか一切ない。淡白なものである。

海苔のお雑煮、他所には珍しいのではなからうか。古く出雲大社では、海苔のお雑煮の記録があったとか、NHKが昔放送していたように記憶する。出雲大社の正月行事が、出雲地方一帯に古くから伝わったのかも知れないがさだかで無い。味は、実に淡白の中に餅の味が出、海苔のすばらしい香りが雑煮と言えは直ぐ思い出されるくらいである。

幸せなお雑煮に縁起をかつく、黒豆、数の子、田作り、昆布するめ、等のお皿盛り、愈々今年のお正月の出発である。幸せ折る、八百万の神々に感謝しながら……。

夫も協力「栗きんとん」

田中笑子

私は、東京生まれ、東京育ち、嫁いだ先も東京。さて、「わが家のお正月」は、となる特別な事は何もない。

さんざん考えて頭に浮かんだのが、わが家のお節で人気第一位の「栗きんとん」です。

二十年前、大きな栗の甘煮缶を頂き「さあ、どうしよう」と、暫く缶と睨めっこをしていました。「そうだ、失敗したっていいじゃないか……」と昔のレシビを思い出して作ったのが栗きんとん作りの始まりです。

まず、お芋選びから始まり、良質の金時芋を約三キロ弱（大六本くらい）用意する。

三十日夕方から作り始めます。水道の下で皮を厚くむき、切ったお芋を約二時間、水に晒す。その間、三、四回水を取り替える。

それを火にかけて煮えたら水分をしっかりと蒸発させ裏漉し。最初の頃は、一人で作った栗きんとんでしたが、或る日「そうだ、裏漉しを夫にやってみたらどう……」と「お父さん、裏漉しやってみてくれる？」と聞いたところ、男子厨房に入らずの人なので、目を白黒させて

いましたが、「いいよ！」と良い返事が返ってきたので、気の変わらないうちに取りかかってもらう。

裏漉しは簡単にザルと小さな掃り粉木を使う。夫はさすがに力があるので、思ったより上手に出来、それから毎年このコンビで作っています。出来上がった味は、あっさりとした素朴でなんと言っても無添加です。

家族は「他のお節はどうでもいいから、これから栗きんとんだけは作ってね」と嬉しい言葉が返ってきました。

大鍋一杯の栗きんとん。どうしようかとの心配をよそに、毎年待つていてくれる人がいる喜びを味わっています。

得意になって子供たちに話す夫の顔は、ご想像にお任せします。

出雲大社の初詣で

小西雄々

昭和二十五年の元旦以来、私の家では出雲大社に参拝し、平成十三年で連続五十一回となった。別に大社教の信者でもないが、童話に出てくる「大黒様」がお祀りしてあり親近感が有る。昭和二十五年は結婚の年である。

屠蘇を祝い午前九時頃米子駅発の、旧国鉄の山陰線で出雲市駅まで行き、支線の大社線に乗り換え、下車後、約一キロ近い参道を歩き本殿に向かった。参拝後は絵馬とお札を購入し、御神籤を引き、神酒を素焼の盃でいただいて帰路についた。この頃は出雲地方にも積雪があり、猛吹雪の時もあった。

昭和四十年頃から、モーターリゼーションの世になり、私も運転免許を取得し、車での参拝に切替えた。しかし、出雲大社の大鳥居が見える頃から大渋滞となり、車は進まず疲労を覚えるようになった。そこで昭和五十年頃から、NHKの紅白歌合戦がすむと、わが家を出発するようにした。これで出発から帰宅まで、従来七時間以上かかっていたが、一時間短縮し、六時間ですむようになった。

しかし、参拝でいろいろな事件を目撃した。昭和四十七年には、米子市に近い安来駅付近で、交通死亡事故を見た。道路を横断中の老人を、参拝帰りの車が轢き、即死状態だった。これから一年間の幸せを、神の前で祈願したのに「何たる事か」と思った。また、セクターラインをはみ出した車の衝突事故も、四回も見た。出血した事故者を運ぶ救急隊を見ると、怖くなった。

元旦というに救急車が走り 雄々

とつさに頭に浮かんだ句だが、忘れない。

除夜の鐘を聞きながら、深夜の参拝も喜寿の頃から、体にきつくなり、再び屠蘇を祝つて出発するように戻した。昔はタイヤチェーンを取付け、慎重を期したが、五十年後の最近では、地球温暖化のためかその必要はない。平成十四年の元旦も、参拝する予定です。

ハツピー・ニューイヤー

井上桂作

「もういくつ寝るとお正月」。戦時下の食糧難の時代でも白いご飯が食べられる。親の苦勞もわからずに指折り数えて待ちに待った、子供の頃がなつかしい。

幸いにして戦後の食糧難も解消し、我が子を育てる頃には贅沢なおせち料理で、毎年お正月をすごしてきました。ところが三人の子供もようやく成長して家族揃って正月を迎えることも次第にすくなくなりました。

以前は「男子厨房に入るを許さず」と言われましたが、お正月のおせち料理だけは、と妻に教わりながら十年間も一人で作ってきました。

した。しかし今となれば貴重な経験でした。

そこで還暦を迎えるようになり、お正月は思いきって海外で過ごすということになりました。年末から正月にかけて一週間自由な旅を続けています。

最初は中国の洛陽・北京・上海・西安・桂林などの各地を歴訪しました。古都洛陽のホテルでは予め年越そば・お雑煮などを用意してもらい、そのうえ近くのお寺で除夜の鐘まで撞かせてもらいました。

一般に中国では新暦の正月は、役所・会社などが一日お休みがあるだけで、普段と変わりません。

東南アジア旅行中の出来事で、マレーシアでは毎年正月一日に独立記念祭が行われます。悪役は銃剣を持った日本兵で、熱心に見学していると隣のおばあさんに、「あなた日本人」と白い目で見られ、逃げるようにしてホテルに帰ってきた思い出があります。

欧米の国々では、最大のお祭りであるクリスマススの後だけに、ハツピー・ニューイヤーの声を聞くだけです。スイスからフランスのバリに向かう国際列車の中での出来事で、日本時間では正月一日の明け方になります。仮眠中のあるところをおこされて「新年お目度う」

と、外人ガイドに挨拶され一瞬間くらったことがありました。

同時多発テロの関係で、外国旅行も制約を受けるようになり、フィリッピン旅行も駄目になりました。これからはわが家で静かに川柳でも作りながら、お正月をすごしたいと考えています。

少年時代のお正月

大橋 政 良

車の氾濫、交通事故のニュースの入らない日はない昨今、高度成長の置き土産から一息入れて、フィルムを七十年巻き戻して少年時代を回想して見たいと思います。

○月○日

私は雪国の農家で生まれ育ちました。少年の頃は雪が遊び相手として、冬は楽しい季節でした。

冬休みは勉強はそっちのけ、毎日がスキーでした。小学校の裏の坂がスキー場です。朝から晩まで、濡れた手袋が凍りついて、カチカチになるまで遊び興じていました。

金具の付いたスキーにスキー靴という子供

達は数える程で、ゴム靴につっかけて履く簡易なスキーで、転ぶとスキーが下まで出るの
で、紐でゴム靴に縛りつけていました。スト
ックは竹を切った手製のものでした。みんな
貧しい時代でしたが、でも楽しい毎日でした。

○月○日

その頃の主な乗り物は、馬轡が主役でした。
一番楽しかった思い出は、正月二日の買い初
めに一家揃って、馬轡で街に出かけること
でした。この買い初めで、新しい下着や服など
買ってもらい、子供心にも楽しい一日でした。
一升瓶を立てて、魚の競り売りをしている
ほろ酔いの親爺さんの口上が面白く、黒山の
人ばかりでした。

その魚屋で競り落とした、畳半分くらいの
カスベ（エイの一種）に縄を通し、雪道を
こらせて帰る客の姿が印象深かった。

今一番記憶に残っているのは、初荷を運ぶ
馬轡の賑やかさです。空の石油缶（一斗入り）
を叩きながら、掛け声も勇ましく、街中の店
に初荷を届けて回る人馬一体の行事は、私達
の年代しか知らない一つの風物詩として、心
に深く刻まれています。

交通機関の主役が自動車に変わった今、も
う見ることの出来ない、脳裏に焼き付いた秘
蔵フィルムの一巻です。

愛染帖

波多野五楽庵選

湯豆腐と一緒に今日も暮を引く
ペン牝肌はライバルだろう友だらう
和歌山市 木本 朱夏

君の瞳に見つけた絶えまない渴き
無意識に指が動いた消去キイ
米子市 政岡日枝子

黙り続けて真の仏になった石
つつかい棒の裏の弱さも見ておこう
富田林市 池 森子

秋日和崩れて亡父の骨拾う
照る日曇る日言葉を洗う手を洗う
和歌山市 福井 桂香

自転車漕ぐ爪先から冬に
五線譜をボカボカ駆けてゆく木馬
東京都 播本 充子

なまくらな包丁で切る愛その他
私は偉いんですというリボン

松原市 小池しげお
面一本取って奥歯が痛くなる
欠点を探してばかり淋しい日

西宮市 門谷たず子
おんな半分亡くして月も淋しげに
今すこし残る時間を掌で包む

和歌山市 西山 幸
風呂敷に包むわたしの重さかな
人差指はみんな疑い深そうだ

弘前市 高橋 岳水
自我捨てて見れば許せることばかり
老い受容せねばと思うシニア券

吹田市 石原 靖巳
頂点に立つと昔が邪魔になる
賞味期限過ぎた男の無味無臭

堺市 桜沢 千世
脈がまだあるやも知れぬ畳替え
起承転結転のあたりで木にもたれ

和歌山県 中後 清史
肩に手を置かれ誤解が溶けてゆく
落ちこぼれても輪の中にいる安堵

美弥市 安平次弘道
腹立てて見ても所詮は多数決
余つたら貰い足らねば出しておき

横浜市 川島 良子
頷いているが話は聞いてない
弱音でも吐ければ楽になるだろう

倉吉市 野口 節子
人間に生まれたことが万歳だ
親と子が同じ目線でわたり合う

松江市 津川 紫晃
少し羽目外してみたい砂時計
傘と傘出会って雨の日の別れ

唐津市 仁部 四郎
恋知らぬ男が探す冬の花
歳時記で探して冬の花選ぶ

横浜市 近藤 道子
迷いからぬげ出る色を探さねば
コスモスの匂はずした立ち暗み

大阪市 津守 柳伸
ちちははに逢いたくなくて散る木の葉
いつくしむ花に時どき背かれる

大和高田市 鍛原 千里
北の窓開ければ北の歌聞こえ
八尾市 井尻 民

京都市 都倉 求芽
あの日からあわぬと決めた終電車
ライバルがなぜか優しくしてくれる

和歌山市 古久保和子
直角に曲がって冬と鉢合わせ
ポケットの穴からつづく冬の彩

和歌山市 楠見 章子
風呂敷に結んでほく昔の絵
苛立つているなコップの中の波

和歌山市 川上 大輪
その裏に淋しい響きある軍歌
寝屋川市 江口 度

弘前市 一戸 ツネ
虫くいの余生を探るアミダくじ

堺市 河内 月子
忙しくされてる方へ無理ひとつ

川崎市 和泉あかり
意地悪な人とも握手して別れ

堺市 矢倉 五月
正月もやっぱり同じ薬飲む

米子市 青戸 田鶴
栄光の馬の末路は聞かぬ事

和歌山市 松原 寿子
回想をすればわたしが崩れ出す

西宮市 奥田みつ子
思い込み激しく花を枯れさせる

八尾市 篠原いつふみ
流木の過去は詮索などしない

西宮市 牧淵富喜子
かいつまんで話して秋の月が去る

富田林市 大橋 鐘造
肩書きが消えて男の歩に戻る

和歌山市 桜井 千秀
完全無視されて無視する外はない

岡山県 矢内寿恵子
満天の星から届く母の鈴

豊中市 田中 正坊
柩閉じるまでは分らぬ幸不幸

横浜市 田中 笑子
人生の縮図みてきた足の裏

黒石市 相馬 一花
控え目なお洒落の並ぶ参観日

愛媛県 花岡 順子
他人なら他人はつきりしておくれ

大阪府 澤田 和重
門を外し逢いたい人がいる

鳥取県 石谷美恵子
仲裁に走り火傷をして帰る

横浜市 菱田 満秋
掌の線を信じてない長寿

堺市 山本 半銭
齒の痛む時に饅頭やって来る

鳥取市 福田 登美
体裁を繕い道を狭くする

弘前市 宮崎ヒサ子
真つ当では合わなくなつて来た視点

八尾市 村上ミツ子
下手なことするより何もせん方が

藤井寺市 太田扶美代
コスモスの畑で泣いてきたようだ

札幌市 三浦 強一
じゃんけんで時々勝てるほどの運

富田林市 藤田 泰子
煩惱がひとつ残つていて迷う

羽曳野市 吉川 寿美
柿たわわ迷い一つが吹つ切れぬ

羽曳野市 徳山みつこ
小躍りも背中合わせもして夫婦

鳥取県 小西 雄々
たつても骨粗鬆症とは別だ

海南市 三宅 保州
去年から新年号を読んでいる

四楽巖市 吉岡 修
北向きに寝てみようかと思ふ

京都市 山本 磔
器量というものあり領こ

愛媛県 中居 善信
静電気くらしいのショック辞令来る

藤井寺市 高田美代子
もみじひらひら軽いジョークに舞い落ちる

八尾市 生嶋ますみ
まごころが崩れないようラップする

和歌山市 福本 英子
此の道を行くと必ず逢えるひと

鳥取県 西沖 彰雄
妻が逝き時に白旗振つてゐる

逗子市 神戸みず帆
アンテナの感度で拾う裏話

鳥取県 田村きみ子
雪の絵に差引ゼロの夫と居る

倉敷市 撰 喜子
にんげんの弱味を知つて角がとれ

西宮市 西口いわゑ
いわし雲しばし隠してくれないか

香川県 木村あきら
浅学非才心にもない事を言う

弘前市 相馬 銀波
願望も誓いも重ね初詣

寝屋川市 岸野あやめ
山頭火になれず父親にはなれる

岡山県 福原 悦子
和解するつもりで朝の靴磨く

堺市 志田 千代
メモにない酒の肴を買ってくる

鳥取市 武田 帆雀
播り粉木を担いで巡る酒の宴

富田林市 中井 アキ
ほどのほどのずるさで女の列にいる

鳥取県 岩崎みさ江
一日を申う空が夕焼ける

大阪市 松尾柳石子
いち抜けた友に介護のしかかり

大阪市 前 たもつ
ここまで来れば自分流を押し通す

和歌山市 吉村さち子
しゃべらないことも無言の自己主張

米子市 鷺見 正子
美しい爪をしているフリーター

和歌山市 田中 みね
菊花展の菊よ驕りはないですか

松原市 玉置 重人
美しく脱皮をしたい紅を選る

横浜市 鈴江 純子
追憶の中に金魚の墓を持ち

和歌山市 武本 碧
感動を男結びが解かせぬ

綾部市 藤田 芳郎
添うて未だ一と一とが二とならぬ

横浜市 秋元 和可
何も無い家だが鍵を取り替える

鳥取市 春木圭一郎
友からの葉書 友つて何ですか

弘前市 福士 慕情
道ならぬ道に妻子の影がある

弘前市 櫻庭 順風
誉められてごろり寝そべる反抗期

青森市 漆戸凡々子
予算食うだけなら楽な天下り

奈良市 米田 恭昌
傾いたのれん昔のまま頑固

尼崎市 内田美也子
職ひいて人間らしい顔になり

奈良市 渡辺 富子
わだかまり抱いてふたりの冬に入る

鳥取市 岸本 宏章
安心の数だけ皺が深くなる

岡山市 藤原 一平
来ないかも知れぬが切符二枚買う

鳥取市 近藤 秋星
種明かしすれば何でもない話

豊中市 櫻谷 郁子
まだ女軽くとぶのは此のあたり

西宮市 井上 松煙
コンテスト犬にも美男美女があり

大阪市 三浦千津子
御免ねと言えぬ言葉を抱いて寝る

倉敷市 家守 政子
手に負えぬ杭一本の自己主張

鳥取県 鈴木 公弘
雪の降る前に言いたいことがある

鳥取県 岩崎 和子
手鏡に暗示をかけて凝視する

大阪市 小林 周信
堪忍袋いつも余裕をもたせとく

唐津市 井上 勝視
窮屈な鉢でごめんよ山野草

寝屋川市 森 茜
ライバルは私の胸に辣虫

倉吉市 淡路ゆり子
可能だと信じ過ぎてた落し穴

鳥取県 谷口 次男
吊り革をつかむ顔にも明と暗

鳥取市 美田 旋風
これ以上酌ぐと天狗になるらしい

吹田市 山本希久子
仏壇を開けるといつもしくれます

寝屋川市 平松かすみ
くしゃみして鍋焼きうどんでもしよう

米子市 木村富美子
願背負い真顔で絵馬がぶら下がる

西宮市 緒方美津子
写されてみればなかなかいい故郷

川崎市 大島三四朗
肩書が好きで余白のない名刺

鳥取市 田村 邦昭
悲しみも愚痴も聞かない耳にする

大阪市 浦田 緩子
白秋忌姦通罪などあつたらし

竹原市 正畑 半寛
恥すかしいことばかりなり元教師

鳥取県 土橋 螢
夕焼けに背伸びしている影法師

同人特集

私の一句

木杯へ男の月の花菖蒲
 満月の裏には亀が住んでいる
 することがないので花に水をやり
 安らぎは視野にくっきり塔ひとつ
 悟れないまま旅人は歳を取り
 つれづれのままに漂う白昼夢
 ホッとする家にはいつも花がある
 夕焼けが昨日と同じ訳がない
 お雑煮へ入れ歯外して家長の座
 負け犬が帰る終電車がすぎる
 正解はいつも一つと教えられ
 北風と押し問答をしてひとり
 迷路だと知らずに歩む生きる道
 八十歳似合う帽子にまだ会えぬ
 花好きの人が住んでる路地をぬけ

豊中市	堺市	堺市	枚方市	竹原市	東大阪市	高槻市	弘前市	弘前市	和泉市	弘前市	神戸市	鳥取市	尼崎市	尼崎市	大阪市
橋	河	板	海	森	森	川	福	岡	岡	波	池	倉	春	春	正
高	内	尾	老	井	下	島	士	井	井	多	野	田	益	城	本
薫	天	岳	洋	善	愛	諷	慕	や	や	五	善	一	武	年	水
風	笑	人	居	論	云	情	す	お	庵	守	瑶	坊	代	客	

女神かとまがうナースのいい笑顔
 見え透いた嘘は言わない水中花
 初釜へほめて貰いにゆく着物
 かあさんに負けない母になるいくさ
 ブレーカー酷使苦しい抗議する
 想い出が陽炎になる古手紙
 失敗もする人だから握手する
 親が子に敬語を使う不思議だな
 えびすさん真似のできない笑い顔
 極楽が有ると信じて聞く法話
 背がこうも曲ってたのか影法師
 世の流れ右向け右と言わぬだけ
 ランドセル並んで進む春の朝
 見逃すな子供の出したSOS
 それぞれの事情があつて顔の皺
 すったもんだした過去に乾杯だ
 色封筒春の便りがやってくる
 生きている倅せ今日も陽がのぼる
 子を守り原野の鶴が凜と立つ

吹田市	香川県	香川県	京都府	羽曳野市	十和田市	松江市	今治市	香川県	大阪市	出雲市	出雲市	出雲市	岸和田市	鳥取県	米子市	松原市	出雲市	鳥取県
太田	工藤	木村	稲葉	酒井	阿部	小川	越智	神保	安達	吉岡	富田	岸	芳地	小西	永井	小池	園山	津村
	吟笑	あきら	冬葉	一壺		注湖	一水	坊太郎	はじめ	きみえ	蘭水	桂子	狸村	雄々	三津子	しげお	多賀子	八重子

極樂は遠くいなさる罪の数
 年金の暮らし財布の無重力
 百円市の魔術にかかり買いあさる
 銀行より固いなりわいパチンコ屋
 樹氷から産れた羅漢泣きやすし
 スピードを落とそうラベンダーの道
 こちらからかけねば癖の糸電話
 夏バテの背筋を伸ばす秋の雲
 日々好日耳の遠さが幸いす
 門がまえ脱税しているかも知れん
 踏み出した一歩退けない意地がある
 世渡りの嘘も傘寿に大目なり
 戦争を知らない妻のカボチャ好き
 ふる里の山から童話ころげ出る
 およろこび招く皇居のこうのとり
 校門に監視カメラは似合わない
 お洒落着は鎧しっかり身につける
 花屋さんに薔薇のなかつた事がない
 初恋はセーラー服のおさげ髪

大阪市	藤井寺市	和歌山市	岡山市	唐津市	和歌山市	横浜市	豊中市	高槻市	奈良市	西宮市	松江市	島根県	弘前市	弘前市	箕面市	堺市	茨木市	弘前市
寺	高	桜	宗	矢	青	菊	井	井	天	秋	津	西	齊	櫻	岩	柿	藤	小
井	田	井	内	内	枝	地	上	上	正	元	川	村	藤	庭	津	花	井	寺
東	美	千	水	水	鉄	政	直	照	千	て	紫	早	順	順	よ	紀	正	花
雲	代	秀	恵	恵	治	勝	次	子	梢	る	晃	苗	風	風	う	美	雄	峯

愛と言う紐の長さにつながれる
 お土産は一口サイズの思いやり
 山焼きの中に薬師寺東大寺
 四代の元号に生きまだ燃える
 おこがましい席へ呼吸を整える
 賞味期限切れて夫婦に味が出る
 計算をすると善意があだになる
 完全な償いそれは愛だろう
 幸せな夢を継ぎ足す祝い箸
 人間の深さを知らぬ金魚鉢
 迷路にもすかしてみればある出口
 笹鳴きは恋の埋み火の燃える声
 青い空いまもたたかう国がある
 一一九咄嗟に住所出てこない
 まわり道寄り道人の情け知る
 良心が近頃横を向きたがる
 真っ白い紙には嘘は書けません
 とんがった日は花の笑顔に会いに行く
 ひよっこりと好い顔が来る秋日和

羽曳野市	寝屋川市	奈良市	八尾市	和歌山市	米子市	鳥取市	鳥取市	鳥取市	藤井寺市	出雲市	香川県	香川県	大阪府	大阪府	大阪府	香川県	吹田市	高知市	大阪府	寝屋川市
吉川	平松	宮口	長谷川	田中	鷺見	岸本	岸本	岸本	中島	小島	清川	川原	津守	津守	川崎	川崎	石原	川竹	川田	堀江
寿美	かすみ	笛生	春蘭	みね	正子	孝子	孝子	孝子	志洋	満江	玲子	章久	なぎさ	なぎさ	柳伸	柳伸	靖巳	松風	達子	光子

いいドラマ 浸る余韻に 秋夜更け
 さくら咲く妻はこの世にいない春
 日本人はいやだと日本の血が思う
 虚と実の谷間で終りなきドラマ
 晴耕雨読夢をつぎたす新世紀
 父さんの料理だ皆が席につく
 叩いたら叩き返せと父の檄
 自販機へ釣り銭忘れたまま戻り
 終宴の火が消えるまで踊り抜く
 早寝早起きたった一つの長所です
 燃えるものまだあり癌を追っ払う
 クラス会皆賢く老いている
 死ぬ時は一人矢印などいらぬ
 この出会いビタミン剤になりました
 少子化が物干竿で揺れている
 そして今汗を流した人という
 人生の設計図引き直す春
 運と夢がついで帰る福袋
 夫婦でも一言欲しいありがとう

岡山市	井上	柳五郎
鳥取県	山本	正光
吹田市	早川	棲世
高知県	赤川	菊野
河内長野市	井上	喜野
大阪府	松尾	柳右子
富田林市	大橋	鐘造
川西市	松本	ただし
倉敷市	小野	克枝
鳥取県	羽津川	公乃
岸和田市	高須賀	金太
豊中市	安藤	寿美子
美祿市	安平次	弘道
岡山県	大石	あすなろ
鳥取市	美田	旋風
羽曳野市	徳山	みつこ
池田市	栗田	久子
香川県	成重	放任
大阪府	奥村	五月

合掌のかたちで受ける豆饅

敵味方もたぬ紫陽花まるく咲き

さ迷わぬように冥土の地図持たせ

結び目のもつれ解くのはいつも母

夕焼けは其の日その日の神の彩

水飲める感謝をいまだ持つている

報道に追われ台風ウロウロし

自分史のゴールは熱い朱で括る

おだやかな面になろうと善を積む

あまりにも森は静かで跪く

手間暇を掛けた料理に妻の愛

自画像はどこか違って落ち着けぬ

木の癖を読んで出てくる鉋屑

風靡した鬼の手にある花手桶

落書きをやめぬ右手が好きである

小銭だが借りると何か壊れそう

灰皿が消えて心の過疎を生む

テーブルにみかん置いてるだけの幸

牛がいたらよろこぶ草を焼いている

和歌山市

出雲市

唐津市

大阪市

米子市

西宮市

河内長野市

富田林市

藤井寺市

寝屋川市

海南市

京都市

富山市

岡山市

唐津市

唐津市

唐津市

芦屋市

篠山市

福井 桂香

小白金 房子

市丸 晴翠

津村 志華子

澤田 千春

山本 義子

植村 喜代子

中井 アキ

楠 昭子

森 茜

谷口 義男

都倉 求芽

酒井 求輝

小林 妻 子

井上 勝 視

仁部 四郎

久保 正 劍

黒田 能 子

遠山 可 住

聖域に限りなき初恋の人
 不況解く方程式が見つからぬ
 指揮棒はげんこつだった父の音
 お浄土は行って戻って来るところ
 病魔とのいくさへ桜花の季も過ぎて
 山盛りの愛といっしょに子を叱る
 福笹が揺れてミナミに流れ着く
 消費税のおつり財布をふくらませ
 プロポーズされて溶けだす雪達磨
 スタートの寸差その後につきまとう
 霧吹きを菖蒲にかけるカメラマン
 森と海 水は一つで結ばれる
 頬杖をついたら母をふと思ひ
 負けるが勝ちよーく分つておりますが
 どっこいしょあなたもわたしも同世代
 幸福になろうなろうと豆の蔓
 優しさを大切にすゝ木の葉髪
 木枯しの街に菓子袋が遊ぶ
 お身ぬぐい仏の顔は何度拭く

豊中市	鳥取市	倉吉市	和歌山市	八尾市	高槻市	堺市	米子市	交野市	大阪府	大阪市	岸和田市	松原市	大阪市	鳥取県	米子市	大阪市	堺市	大阪府
湯浅馬洗	徳田ひろこ	淡路ゆり子	西山幸	宮西弥生	傍島克治	和田つづや	野坂なみ	山川日出子	米澤俣子	小林周信	藪野けい子	玉置重人	川久保睦子	石谷美恵子	八木千代	鶴田遠野	村上玄也	榎山隆盛

一杯のうどんて聞けた聞き合わせ
 イエスさま左の頬まで出せません
 青菜摘む祖母の背中に舞う粉雪
 極楽と知らずに通り抜けてきた
 神棚も仏壇も無い核家族
 宇宙旅行大願成就大富豪
 乗馬服はかせてみたい脚線美
 嬉し泣きモナリザの眼も赤くなり
 身のほどを知って用心する歩幅
 よろめかず媚びずに人の群れに居る
 腹わたを日本で見せている南瓜
 わが歳と思えぬ歳を書いている
 老いてなお白紙の地図に染める夢
 コスモスを揺らして遊ぶほどの風
 幕おりのまで好きなこととして暮らす
 母からの答えが分かる歳になり
 盲導犬まっすぐ前を見て座る
 終着へ夫婦の歩調合わせとく
 晩酌につらつら思う吾が世紀

高知市	和歌山市	鳥取県	大阪狭山市	川西市	鳥取県	堺市	東大阪市	出雲市	大和郡山市	東大阪市	堺市	鳥取市	吹田市	枚方市	大阪市	和歌山市	富山市	桜井市
北川竹萌	玉置代	新家司	矢野梓	西内朋月	林露杖	黒田真砂	谷口草義	板垣草丘	坊農柳弘	安永春	神原帆	武田帆	瀬戸まさよ	寺川弘一	玉置英子	細川稚代	舟渡杏花	河合茂雄

母の掌に巢立った子等の愛がある
 うちの犬灘高ぐらいならうかる
 どう生きてどう消えようか秋の風
 埋めても埋めてもふさがらない穴だ
 末席に座っていても男です
 家中の窓開けさせて春がくる
 運命の糸は切れない絡まない
 お構いをしない気遣いだってある
 雨の雫落ちる真実が美しい
 一点を指し乗る人降りる人
 甲虫電池が切れて死にました
 おぼろ夜の下弦の月よ満つを待つ
 運鈍根曳く人生の尽きぬ夢
 加減する可愛さもあるパラサイト
 父を送ったあれは五十の歳だった
 貰うもの貰えば後ろ振り向かず
 今日の日を鳴らせる弦に張りかえる
 非公式なのに嬉しい瞳をもらう
 還暦の篇一瞬へ駿馬の眸

鳥取県	鳥取県	鳥取県	横浜市	唐津市	大阪市	弘前市	大阪市	唐津市	大阪市	大阪市	大阪市	亀岡市	川崎市	堺市	八尾市	吹田市	宝塚市	和歌山市
中	中	中	小	田	小	岡	大	樋	杉	川	河	井	和	齋	村	山	嵯峨	山
原	原	原	野	口	糸	本	塚	口	澤	端	井	上	泉	藤	上	本	根	口
諷人	みさ子	汲香	句多留	虹汀	昭子	花匠	節子	輝夫	一汀	庸歩	森生	あかり	さくら	ミツ子	希久子	保子	三千子	

満腹になつたら思案はじめよう
 これ以上飲めば毒よとママは注ぎ
 大樹にもたれ心のゆらぎ止められぬ
 余生とは言わずステッブ燃えている
 無駄骨が忘れた頃に報われる
 初恋をたどれば放課後のピアノ
 生きている証か惑うことばかり
 子ども向けニュースが手頃老い二人
 秀才に勝つたは酒の量ばかり
 禅問答愉快に交わし老夫婦
 華やかな門出後ずさりはできぬ
 作者銘無き木杯の美しさ
 ややのごとなりゆく母を抱きしめる
 如是我聞まだまだ生きる意味がある
 進む道こんなところゝ水のあと
 百歳にまだまだ遠いたかくくる
 私の本尊さまは父と母
 寒波来るマリオネットの糸切れて
 表情を盗まれそうで目をつむる

八尾市	和歌山市	米子市	大阪市	堺市	西宮市	吹田市	寝屋川市	鳥取市	竹原市	下関市	寝屋川市	和歌山市	松江市	大阪市	堺市	和歌山市	倉敷市	大阪市
宮崎	木本	中井	渡部	宮本	奥田	穴吹	岸野	小林	古谷	石川	妻谷	堀端	舟木	神夏磯	山本	松原	野田	西出
シマ子	朱夏	ゆき	さと美	かりん	みつ子	尚士	あやめ	由多香	節夫	侃流洞	重三	三男	与根一	典子	半銭	寿子	素身郎	楓榮

恙なく過ぎて女の化粧水

他人には素直に言えるおべんちゃら

竹編んで竹の命を昇華する

汗の玉年金となり報われる

寝転べば雲は流れるものと知り

女には泣いてごまかす武器がある

頑固さを笑いあつてる老夫婦

蓮の葉の露ころころと仏色

不合格そこから開く道もある

朝の鏡枯れゆく五感呼び戻す

故郷捨てても酔えばやっぱり故郷の歌

親子でも言えぬ話が増えてくる

つくしんぼ楽しい夢をくれました

川柳がいつかわたしの影になる

初孫を抱けるベッドを組みたてる

人の子も育てる牛よありがとう

てっぺんに登ると見える裏表

真剣にぐうちよきばあを朝毎に

真心に触れて開いた貝の口

八尾市 井尻 民

大阪市 西田 柳宏子

竹原市 岩本 笑子

大阪市 鈴木 木トヨ子

横浜市 菱田 満秋

横浜市 田中 笑子

岸和田市 原 さよ子

米子市 木村 富美子

神戸市 木村 貴代子

富田林市 片岡 智恵子

奈良市 米田 恭昌

横浜市 清水 潮華

尼崎市 奥山 美智子

西宮市 牧 富喜子

枚方市 二宮 山久

米子市 光井 玲子

八尾市 篠原 いつふみ

出雲市 石倉 芙佐子

奈良県 渡辺 富子

憧れの舞台だのびのびとやろう
 それぞれの歩幅で進み俱会一処
 教え子も厚靴茶髪子供だき
 山頭火ほどにも吞めず割りきれず
 父の日にやっぱり酒が息子から
 春うらら母も香水替えて出る
 今日生きる朝の空気を深く吸う
 四分の三生きた世紀が過去になる
 握手してテール越しに燃えている
 渡された薬信じて飲んでます
 プラスにもマイナスにもなる酒が好き
 宇宙から還った人の世界観
 子の去った胡坐が孫を待っている
 バランスのとれた食事の愛があり
 情熱昇華ただ飄飄と生きている
 これ以上言うてはならぬ深呼吸吸
 深読みをしないと明日へ進めない
 諸肌を脱げば調子の出る太鼓
 誕生日の九月吉祥 初投句

堺市	黒石市	米子市	豊中市	米子市	鳥取県	鳥取県	八尾市	宇部市	大阪市	泉佐野市	大和高田市	京都市	和歌山市	交野市	八尾市	守口市	熊本市	東京都
源	相	木	吉	政	権	鈴	神	平	清	山	岸	高	福	森	内	井	永	播
田	馬	村	田	岡	代	木	原	田	水	本	本	島	本	本	海	上	田	本
八千代	一花	春枝	あずき	日枝子	康女	公弘	まさと	実男	利武	蛙城	豊平次	啓子	英子	弘風	幸生	桂作	俊子	充子

さっぱりと脱皮きれいな蝶がとぶ

僕の影ひとつの塔に見えてくる

同期会 花ヒラヒラと丸い背な

かうかうと白鳥鳴けば雪が降る

乱気流抜ければ青い空がある

靖国の社照らして月無心

欲しいものまだまだあつて生きられる

趣味あつてほんときよかつた靴磨く

湧き上がる希望早春動く土

有情無情口には出さぬ秋桜

目の位置を下げてゆつくり聞く話

介護する笑顔の皺も深くなる

舵とりは妻にまかせて冷奴

完全という語はボクの辞書にない

向日葵の向こうにゴッホ手招きす

恋追うて生涯迷い鳥でいる

有難さ忘れ時どき不足言う

女房の笑い袋に救われる

宍道湖のほとりに住むはまぼろしか

鳥取市 春木圭一郎

竹原市 小島蘭幸

伊丹市 山崎君子

青森県 西谷大吾

横浜市 保田絹子

大阪市 板東倫子

高石市 浅野房子

香芝市 大内朝子

大阪市 本間満津子

尼崎市 長浜澄子

寝屋川市 富山ルイ子

鳥取県 上田俊路

八尾市 吉村一風

豊中市 田中正坊

大阪府 八十田洞庵

藤井寺市 鴨谷瑠美子

出雲市 久谷まこと

松江市 恒松町紅

寝屋川市 柴田英壬子

ハイウエイ スピードあげる愛の時

真っ先に笑った女を好きになる

ゆるやかに絆結べば足軽し

溺れない深さで海と話す

無口です内にあるもの深いです

大声で笑う体が軽くなる

自信など無いけど上を見て歩く

バーゲンの服で歌舞伎座ディナーショウ

振り向けば桐が咲いてる亡母恋し

決心がついてゆっくり傘たたむ

雲の影やがて去りゆき陽が当たる

焼き鳥にされた雀の恨み節

むずかしい事は言うまい御挨拶

あの世この世のまん中辺にある宇宙

人様から見れば不足のない夫

抗わず身の程生きるかたつむり

人間らしく生きて行きたい九十四

天守閣これが浪速の梅さくら

核のない星にET帰りたい

枚方市 安達 忠央

鳥取県 土橋 螢

西宮市 門谷 たず子

倉吉市 牧野 芳光

吹田市 大谷 篤子

出雲市 佐藤 治代

鳥取市 植田 一京

堺市 河内 月子

河内長野市 水谷 正子

出雲市 城谷 多喜

和歌山県 中後 清史

鳥取県 谷口 次男

寝屋川市 太田 とし子

大阪市 前田 たもつ

八尾市 生嶋 ますみ

弘前市 今 愁女

尼崎市 黒川 紫香

大阪市 清水 絹子

岸和田市 岩佐 ダン吉

■句集紹介

『高杉鬼遊川柳句集』

新家 完司

鬼遊さんの一周忌に合わせて、待望の句集が発刊された。収録数千句以上、ゆっくり拝読していると、それぞれの句から鬼遊さんの声、端正な姿が甦ってくる。句集が持つ力である。佳句満載の中から、印象に残った句を拾ってみた。

また来てね雨の舗道にほり出され
握手する手の大きさに負けている
ポーナスを他人が貰う十二月
啄木のように手を見る暇もなし
長生きをすればおでんにコロがない
顔よりも心といつて下さるが
長いこと貧乏したが孫もでき

川柳は人の世の哀歎を詠うものであるが、特にその哀愁、いわゆるペーソスこそ川柳味の中でも一番のうま味ではないか。右の7句すべてから、鬼遊さんの苦笑が見える。「雨の舗道にほり出され」たのが謹厳実直を絵に

描いたような鬼遊さんであるから妙におかしい。「コロがない」おでん鍋を見詰めて嘆息する初老の紳士。まさに川柳。これぞ川柳。

王手飛車 煙草の灰が落ちまっせ
新聞を取れとけつたいなのが来る
冷やめしと固いこうこが好きやねん

右の3句いずれも大阪弁の面目躍如。「落ちまっせ」は「落ちるがな」でも「落ちますよ」でも駄目。「けつたいなの」も他に言いようがなく、これしかないドンピシャの決まり具合に、思わず笑ってしまう。

しゃべりかたによって、上品にも下品にもなるのが上方言葉。早口や大声でまくし立てられると、これ以上乱暴な言葉はないように感じるが、鬼遊さんの穏やかなしゃべりかたは、大阪弁の良さそのもので、ここを優しく包んでくれるようだった。「そやねん」という相槌と、ちよつとサビのかかったトーンの高い声がなつかしい。

鬼遊さんの作品群で特筆すべきは、須崎豆秋仕込みのユーモア吟である。

人間の親子を猿に見てもらい
病院の天使お尻へ針を刺す
愛国心よいがポリリウムさげなさい
勲章をやるとは誰も言つてこぬ
みの虫も考えながら生きている

することもないのに猫も起きて来る
風船がひとつ都会を逃げてゆく

等々、教え上げればきりが無い。また、その冷静な観察眼と、深い洞察力は、

尼さんになつても髪は伸びてくる
ゆるせない人にも妻や友がおり

豆腐屋のおつりはいつも泣いている
空爆をするよりほかにない面子

等の鋭い句を生んだ。特に「空爆」の句は、何年も前の時事吟でありながら、現在のアフガニスタンの悲劇そのままであり、時事吟と雖も人間の本质を突いた句は、いつまでも色褪せないという見本であろう。

にんげん誰しも、外面だけではつかみきれないものがある。初盆にお伺いした折に、鬼遊さんの書斎を拝見させて頂く機会を得た。「足の踏み場もなかったんです。本や何やかやいっばいで。片付けるのに苦労しました」「私なんぼキリキリ舞いしてる時でも、お茶碗ひとつ洗ってくれたことないんです」。千歩さんの意外な言葉に、風貌に似合わぬ雅号「鬼遊」の、「鬼」の片鱗を垣間見た。

伝統的川柳の良さがいっばい詰まった本書。川柳塔同人のみならず、現代川柳を標榜しながらも「言葉のバズル」に陥っている諸兄にも、熟読して頂きたい一冊である。

『高杉鬼遊川柳句集』

庶民・反戦・達観

田中正坊

この句集の最初のページに「言い残すことば」が掲げられている。「今回の句集はわが意にあらず。たまたま家族の遺志(意志)によるものと思う。句集・句碑など、存命中に作るものにあらず。句主不詳、読み人しらずの一句が後人に口誦されれば過分の栄にしてこれに優るものなし。もつて瞑する」とあって、平成2年9月20日夜の日付がある。鬼遊さんが何かの用紙に走り書きされたものと思われる。

おしどり作家として鬼遊さんと共に川柳の道歩んで来られた千歩さんが、句集を出すべきかどうかと迷っておられた時、故人の机の引出しからこのメモを見付けられた。私と新家完司さんが句集の刊行をおすめしたことは事実だが、それよりも亡くなる十年前に書かれたこの遺書によって、千歩さんは決意されたようである。こうして谷垣史好・

小出智子と並んで川柳塔を代表する作家であった高杉鬼遊の川柳句集は生まれた。

消えるから雪は剝那を淨く舞い

如月や江下 北川 作江たち

核のない夜明けを鳩は待っている

今日は ではさような風になる

昭和四十一年ごろから川柳を始め、平成十二年に亡くなるまで三十余年にわたって記録された作品は一万句に近く、その中から精選した千句余がほぼ年代順に四つの章に分けて編まれているが、これはそれぞれの章の代表的な句と見られるものである。

しかし、これに優るとも劣らぬ佳句が各章にちりばめられており、初期の作品を集めた序章にあたる「素うどん」には、次のような庶民性豊かな句が並んでいる。

父ありき通天閣といづもやと
既製服びつたり萬年平社員
西成で社長と呼ばれバナナ買う
税務署で冗談を言う出前持ち

次の「縄のれん」では、鬼遊さんの一兵士としての戦争体験と戦死した愛弟を偲び、戦争を憎んで高らかに反戦平和を謳っている。

三八銃わが青春は弾丸の下
弟よ「戦争展」でまた会えぬ
クニマモルナンジシンミンタマニナレ

戦争の足音がする妻よ子よ

そして「紙風船」では、この人の飄逸な人柄を反映した軽妙な句が目立つ。

奢られて身体で返すはかはない

吉兆も飲み屋も同じ靴でゆく

人生はいろいろ七味唐がらし

長生きをすればおでんにコロがない

終章にあたる「五色豆」には、平成四年から亡くなるまでの円熟期の作品が収められているが、ここでは長い人生を歩んだ跡を振り返る達観と諦観の句が胸を打つ。

大正生れ怠けることもままならず

人の世に馬鹿と言われるむつかしさ

長いこと貧乏したが孫もでき

手を打ってわが人生はこれくらい

句集にはさらに別章として、物故川柳家を偲ぶ「レクイエム」と鬼をテーマとした「鬼の道」で締めくくられているが、その中から各二句を抜粋して句集紹介を終わりたい。

路郎忌だ史好よ酒を飲まないか

俊平も冬二も消えた世紀末

むかしから鬼の嫌いな多数決

火の玉を抱いて墓まで鬼の道

こうして生まれた『高杉鬼遊川柳句集』は川柳界に貴重な財産を加えた。この句集がいついつまでも読み継がれることを切に願う。

誹風柳多留二四篇研究 37

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾

清 博美・佐藤 要人

282 百とると首か無イから川を留メ

橋本 この句、雨譚注に「大井川とある。

大井川の肩車での川越しの料金は、「川柳東海道」上によれば、水位によって違い、一般では「享和年間に幕府への届け出の古文書によると、脇通より乳通迄」步行越 右川直段九十四文より八十五文」としている。つまり最高料金は、乳までの水位があるときの九十四文でそれ以上になると、危険なので川留めになる。また『五街道風俗誌』一によれば「九十五文：大井川等に於ける、肩車の最高賃料。安永頃から既に九十文を限りとして居たのであるが、其の後四文を増し、更に弘化版の「旅鏡」には、一人に付九十五文以上は留り川となる、とあるから実際は九十五文ま

でに値上げされたようである」。

いずれにせよ九十四、五文までは渡れるが、それ以上の水位になると、いくら百文出すがらと言われても、首まで沈んでしまうので川留めにするという意味と想う。

人足の首をつかむ川越しの縁で「首が無い」に、首まで沈んでしまう水位と「首が無い」命を失うを懸けている。

山姫の白粉解て川をとめ

七四六

九十四文のみハあたまばかりなり

一九七

尻ツベたびつしより九十四文出シ

八一二二

しりつへたひしやく九十五文なり

安九桜三

高イ水管舁九十五もんなり

二〇二五

清・佐藤 賛

283 まゝ母のていしゆハとれも少シぬけ

橋本 例句にあるように、継子いじめをするような後添えをもらうのは、亭主が女房の尻に敷かれてすっかり監督しないからだ、と、銚先を亭主（継子の父）に向けて非難している句。

とつさんが見て居る内ハかわゆがり

一七14

まゝ母と見へて泣子にいつも勝

まゝ母にていしゆほれてるむこひ事

寛元天1

清・佐藤 賛

284 中の丁なまけたやうに腰をかけ

清 吉原、大門から水道尻に至る大通りを仲の町といった。

よし原の背ぼねの様な中の町

三〇一

という句もある。通りの両側には引手茶屋が軒を連ね、遊客の訪れるのを待つ。

折しも客待ち顔の遊女が一人、茶屋の縁先に腰を懸けている。その姿が如何にも物憂げに見える。吉原風俗の一点景であろうが、第三者の目からは、遊女が如何にも怠けた態度で縁先に腰を掛けてるように見える、とい

うのである。

中の町おつこちさうにこしをかけ 七七口

佐藤 賛。

285 若死をしあてた人ハ小松との

清 小松殿は平清盛の長子重盛。父の専横を諫めるなど、周囲に人望の厚かった人物。「仕当てる」は、事を計画しそれが予定通り実現すること、思い通りになるとの意。

重盛は、治承三年内大臣を辞し、熊野に参詣して自分の死を祈り、帰つてから病の床につき、同年八月に死亡。

句は、熊野に自分の死を祈り、そして予定通り死んだのだから、まさしく若死にをしまったことになる、との意。平家滅亡を予感した重盛の最期、その優れた才知を惜しんだ句、とでもいふべきか。

小栗 賛。一門の滅びるところを見なくてすんだという意もあるように思う。

小まつ殿みじ目も見ないだけの徳

明五仁一

佐藤 同。

286 女人成佛四郎兵衛へいとま乞

清 「女人成仏」は、女が悟りを開いて仏となること、とあり、「日蓮遺文」・女人成仏鈔に「殊更女人成仏の事は此経より外は更にゆるされず」とあり、また「二休仮名法語」

や「昨日は今日の物語」にもこの成語についての記載がある由（『日本国語大辞典』）。但し、本句での「女人成仏」は、仏教語としてのそれにあらず、身請された遊女を仏教語を持ち込んで表現したまでのこと。

句は、身請けされた女が、吉原を後にするに当たつて、はればれとした気分で、四郎兵衛に暇乞いをしているという図。

小栗 賛。「成仏」の語感から年明きともとれるが。

橋本 同右。西原柳雨『川柳吉原志』は礎説と思われるが、今井卯木『川柳江戸砂子』は「年明きの句」としている。

山田 身請け、年明き、いずれとは判じ難いが、いずれにせよ晴れて大門を出られる風景図でしよう。

明五仁一

287 小便のならぬを売ハ小間物屋

小間物屋の売る物で小便が出来ないものとなれば、張形しかない。

小間物屋是ハ小便成りませぬ 一五四 29

小栗 賛。生理的な意の小便と重ねる。

佐藤 同。

289 うすにめす迄ハ火の中水のそこ

清 閻浮提金の阿弥陀如来像の一つ、善光寺の本尊にまつわる話。

話は古く、欽明天皇の時、百済の聖明王がこの阿弥陀如来像を貢獻。しかし、この尊像を奉安した年に悪疫流行。尊像を焼いたが一つも損傷することなく、数年後、再び奉安するとまた悪疫流行。そこで難波の堀江に投じた。この辺りが、火の中・水の底と詠まれる部分。

後、本田善光がこれを拾い、信州まで運んで立白の上に奉安したというのが、善光寺にいたるまでの伝説。

句は、善光が立白に奉安するまでは、この阿弥陀如来像は、焼かれたり水の中に放置されたり、散々ご苦労をなさった、というほどの意。

佐藤 賛。

清 「小便をする」は、売買契約成立後に、当事者の一方が破約すること。

尚香のむ

宮西弥生選

B面を生かしたくなり辞表書く
人間で居たくて迷ってばかりいる
背筋伸ばすとまだまだいけるなと思う
落ちつけぬいちにち象に逢つてくる
先生と呼ばれる職に夢持たぬ
これまでが白紙になっていく握手
百円村にのびのびできる場所がある
忙しいくらしが見えるゴミ袋
暗いなあ冬の女のひとりごと
夢見るも寄り道もあり女坂
無防備の或る日を冬の蚊に刺され
いつかいつかと読まない本を買い溜める
時代からずれて生きるも面白し
海も山も人間臭くなつてゆく
ひとランク下げて私の道を行く
草の芽を包み腐葉土温かい
目の前へ叩かれました蚊の哀れ
食べることとても大事にする余生
爆ぜるもの少しおさえて秋になる

鳥取市 徳田ひろこ
箕面市 出口セツ子
藤井寺市 高田美代子
米子市 政岡日枝子
大阪市 板東 倫子
尼崎市 長浜 澄子
鳥取県 さえきやえ
八尾市 生嶋ますみ
大和高田市 鍛原 千里
和歌山市 武本 碧
和歌山市 西山 幸
和歌山市 吉村さち子
西宮市 奥田みつ子
大阪市 神夏磯典子
熊本市 永田 俊子
富田林市 中井 アキ
寝屋川市 森 茜
鳥取市 録沢 風花
芦屋市 黒田 能子

幸せを計る掌の分厚さ
吊し柿冬の音から引きしまる
再会に嘘まで言うて会えますか
やがて秋貴女も遠くなりました
助走路に今日は大きな石がある
やんわりと流れをかえるお茶を点て
戦争を遠くの花火とはいえぬ
再会は風が背中を押したから
転んだら立ち上がれない下り坂
パレットをお喋りにする秋の画布
みの虫がまとう枯れ葉に見る個性
踊りの輪いつかは一人きりになる
陽を吸うた布団のぬくし嫁ぬくし
収獲の代償かしら皺と肝斑
祝著海の向こうの娘の名から
プライドが邪魔して角が曲れない
終章の生一秒に恋をする
秋野菜みな漬け終えて冬の章
身をかわす豆腐の嘘が美しい
半衿の白わたくしのトレードに
先のこと明るい彩を探してる
燃えすぎた秋を冷やしに来たしぐれ
いい人にされて荷物をもた背負う
満ち足りて争う気力ありませぬ
秋ざくら女の性を秘めて挿れ

藤井寺市 太田扶美代
米子市 白根 ふみ
東大阪市 安永 春
東京都 播本 充子
米子市 澤田 千春
今治市 塩路よしみ
鳥取市 青戸 田鶴
鳥取市 福田 登美
吹田市 山本希久子
横浜市 山梨 雅子
池田市 栗田 久子
富田林市 片岡智恵子
西宮市 門谷たず子
横浜市 保田 絹子
堺市 矢倉 五月
羽曳野市 吉川 寿美
八尾市 井尻 民
弘前市 宮崎ヒサ子
松江市 川本 畔
愛媛県 黒田 茂代
横浜市 清水 潮華
富田林市 藤田 泰子
横浜市 川島 良子
堺市 志田 千代
鳥取県 石谷美恵子

握手せめ何か打算がありそうな

告白をしてから酒の味になる

先人が遺した知恵をむさぼろう

くすぐつてやろう故郷の杉木立

どんぐりを数えて冬の絵に入る

へそくりは皆穴埋めに消えました

雑巾の絞り具合も冬らしく

星の数かぞえて私星になる

負けて勝つ我慢の虫が寝てくれぬ

仏灯へ祈りも深くなった秋

梅干しは母の心に触れたよう

明日とは目には見えぬが勇氣湧く

用意万端それでももれるものがある

携帯は持たぬ誘惑されそうで

松茸が目につく程の生活ぶり

適齢という美しいシクラメン

まだ舞えるつもりで晴着買ってくる

完全に呆けてしまえば救われる

お寺さんの都合で決まる法事の日

自分史の余白に疼くものを抱く

くつきりとわたしの顔にある歴史

夫には夫の世界添うて知り

ハードルを幾つも越えた今日の椅子

ひとり居へひとりを守る術がある

妥協した位置で光っているダイヤ

高知県 小川てるみ

西宮市 西口いわゑ

倉吉市 山中 康子

寝屋川市 籠島 恵子

和歌山市 福井 桂香

八尾市 村上ミツ子

和歌山市 古久保和子

寝屋川市 坂上 高栄

米子市 小塩智加恵

尼崎市 内田美也子

八尾市 宮崎シマ子

倉吉市 淡路ゆり子

西宮市 牧測富喜子

和歌山市 福本 英子

横浜市 三村八重子

川崎市 和泉あかり

鳥取市 植田 一京

米子市 鷺見 正子

大阪府 米澤 俣子

奈良県 渡辺 富子

東大阪市 北村 賢子

和歌山市 楠見 章子

岡山県 矢内寿恵子

香芝市 大内 朝子

神戸市 森本みはる

母さんの瞳に広い海がある

深読みが過ぎて迷路にはまり込み

逆縁に耐える女のコンバクト

赤信号きつちり守って笑われる

約束が暦のなかで炎えている

冬になる前に仲直りをしよう

したたかな女音なく来て座る

暫くは保護色を着てまぎれ込む

赤ちゃんの生れる話暖かい

ノックなしで扉の開く猫の恋

この壁を越えた向こうに明日がある

偽りを重ね塗りするコンバクト

風下が大好き耳が遠いから

肩パッドはずして丸いひとになる

助手席は喋り続けるハイウェイ

鳥取県 西原 艶子

八尾市 高橋 夕花

鳥取県 土橋 睦子

尼崎市 春城 年代

和歌山市 松原 寿子

堺市 桜沢 千世

寝屋川市 岸野あやめ

米子市 木村富美子

河内長野市 植村 喜代

米子市 林 瑞枝

三田市 久保田千代

東大阪市 田中美弥子

鳥取県 岩崎みさ江

藤井寺市 鴨谷瑠美子

堺市 河内 月子

ひろこさんの句―複雑な組織から離れて、自分の可能性を信じて

脱皮する決意の「B面」がある。きつと広い新天地が開かれる事で

あろう。セツ子さんの句―一瞬、相田みつをに出会ったのではと。

さらりと流したおもしろいであるが、中身が濃い。自分をここまで掘り

下げて迷う人間に安心する。美代子さんの句―作者の曰く。「同じや

るなら気持よく、楽しく」をモットーにする作者は生涯現役で、し

ゃんとして、しゃきつとするタイプ。どうぞ頑張つてほしいと思う。

日枝子さんの句―平凡に馴れると、脱出の焦りとストレス。やっか

いな代物であるが、そのイライリズムに対して、ゆつたりリズムの着想が面白い。

新

樋口輝夫選



左遷かな新任課長のヒステリ！
 新郎がひやひや友の祝辞聞くと
 新玉の昼酒医者も飲んでいる
 新しい眼鏡で彼を見直した
 新会社私は何をすればよい
 新鮮な私を映す初鏡
 神様が見ていなかった新手工
 新刊書 帯封だけを見て巡る
 新しい恋で古傷癒して
 新米がご馳走だった頃育ち
 パンドラの箱を開いた新世紀
 新顔のくせに凶太いとこがある
 新築の家に禁煙させられる
 新語には疎い厨の割烹着
 新しい風に会いたく本を読む
 新年号 今年の匂い嗅いでみる
 新年の抱負惚れ惚れする日記
 禁煙の新たな決意 笑う鬼
 新築の家を無料で見て通る
 謹賀新年何も変わった事はない
 祝箸だけ新しい屠蘇の膳
 まつさらな曆 土桶には土桶の夢

恭昌 恭昌
 四郎 四郎
 三喜夫 三喜夫
 保州 保州
 多賀子 多賀子
 しげお 多賀子
 勝巳 勝巳
 玄也 玄也
 無禄 無禄
 ひかる ひかる
 高明 高明
 純子 純子
 玲子 玲子
 伊玲子 伊玲子
 洋子 洋子
 正雄 正雄
 泰竜 泰竜
 清山 清山
 大輪 大輪
 千代 千代
 寿美 寿美

新しいテーマに挑む顕微鏡
 新幹線パントマイムでする別れ
 新入りがこぶし固めて拭く涙
 あわあわとまた新年がやってくる
 新風が静かな空気かき回す
 新しい名字呼ばれた日の返事
 新しい私にわたしギョツとする
 新しい薬に弱い老いの欲
 農つがぬ子が新米の出来を問う
 新春のBGMに春の海
 新しく買えば出て来た探しもの
 携帯を新しくして恋終える
 旧姓にもどりましたと新住所
 呱呱の声 家族一つの風になる
 金屏風背にして新婦よく食べる
 佳
 新しいプラン上司が蓋をする
 新聞を開くと銃の音がする
 畳替え大の字で見る白昼夢
 新社員もう主流派を嘆き分ける
 新しい義母を認めて屠蘇を受く
 人
 洗濯物新婚らしい彩で揺れ
 地
 新居とは老人ホームの事だった
 天
 新しい日記に太く書く平和
 軸
 モカを飲みゆつたりと聴く新世界
 播本 充子

俊子 俊子
 ますみ ますみ
 八重子 八重子
 日枝子 日枝子
 あずき あずき
 敏子 敏子
 霜石 霜石
 勝視 勝視
 和重 和重
 周信 周信
 春雄 春雄
 正子 正子
 扶美代 扶美代
 碧 碧
 尚士 尚士
 旋風 旋風
 紫晃 紫晃
 兵八郎 兵八郎
 みず帆 みず帆
 正剣 正剣
 水笑 水笑
 倫子 倫子
 充子 充子

満ちる

岩本笑子選



満足を詰めたら底が抜けていた
 満月が欠けはじめたぞ急がねば
 満ち足りた暮しと思う愚痴のかず
 幸せを満たす言葉を惜しまない
 三分満ちるものあり生きていく
 わたくしの心も満ちてくる一句
 思いやり満ちてる嘘は美しい
 星満ちる空モンゴルの民を抱く
 満月になるまで月を見届ける
 満月のダムは昔を語らせぬ
 墨を磨る香りに満ちてくる気力
 とりあえず満足と書くアンケート
 湯豆腐の湯気を囲んでいる笑顔
 写経して心に満ちるものがある
 満ち足りた豊かさ過去を置き忘れ
 満月を見ると兎を探さくせ
 不揃いのりんごへ母の愛満ちる
 ほどほどに満たされ嫁と距離を置き
 母と子の絵本に夢が満ちてくる
 ありがとうだけで心が満ちてくる
 裏方の汗に心が満ち足りる
 満ち潮も引き潮もある夫婦愛

靖巳 靖巳
 典子 典子
 妻子 妻子
 伊津志 伊津志
 修 修
 半覚 半覚
 清山 清山
 隆広 隆広
 一壺 一壺
 秀夫 秀夫
 糸子 糸子
 巳代一 巳代一
 和重 和重
 徳三 徳三
 安子 安子
 強一 強一
 美也子 美也子
 ヒサ子 ヒサ子
 順子 順子
 朝子 朝子
 みはる みはる

なにもかも満ちているのに背の寒さ
 満ち足りて虚ろが携帯もてあそび (備) 輝夫 兵八郎
 自信満々高橋尚子の金メダル (備) 玲子
 月満ちて居るのに名前決めてない (備) 玲子
 満ちて来る頃の油断に火が見える 雅城
 年輪に満ちる幾度の幸不幸 章久
 満ちている顔を見たいという鏡 時弘
 献血の列に漲る若い風 権悟
 満ち潮になるまで鳴りをひそめよう 尚士
 もう何も望まぬ百歳の笑顔 俊子
 満ち足りて五感ゆつくり鈍り出す 俊子
 心満つ空いっぱいにおむつ干し 度 枝子
 潮満ちて亀が子孫を繋ぐ夜 和枝
 人許し潮はゆつくり満ちてくる たもつ
 満月がときどき落ちる水たまり ミツ子
 住

満たされているから拗ねてみたくなる 大輪
 もう満ちることは無いだろ持ち時間 (備) 洋
 なるようにかなる雨の日の手水鉢 螢
 満ち足りぬ苦の男がよく眠る 俊路
 父と子と暫し水平線を見る 霜石
 人と
 あと味を楽しんでいる満ちている 扶美代
 地
 花ひとひら命ひとひら手に満ちる (備) 睦子
 天
 鏡からはらはら満ちてくる哀よ 政岡日枝子
 軸
 握手握手満ちてくるものがある

歌

渡部さと美選



パパがいる今日は子供がよく歌う
 転移無し つい鼻歌も飛び出した
 鉄道唱歌全部歌えるお爺ちゃん (備) 輝夫
 子守歌また復活の孫の守り 正子
 秋空に歌えば憂さがとんでいく 照子
 頑固親父こっそり歌を習い出す たえ
 インテリもいつしか演歌四十路入り 章司
 かなしい悲しい歌になつてくる 半覚
 童謡を唄つて乱をやりすこす 日枝子
 紅白の歌で今年の幕降ろす 登美
 赤トンボ歌えば亡母と逢えそうだ 康子
 亡母想う歌に土鈴が鳴り止まず (備) 睦子
 鼻歌の音符が弾む嬉しい日 碧
 ハミングがつい出してしまういい知らせ 鉄治
 掃帚十を鍋もハミング待ちわびる セツ子
 戦友の会弾む軍歌と夜が更ける 妻子
 酔うほどに音痴の父の進軍歌 倫子
 喜寿の宴 異国の丘でしめくくる 巳代一
 戦友の一番で父は涙ぐむ 千代
 持ち歌の一つで下戸の顔も立ち 今日子
 立場上酒も飲みます歌います 洛醉
 最近の歌は手拍子すら合わず 正雄

逆境に勇氣と氣力くれる歌
 りんご園強い助つ人ひばり節
 歌持つているから渴かない心
 母さんの歌聞いて母さん泣いている
 接待の客より上手く歌わない
 四面楚歌 真深に被る冬帽子
 一人では結構歌っている音痴
 鼻歌の機嫌は歌詞にこだわらぬ
 孤独には孤独をいやす歌がある
 数え歌うたい続けて坂を越す
 君が代をオリンピックの歌と言
 万葉の熊野古道の歌枕
 最北で春の歌待つ寒立馬
 荷物にはならぬ土産の安木節
 震災のいのちむなしや鎮魂歌
 住
 青い山脈まだわたくしの血が騒ぐ
 本当の歌を知らない籠の鳥
 デイズニーマカせています子守唄
 君が代は無理して歌わなくてよし
 海征かば老父が哀しく酔っている
 山奥の川は唱歌のまま流れ
 日本はいいなさくらさくらを歌う
 天
 愛燦々ひばりは今も生きている 塩路よしみ
 軸
 美し国冬には雪のうた歌う

初歩教室

題一 道

吐田公一

おめでとございます。本年もよろしく。

前月号で述べましたように、俳句は情景が中心となり季語に捉われている（現代俳句には季語のない句もありますが、そうなる句と川柳との垣根がなくなるように思うのだが）ように、季語というからには季節、つまり花鳥風月風景が中心に置かれます。これに對して川柳はあくまでも人間（そのくらし、喜怒哀楽、情愛その他）の生活・心の動き等を詠むことにあるのです。

以前、川柳の中にも決して情景句がないのではない、ということ述べたが、初心者が作句するに當って特に心すべき点は、川柳は人間を詠む、ということにあります。

添削句

○偶然と思わせておき回り道

説明句。意図を詠み込むと、

▽偶然の出逢い仕組んだ回り道

菜月

○集まてるここ行けばよい近道で 三喜夫

集まってる。このいみではないか？ 誤字

▽脱字に気をつけること。句意が異なるが、

▽人の尻ついて歩けば目的地

○散歩道今日もあの人もいるか知ら 忠子

作句に當って一度は倒置法（上五や下五を入れ替える等）を使つてみて下さい。倒置

法で且つ言葉を選択してみると、

▽あの人と出会う期待の散歩道

○大道芸親子で哀愁漂わせ 更紗

見たそのままを詠まれたのでしようが、同じ哀愁を詠むなら

▽大道芸音華やかなりし人

○道順を無視して観てる展示場 サト子

展示場では句が生きてこない。それでどう

なったかの経過が大事と思う。

▽道順を無視して白い眼で見られ

○反対に歩いてみたい老いの道 清

見付けは面白いのだが。句意は違うが、

▽いつか来たこの道軍靴の音がする 輝夫

○別れ道地獄極楽軽く言う

下五の表現が句を殺してしまっている。

▽極楽か地獄か別れ道迷う

○横道に外れてガタガタしてしまふ 房江

ガタガタ以降の表現が単純

▽横道に外れてゆとりを取り戻し

○厳しいが難病の道一人行く よしえ

上五の表現は当然のことで説明的

▽難病の道を一人でゆく不安

○終点の見えない道を今日も行く 弘之

下五の表現を一考してみると、中七も自ずと違ってくるものです

▽終点へますます励む老いの道

○父が来た道とは違う道を行く 秋星

説明句といえる

▽それぞれの道を歩んだ親子鷹

○旧道は通る車もゆつくりと 喜代子

通る車、車も走るで両方共車道を意味し、

わざわざ道を詠み込まなくても

▽ゆつくりと車も走る名勝地

○道徳を熱心に説くお酒好き 賢治

熱心が冗長と言える

▽じいちゃんは酒の肴に道を説く

○道説くも時にはこっそり踏み外し 勝久

時事吟として詠むと具体化されて、

▽道を説く教師も時に踏み外し

○夜道には問はず語りがよく似合う つよし

何を言わんとしているのか分り難い

▽遠回り夜道の好きな二人連れ

○道連れになつて口笛吹いて行く みはる

下五が単純すぎたのでは

▽道連れが出来て口笛吹えてくる

○人の道狐狸もご一緒に 妙子

人の道を下五に持つてくると、

▽手ぐすねを引く狐狸がいる人の道

○好きな道選びタンポポ咲いてます 敏子

原句も素直でいいと思いますが、

▽好きな道ゆけばはずこも花の園

○人の道人が通ると限らない 昌鼓

当り前のことを当り前に述べたのでは川柳

にならない。句意は異なるが

▽十七が外して困る人の道

○横道にそれた話に本音あり 青生

下五音字の倒置法

▽横道にそれた話にある本音

○道歩く時も携帯離せぬ子 よしこ

表現がそのものズバリ。少し練ってみると

▽携帯が我が物顔の繁華街

○道草も名前あるぞと主張する いたる

見付け(着想)は面白いだけに表現方法を

一考すれば―

▽名もないという道草にある主張 栄子

○道草をしながら登ろう古稀の坂

中八に感情表現が欲しかった。

▽道草のゆとり楽しむ古稀の坂 美代子

○逃げ道を作っておいて意見言う

同じ内容を具体化してみると、

▽逃げ道を開けて息子へ強意見

○使われぬ高速道路愚の政治 侑子

下五の表現に難

▽税金を無駄使ひするハイウエー

○美化運動四季の花々道路脇 錦

見つけはいいのだが、一度に沢山詠み込み

すぎたきらいがある。

▽道端に四季の花ある美化の町

○もう少し人生の道歩みます 文江

人生の道の句も多かった。ただ殆んどの句

が文江さんのような説明句に終っている。

▽行くほどに奥深くなる人の道

○遍路道鈴の音山に声をかけ 章司

内容が乏しい。遍路道の句も多かった。

▽罪深い身を懺悔する遍路道

○点点と躰きながら夫婦道 美弥子

上五が冗句。

▽夫婦道躰きながら寿命傘寿

○裏道に旨いめし屋が潜んでる 純

見付けはいいが下五でけなしている。

▽裏道に行列できるうまい店

○横道を逸れた話に座が和む ふりこ

横道を逸れた話では意味が異なるのでは。

▽横道に逸れた話で座が和む

○二人の道歩くしかない最後まで 満子

下五が安易。演歌調になるが、

▽前向きに行こう二人の道だもの

佳句 妙子

道しるべ頼れど嵌るラピリンス

抜け道と知られ悩める裏通り

旅先で道尋ねたら旅の人

首だけが上手に振れる笛の道

いばら道過ぎれば楽し語り草

喝采は無いが信する道を行く

別れ道敢て茨へ行ってみる

不景気のぬかるむ道にない出口

言い訳を考えながら帰り道

アスファルトジャンゲルにあるけもの道

逃げ道を仏に託し楽に生き

信仰の道にもあつた落し穴

汚職から転落までの早い道

古里の地道で探すわらべ唄

介護椅子ゆくり巡る花野道

人生の道に迷つて青テント

輪袈裟行く杖を頼りの古参道

人情をひとつ拾つて路地を出る

靖国へ続く道かもテロ新法

(いい時事吟)

道草を食うたあの日が縁となり

(軽みでお見事)

私の句 円女

真直ぐも曲つた道も来た丸さ

秀句鑑賞

同人吟 三宅 不朽

— 12月号から

妻に無い優しさを見た昼の月

小野 克枝

君見たまへ 蒨穂草が伸びてゐる

麻生路郎

ステップは踏めぬが地団太は踏める

土橋 はるお

『川柳塔』目次の私の座右の句です。その念いは、吐く息の雪よりも白く、伸びやかな力強い鼓動の高まりを、覚えるからです。

川柳は十七音を基調とする、日日の生活の中に生じる、人それぞれの喜怒哀楽の投影であると、理解しております。

湧き水があるから僕はここで住む

中居 善信

便利な都市周辺では、望むことの出来ない湧水である。一人よがりと思うが、弾むような句調から、ふくふくと湧く泉のような、人と人との出遇いの「ここで住む」と言わせた「湧き水」と思う。掲載句の中にそれを感じさせられる句もある。霊峰石鎚の山懐で清水を掬い合つて居られるのではと思ふ。

濁流にのまれて見たい乳房抱く

須郷 井蛙

激流ならまだしも、濁流だから凄い。まますならぬ情念の呻きか……か。

四角い形で踊る、ダンスの講習に行かれましたが、頑張つて下さい。しかし無理は禁物スローで行きましょう。

線香は百円均一です姑さん

早川 棲世

いくら先祖への感謝崇拜の念が薄れたとはいえ、線香まで百円均一とは昭和一桁で知りませんでした。明治、大正、ともなれば尚のこと、花は手作りでなんとか出来ますが、お線香ばかりは、でも均一はやめときます。

適当に散らかしていて人が寄り

楠 昭子

笑い声が聞こえてくる。構えることもなく話題も多彩である。手作りのクッキーを食べながら、花壇の話、慰謝料、進学、ダイエツトへとつづく。適当に散らかしてはいても床の間は飾りつけず、さりげなく佐助が生けてあり、相談相手にもなれる人柄を思った。適当だけでは、人は寄つて来ない。

男のクセにと言ふより、男だからか、昼の月を見るのは好きである。見つめているだけで体から力が抜け思考停止の状態になり、はるか天空へ……。昼の月は、夜の月、太陽や原色のように、何も不佻しようとはしない。いつ見てもそうである。ある意味で、それがよいのかも知れない。いつか句にしたいと思つていた、昼の月である。

松茸は買ったが牛肉買い渋る

板東 倫子

折角の松茸です。狂牛病の件があつても機密費の方からでも肉は買うべきです。でないと貫禄を疑われます。ご安心下さいチラシと睨めっこする手もあります。

妻だけのファッションショーを審査する

岸本 宏章

これどうです。ン色が薄く体型が体型だから。ン、いいね黒がグツと線が縮まつてもなあーでもなんです。ン、まあな、ンそれ、その色を着ていた時のお前が好きになつたんよ、昔は細っそりといい女だったのにもつと大きな声で言つて、ン明日は好きな色で行つたら。それにしても、同じ物を食べて、少し削りたいよ。

曼珠沙華これが匂えば凄かるう

都 倉 求 芽

田舎の道を歩くと不意に現れ、俯いて歩いていてもハツとさせられる花である。深紅のざんばら髪一糸纏わぬ隙だらけの、すっぱんぼんの裸身は、ひたすら情念と憧憬の炎を吐きつけているように見える。中七が香り、君お前、でもないことに惹かれた。

父さんと似ても似つかぬ人と添い

齋 藤 さくら

敬愛するお父さん像を求めた訳でない事は句のトーンから判ります。お父さんに無い魅力を毎日発見でき楽しい筈です。好きになつた貴女の眼力を自負して下さい。

地藏さま星が欲しくて空ゆする

奥 山 美智子

ローカルの橋の傍らの野仏を思う。類想は承知の座五の語感に、童心を感じさせられた「金子みすゞ」が少うしはなれたところに立つているような「空ゆする」と思う。

一徹を都会育ちが持て余し

宮 尾 みのり

隣の人が、何をしているかも知らない都会では、要領よくも生活の知恵、それが身についている都会育ちには、一徹もいけどたしかに迷惑な話ではある。

フルムーン宿でまさかの人に会う

保 田 絹 子

本当にまさかの、まさか。同じような旅のそのうえ宿着まで同じ、双方円満ご主人の酌で頼もほんのり、そして俺の道連れは、とさり気なく酌がれたら、何も言うことなし。

秋深し熟柿投身自殺遂行

板 垣 夢 酔

柿の木に登っている少年を、見ることもなくなつた。農家の若者も都会へ出てしまひ年寄りばかり。苦勞して腕いでも店では色だの形だのと言つてお情けである。農家の母屋を見守るかのような、鴉も寄りつかない木守柿を見ていると、まさに秋深しの感である。

日の零に染まり土に還つた筈の柿：曾ては明るい笑い声のあつた、廃屋の風雨に晒され人影も見事もない庭の柿の木：荒家を吹き抜ける風は、観光バスの窓からは見えない。

後輩に間もなく敬語いりそうだ

北 野 哲 男

人柄の良い先輩の、温かい眼差しと余裕が感じられるとともにチョッピリさびしさも。

浮気などできぬ男と釘さされ

三 宅 保 州

内心は不安いっぱいの奥さん。早く安心して上げて下さい。釘を刺されてみたい。

私には迷わず帰る家がある

鈴 木 トヨ子

有無を言わせぬ一直線の体当り、避けようがない。よほど環境が良いのであろう、他のどの句を読んでも暗さが無い。羨ましいかぎりである。

それとなくシルバースhirt見てしまう

江 口 度

シルバースhirtの表情は、座る事に可もない立場で見ると面白い。周囲の状況で腹を立てたり、眉をしかめたり、和あり微笑あり、時には寂しくなったりである。そして我が子に嫌われる事の一言も言いたくなる。

悪人も楽しんでる笛太鼓

新 家 完 司

誰が善人で誰が悪人と言え人間がいるだろうか、となると皆んな善人で皆んな悪人という事になる。思わず手を叩いていた。

もし偉い先生がなぜ手を叩いたと、叱れば悪人になれるチャンス、太鼓も笛も裂けるほど楽しんでやろうと思う。

米の飯が毎日食えるいいくらし

小 林 妻 子

座五の平坂名に謙虚さがうかがえ、私にはたまらなく好ましい。約二千句、力不足の独善ご宥願います。

秀句鑑賞

—12月号から

町田達子

人間が好きにんげんに騙される

山宮愛恵

うまい話には罨が待つ、を忘れず心の鍵をしつかりと。警鐘句の感さえある。

飢餓の子を思えと叱るパンの耳

岡田幸生

こう言う句は今までにいくらもあつたが、公園の鳩も余りパンの耳は歓迎しない。まして、人間は不況の中でも飽食に慣れているので、テレビに映る飢餓の子のことは、案外忘れてしまふのでは。

未完成だから光っている若さ

録沢風花

会議室の中の会議の状況など想像する。重役連中と意見が合わないことを、未完成だと言っているのかしらとも思い、発言に若さがあるのではと思う。現場の人のことにも耳を傾けて、善処している姿が浮かぶ。

木枯らしの中でしんみり聞く第九

福田悦子

ばちばち第九の響いてくる頃、外は木枯らしが荒れている。年の瀬もやがて木枯らしと第九に、状況が冴えてくる。来年は良き年であるようにと願わずにいられない。

嫁姑ちよつとひかえて円い仲

亀井円女

この句の通りに出来れば一番いいんですが、それが出来ないのが嫁姑、ひかえて円い仲のところが噛みしめて下さい。

譲られる席に突然歳をとリ

神戸みず帆

誰しもこの句のような心境になるのでは。自分では若い積もりでいるから、少しシヨックですね。でも何かふんわかとした気持。生き抜いた後姿にあるドラマ

柏本靖子

ご苦勞されたことをうまく表現された句。

言い勝つた夕べが苦い今朝のお茶

田中美弥子

正直な方なんです。言い勝つた昨夜の後の悪さに今朝のお茶のまずいこと。反省省を。

おことわりしたいが喜寿がむこうから

中島春江

さらりと書いて笑いを誘つユーモア句。

立板へ女が流す裏話

上地登美代

噂好きの方なんです。あちこちから仕入れてきた噂を、おもしろおかしく、まるで立板に水の如しですね。

成るように成ると気楽に今日も生き

西冲彰雄

成るように成るさヶセラセラですね。人間を長くやっている、適当に息抜きも大事、リラククスして残りの人生を明るく。

まだパワーあるのに辞めてくれと言つ

平木公子

まだまだ働く気の人に突然の肩叩き。酷い話である。リストラばやりの世の中。

テロリストみたいな猿と対峙する

長島亜希子

箕面公園の猿をふつと思ひ出す。手に持っているお握りを取つて、まるで通出鬼没。おかしいやら恐いやらで、この句の通りまるでテロリストみたいな猿と感心。苦笑いを暫し。

ティータイム孫の覆顔とシューベルト

二宮紫鳳

シューベルトの子守唄で今日もすやすやと眠っているお孫さん。若き日の自分を彷彿とさせながら、モカの香に浸っている。外は木枯らし家の中は春風が。

川柳の虚構

瀬戸 まさよ

須賀敦子さんのエッセー『ミラノ霧の風景』を読んだのは、つい最近のことである。

彼女は二十九歳でイタリアに渡り十三年を過ごした。帰国後『ミラノ霧の風景』によって作家デビューしたのが六十一歳、わずか八年の作家活動で昨年亡くなられたが、その作品は読む人に感動を与え、今も自由と孤独を愛した作家として惜しまれている。尚、この作品は講談社エッセー賞、女流文学賞も受賞している。

本は二百十五ページの文庫本、硬質の文章だがたくさんの示唆を与えてくれた。

その一つ彼女が夫のベッピノ氏から「虚構と虚偽を混同してはいけない」と言われる箇所がある。それは一九五九年五十八歳で、ノーベル賞を受賞したシチリア生まれの詩人サルヴァトーレ・クワジモードをベッピノ氏は全く評価せず、サルヴァトーレのなめら

かな詩の語調に魅せられていた彼女をたしなめたのだ。

◆虚構—文芸などで事実そのままではなく作爲を加えて一層つよく真実味を印象つけようとする。フィクション。

◆虚偽—うそ、虚偽の反対は真実
短詩文芸の虚構といえど忽ち、安西冬衛の詩集『鞆鞆海峡と蝶』の一節を思い出す。

◎てふてふが一匹鞆鞆海峡を渡って行った
果てしなく広いひろい海の上を、か細く、か弱い蝶が一匹渡って行ったのだ。か弱い蝶の孤独、自分を蝶になぞらえ心の葛藤を乗り越えた真実が哀しいまでに迫ってくる。すばらしい虚構。

俳人村上鬼城の俳句も心をとらえる。

◎川底に蛸蚪の大国ありにけり

蛸蚪はオタマジャクシのこと。

俳句は写生だと言われている。小さい川の底をよく見るとオタマジャクシの大群だ。大群の事実の描写を大国にまで飛躍させる創造の世界……

さて川柳に目を転じるとやはり橋高薫風師の句が群を抜いている。

◎睡蓮は万丈光の光源よ

万丈は一丈の万倍、非常に高く上がる形容。美しい白、黄、紅、紫の花々。夏の朝のそぞ

ろ歩き、はつと驚かされる池に咲く睡蓮の花の見事さ—極楽の一万丈に及ぶ光源のようだ。万丈光と言いつつフィクションの巧緻。

◎陸橋は天下の嶮よ梯子酒
箱根の山は天下の嶮—鳥居忱作詞箱根八里の一節、清原太郎作曲。中高年者には懐かしい歌曲である。

ほろ酔いの陶然たる気分、下戸には残念ながら理解されないだろう。向こう側へ渡りたてが横断歩道がない。遥かに見える赤色は？えい！と目の前の陸橋を登りはじめたが酔っている足には一段、一段がやつの思いだ。箱根の山道もかくありしかと、そのしんどさをアツピールした真実。

◎漆黒のピアノから出る海の音

ピアノの鍵盤を走るピアノの指は魔術師である。潮の流れ、大波小波の海のこえが聴こえてくるのだ。

一世を風靡したフランスのピアノスト、リチャード・クレイグマンの『渚のアデーレ』は海の叙情を美しく繊細に奏でる。ピアノから海のこえを聴く虚構。

さて、最後にあまりにも有名な句、これこそフィクションの権化、真実の極みともいへべき句を紹介して終わりたい。

◎遠き人を北斗の杓で掬わんか

スポットを浴びると口が軽くなる
 花道のライトまばゆい初舞台
 親子二代アトスポット中之島 (矢)五月
 スポットを浴びるとゼニになる顔に
 スポットの当らぬとこで汗をかく
 スポットをあびて自分を見失う
 花形の過去にスポットあてられる
 スポットの汗は冷汗かも知れず
 安心のできるスポットひざ枕
 スポットの当らぬままの芸達者
 こいさんのデートスポット法善寺
 スポットを囲む空気がピンとする
 紅葉のスポット滝というおまけ
 スポットを浴びる人ほど孤独です
 スポットを浴びた日想う老女優
 スポットに夫が妻がいて平和
 スポットが当たり無口が喋り出す
 スポットを浴びて際立つ脚線美
 スポットに裏方あたることがない
 息抜きのスポットでした雑居ビル
 脱税できびしいスポット浴びてます
 スポットを浴びているのは妻ばかり
 モンローをスポットライトがめくる風
 スポットが当たるとプロの貌になる
 マリオネットスポット浴びてから動く
 スポットライト浴びて明日が怖くなる
 スポットを浴びると木偶が喋りだす
 スポットに出世払いを取りに行く

梓 美代子
 五月 (矢)
 月 一步
 力 アキ
 見 清
 菜 月
 美 明
 富 喜子
 房 子
 智 彦
 俣 子
 い わ ゑ
 梓 金太
 ふ り こ
 金 太
 利 修
 武 靖
 已 欣
 周 信
 瑠 美子
 良 知
 重 人
 し げ お

スポットライト残り時間を見せつける
 税不足スポット当たる発泡酒
 鎮魂の祈りが集うルミナリエ
 人 観光スポット 昼の顔夜の顔
 地 スポットが当ると足が浮いてくる
 天 スポットを浴びて忘れてた影法師
 軸 当麻寺にスポット当る寒ぼたん
 兼題「時」 藤井正雄選
 砂時計何の躊躇もなく落ちる
 時として荒野を走る車椅子
 その時に背中を押したのは女神
 時ときは私の影と話しこむ
 昼時と知らん振りしてやって来る
 とときは行きつ戻りつ自己嫌悪
 男にも黙って泣きたい時がある
 少年化を嗤う蜘蛛の時解化の時
 寅さんにも少し時が欲しかった
 人形も時にはそむく事もあり
 矢のように時が過ぎ行く老いの坂
 賞味期限過ぎて私の味がでる
 記念樹が茂りこの娘も家を出る
 今という時間大事な人と居る
 悠久の長江時を教えられ
 さよならと言えば時間が走りそう

扶美代
 遠野 朝子
 希久子
 典子
 洋
 照子
 哲男
 昭子
 希久子
 正博
 節子
 美明
 俣子
 三男
 昭子
 正坊
 隆盛
 五月 (矢)
 智彦
 憲太郎
 見清

あの時に会わねば今日の修羅はない
 第九聴く金と時間の都合つけ
 一泊の温泉旅行時忘れ
 眉を引くひとときおんなにも戦
 時計みな止めても地球回ります
 子を庇うし単独飛行出来た時
 超うれし単独飛行出来た時
 言い流れる時の話に裏がある
 時の人 時の流れに瘦せてゆく
 待ち時間いっぱいまでの夢を見る
 別れた時もあるセレナーデコーヒー館
 時計の針を動かしてまで待たせとこ
 寝そびれて夜光塗料が四時を指す
 ワンテンポ笑い遅れて老いを知る
 ボーナスを貰えた頃が良かったなあ
 その時をのがさぬように変化球
 楽しくて食べて喋って時忘れ
 おはようと妻に言うとき言わん時
 何時までも狂わぬ父のウォルサム
 ゆっくりと独酌で待ついい時間
 言い訳くらい言える時間をくれますか
 時は未だ許してくれず吊し柿
 その時は愛と気付かぬ雪磔
 人 京太郎からくり仕組む時刻表
 地 時折は翼がほしい背を撫でる
 天 はなやぎの時も寡黙な吾亦紅

倫子
 柳弘
 笛生
 たずみ
 かずみ
 雅文
 東雲
 愛論
 とし子
 千里
 シマ子
 春蘭
 つづや
 一風
 章久
 能子
 舞夢
 しげお
 正坊
 度
 智彦
 森子
 周信
 隆盛
 瑠美子
 西

時の流れ孫に教わるインターネット

兼題「越す」 宮崎シマ子選

星が降る坂を越えたら月が見え
 百円貨越えて扶養をはずされる
 いざ越される時にはわが子でも淋し
 新宮誕生明るいニュースで年を越す
 子想越すうれしい悲鳴開店日
 遠回りバカ正直に越えてきた
 越して来た母の痛みが染みてくる
 K点を越えた雄姿が空を舞う
 煩惱を越えて未練の糸を切る
 焼肉屋恋も峠を越えたよう
 国越えて聖戦と云う無法者
 情熱の炎で越えた冬銀河
 限界の炎で越えと愛はバンクする
 追い越しはどろどろ只今仮免許
 適量を何時越しようのか二日酔
 坂越えるたびに優しくなる夕日
 お隣に引つ越してきた河内弁
 越してから人に手を貸すゆとりで
 越冬のつばめに試練まっている
 背丈越したら振り向いてくれぬ孫
 寒椿 猛暑を越した色で咲く
 父母の歳越して生きてても未熟者
 無印の私が越えて来た修羅場
 引つ越しの荷を品定めする目目目
 神越えた遣伝子神の返り討ち

螢 充子 玄也 力 たくし かりん ふりこ 雅文 愛論 真理子 恭昌 森子 鹿太 正博 伽羅 扶美代 真理子 伽羅 恵子 希久子 典子 あやめ 鐘造 隆盛 欣之

冬を越す準備へ山が紅く燃え
 海越える支援よ万事無事であれ
 越えて来た茨命となる肥し
 追いつた時は知らぬ亀の足
 雑踏でようやく一人追い越せた
 こだわつて喫水線が越えられぬ
 襲食う虫のおかげで土稀を無事に越え
 くるぶしを越す水にささうろたえる
 越すまでの遙かな道へ立ちすくむ
 勞つて越さねばならぬ冬の月
 見すこしてしまえば楽になる話

佳

勢いで越えたピンチの何か八
 引つ越しは宇宙そんな日きつと来る
 ラブレター姉を越すほど来なかつた
 時空を越えていま光見る出土品
 修羅越えて女偏からくずれ出す
 人
 つまずいて転んで亡父の歳を越す
 地
 借金を少し残して年を越す
 天
 乱気流越せばわたしの新天地
 軸
 力抜いて越す最後の峠みち
 兼題「化粧」 宮西弥生選

弘風 絹子 弥生 見清 アキ 満州 寿美子 西 西 日の出 朝子 セツ子 瑠美子 賢子 弥生 諷云児 しげお 文

化粧する背筋がピンと伸びてくる
 化粧する時は鏡に問うてする
 化粧する妻は真剣そのものだ
 化粧だけは他人にさせぬ要介護
 震度七以後化粧を忘れなしたし
 薄化粧雨のち晴になるわたしの
 紅をはく今日検診の結果聞く
 わからぬいぐらいの化粧がホント
 化粧品この世に男女いる限り
 化粧して母と同じ顔になる
 お化粧をとれば幼い顔になる
 化粧品山ほど積んでカッパ種
 化粧のりいい日の軽い靴の音
 紅ひいてだんだんみじめになつてくる
 淑女にも魔女にも化けるコンバクト
 老眼でこの頃化粧難しい
 眉きりり描いてわたしに気合入れ
 化粧せぬ野菜が嬉し里の便
 本読んで心に少し化粧する
 紅筆が肌に乗らない日の焦り
 新し知恵が生れる化粧室
 信号の度にお化粧出来上がり
 苔敷いて初春の盆栽にも化粧
 人目にも揺れにも動じない化粧
 化粧などしないあなたが光つてる
 化粧して虫の付くの待つている
 化粧する手を休めずに子を叱る
 野に託す地に還る日の薄化粧
 鬱溜めぬように心へ紅を引く

いわゑ シマ子 保州 柳伸 能子 富喜子 信子 諷云児 義 朋月 俣子 たず子 千歩 朝子 冬虹 五月 昭子 一三子 とし子 かすみ 茜 賢子 三喜夫 鐘造 女也 アキ セツ子

ダイエットできたら化粧してみよう
ビエロはビエロドーランをおとしても
振り向いて欲しい心が紅を濃く
感情の起伏は欲しい日の化粧

佳

美しくなろうなろうと化粧する
安物の化粧品ならこんな顔
雪化粧ひそかに春を抱いている
化粧する前にお米はといでおく

化粧おとす今の私は誰だろう
お化粧が上手いと言われたくはない
毎日の化粧は祈りかも知れぬ

お化粧の時が女のいい姿
美人湯に入ってメイクしなくなる

兼題「惜しむ」 河内天笑選

惜しみなく手をたたいてゝご誕生
惜しみなく流星群の降りそそぐ
紅葉を惜しんで京の寺めぐり
惜しみなく母に送った初任給
味方より惜しい男が敵にいる
絶世の美人でひどい河内弁
ためらいが邪魔した過去の惜しい恋
重たい乳房持つて子玉授からず
骨惜しみしないお人に従いてゆく

利昭 美代子 はじめ 雅文 美代子 月子 修 義 丹吉 信子 典子 笛生 洋 正雄 冬葉 典子

惜しい気もするが剪定思いきり
惜しくない命ステークキ平らげる
負け惜しみ言うてるうちは大丈夫
惜しめば惜しむほど遠くへと走る
モンタンの秋を惜しんでいる枯葉
無駄にした時間が惜しい十二月
葬儀屋は惜しむ間もなく椅子たたむ
惜し気なく割る陶工の鋭い目
コップ酒閉山惜しむ冬の月
頂点の一步手前を踏みはずす
惜しがつて賞味期限に嗤われる
出し惜しみしてから冷えていく絆
惜しかったことはすっぱり忘れよう
棄てるには惜しいあの日のツーショット
PKで落した負けはつきまとう
まだ命惜しい年金もろてない
使い惜しみするから景気良くなるぬ
惜しまれて退職したと言っておく
惜しまれて辞めるが花と負け惜しみ
惜しまれて辞めたと書いている日記
見たかったテレビ炬燵で寝てしまい
何もかもあなたにあげて惜しくない
捨てつぷりよすぎる嫁の真似できぬ
また一つ街から消えてゆく老舗
しつ地埋め鷺草惜しむ村の声
女には過ぎた気骨を惜しがられ

順子 寿美子 かりん 森子 欣之 正博 靖巳 憲太郎 朝子 たず子 欣之 月子 公誠 英子 賢子 セツ子 信子 会美 ダン吉 八千代 典子 伽羅 順子 度 女 玄也

出し惜しみしてたジョーカー手に余り

佳

平成13年度本社句会の月間賞杯永久保持者
は志田千代さん(堺市に決まりました。
平成13年度本社句会皆出席者(順不同)
安達はじめ 浅野房子 阿萬萬の 穴吹尚士
石森利昭 稲葉冬葉 石原靖巳 居谷真理子
海老池洋 江口度 太内扶美代 川久保睦子
榎本舞夢 大谷篤子 大田朝子 鴨谷瑞美子
川原章久 河内天笑 河内月子 岸野あやめ
鍛原千里 吉川寿美 黒川紫香 高田美代子
楠昭子 坂上高栄 出口セツ子 飛水ふりこ
田中正坊 田辺鹿太 寺井東雲 西口いわゑ
長浜澄子 中澤伽羅 西内朋月 西田柳宏子
藤井正雄 福田満子 坊農柳弘 春城武庫坊
町田達子 松尾和香 森本弘風 平松かすみ
吉村一風 安永春 吉岡修 宮本三喜夫
山本希久子

修 千里 利昭 利昭 求芽 智彦 川島諷云児

(49名)

おとせめ

毎月25日締切・30句以内厳守 編集部

高槻川柳サークル卯の花 川島園云児報

知らんまに亡母に似てきた煮ころがし
 秋の味なんといつても土瓶蒸し
 味覚の芽そつと添えてる旅の膳
 あんたのこともついでに折る法善寺
 憎いけど可愛いとこもあるあんた
 あんたと言ふ權が頼りの夫婦舟
 あなたからあんたに変わる三年目
 筋ばかり通すあんたに情がない
 こつこつと晩学辞書の知恵貰う
 介護の手やさしく杖に歩を合わせ
 こつこつと究めて化学ノーベル賞
 雨の日も晴れの日もある一期一会
 煩惱を抱いて凡夫の儘生きる
 有情無情口には出さぬ秋桜
 寂しさへ秋の仏を連れて出る
 匿つてあげます女性に限ります
 父の樹の枝切りたいが切りにくい
 向かい風あえて逆らうことはない
 議事進行若意見は無視される

重人 治三郎 義一 おさむ 光穂 活恵 泰雄 スミ子 武史 柳宏子 芳子 稲子 無緑 澄子 晴美 磯 しげお 庸佑 萬的

進まない話に愛が軋みだす
 もう少し進むと怖い崖になる
 奥深い森だ進めと書いてある
 書き進む写経に心澄んでゆく
 アドリブの寛美が寛美のアドリブが
 アドリブの演奏ミスが受けに受け
 アドリブの海に溺れる河豚の口
 不器用の分こつこつと追いかける
 早い秋がこつこつ窓をノックする
 燃え尽きた愛は家裁に捨ててくる
 コスモスの気ままを許す秋の風

東大阪市川柳同好会 森下

退屈の虫から虫へ長電話
 つれづれによもやま話秋夜長
 ひとり居のつれづれ小さい鍋を選ぶ
 高い堀さつとさみしい人だろ
 高過ぎる理想に今も縁遠い
 男こころ飲んだ秋空高過ぎ
 最後のページはきつと吉となる
 涙で濡れたページに諭す母がいる
 値の高い幕だ暫く生きてよう
 秋空に悟空の雲に乗りたいね
 憲法のページに戦場が残る
 自分を騙し騙し老いから逃げている
 輪を抜けて自分らしさが甦る
 まくれだと別の自分が思つてる
 石仏の苔に情けの雨しとど
 出世した男の庭にいこま石

満寿蔵 紫香 節子 比ろ志 砂輝守 孝一 秀夫 求芽 あやめ 尚士 諷云児 愛論報 良子 ばっは シマ子 ダン吉 章久 千里 朝子 猪太郎 弥生 東雲 元紀 美弥子 雅文 度 柳弘 湖風

枯山水雨の風情に魅せられる
 ふつ切れぬ自分へ長い闇がある

三幸川柳教室 三宅 保州報

天高く今日一日を楽しまん
 障害を嘆かず生きる車椅子
 魚市場ママよりパパが買ひ上手
 野仏もほほえみかえす彼岸花
 こおろぎが小さい秋の窓叩く
 甘さから心の隙に矢がさる
 秋ですねこの食欲を何とせん
 万葉の原風景にふれてみる
 足取りに迷いなどない秋の道
 ハードルを幾つも越えてきた笑顔
 秋の空詩人ひとりに広すぎる
 雑魚といえども貫き通す骨がある
 一刷けであなたへ送る空の青
 豊かさで溺れた罪に泣く地球
 豊かさで耐える心を失わせ
 怪しいも混じるのが記憶なら豊富
 豊かさも過ぎるが目が出る
 ありがとうその一言の豊かさよ
 満ち足りて気配り知らぬ薔薇の刺
 豊かさの中一円が持つ望み
 豊かさの付けをカルテに裁かれる
 豊かさ慣れに傷口繕えず
 満ち足りて愚痴を吐き出す換気扇
 税金の流れわからぬ外務省
 急流へ苦悩の二字を捨てている

柳宏子 愛論 当代 信子 孝子 マリ子 碧 佳世子 みね 豊太郎 登美代 栄之進 和子 保州 公子 敏子 嘉平 章子 正圃 純子 昭枝 鉄治 さち子 伸二 義雄 満洲子

時の流れに心の錆も浄化する
流れには添うて水草花を付け
真実が流言飛語で埋もれる
リストラの川を流れて知る痛み
改革の流れ足元から崩れ

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

山百合が人恋しさに霧の中
白百合を愛した亡母の墓参する
茶碗むし銀杏百合根母の味
一輪の百合が部屋中匂いだす
どんな花咲く楽しみ百合根買う
純白の百合に心を洗われり
百合の香に心が揺れて追う未練
ゴージャスな百合に心が揺れ動く
フォーマルな装いやさし百合の花
百合一本強い香りで自己主張
苦勞した百合が気心知って咲く

川柳ねやがわ

江口 度報

油断したわけではないが運がない
油断してかまへん場所を探してる
忘れな慣れた油断の怖い事故
二十四時間油断していても私
あいまいな返事は油断だと思ふ
膨らむとつい油断する財布
蹟いた石に油断を論される
雲行きに土産のすしは宙に浮く
雲行きを見て一人逃げ二人逃げ

三千子 未夏 千秀 町子 桂香
公美枝 鈴枝 豊枝 静江 久子 正光 智恵子 康女 和代 弘子 雄々
あやめ 忠央 一笑 弘一 恵子 柳洋 英千子 三郎

雲行きが固まるまでの失語症
雲行きをすべて見ている祖母のお茶
雲行きがどうあろうとも葱坊主
雲行きを読み過ぎ何時もへまばかり
雲行きを眺め下山する勇氣
ヘンクリがブランド品に化ける妻
とつとさのブランドを着て逢いに行く
爪の色ブランド好きがキンキラキン
ブランドも名前だけなら知ってる
ブランドで固めて尚も満たされず
私こそブランド胸をさらしとこ
ブランドに憑かれた財布狂いだす
ブランドを見るも嫌いで押し通す
平凡がベストと思いつづけよう
平凡に過しているか来ぬ便り
平凡なくらし崩れた父の事故
平凡な長い祝詞を睨む鯛
愚痴るまいちゃんも明日も夢がある
まだ夢を追う怠けてはいられない
手をつなぎ笑いたいだろ戦火の子
コスモスの中で平和よありがと

川柳塔おつぱこ吟社

木村あきら報

情けない事のひとつに物忘れ
お金では買えぬ笑顔が家にある
行けるうち行こうと老いの二人連れ
難民の足に平和が遠すぎる
生き残り旅の情けを語り継ぐ
胃薬も持って行きますグルメ旅

西 茵 朝子 利昭 亜成 亜也子 光子 日出子 弘風 仁清 修 とし子 たもつ 磔 庸佑 博泉 順三 一風 冬葉 れい子 かすみ

リストラの首がゴロゴロ捨てられる
好物のメザシ土産に旅終る
こだわりを捨てると肩が軽くなる
今空けた一升瓶にキスをする
鈍痛に手術の覚悟決めさせられ
名月の知る術もなく難民に
十三夜老いる背中に暖かい
自分史に書きたい事がある
馬の脚一度は跳ねてみたくなり
観月に添えて合唱舞扇

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

玄関に頑固な靴がまだ元氣
ほどほどの顔だと娘なぐさめる
ほっとする空気の残る秋の寺

佳句地十選 (12月号から)

北川竹 萌

残しては行けぬ夫の冬帽子
生きのびた笑顔が揃うクラス会
三食に葉セツトで日を送る
少年の夢をイチコロ膨らます
觀光をかねて札所のバスツアー
手間掛けた花はやっぱ裏切らぬ
寒風に出来映え誇る吊し柿
遅しくなって峠を後にする
ミュージアム私の午後が沈んでる
うつぶんが晴れます今日の青い空

賢 かおり 文仙 いさむ 放任 正雪 寿々女 八重子 坊太郎 貞月 能子 欣史子 アキ たず子 靖子 武庫坊 暖 萬的 ふさゑ 十三男 睦子 正坊 梓

遠回りあぜいっばいの彼岸花
秋の空電波の見えぬありがたさ
金の星銀の星私ほきつと土の星
図書館へ本を返して旅に出る
お昼どきほとんどがおばさまで込み

川柳会梨花

石上

悦子報

Aランクぱっかり孕む葬儀屋だ
いつまで孕めるか万年いきる亀にきく
きな臭い危険孕んだおべんちゃら
孕んだら今より強くなるだろう
酒に酔い家まで来たらシヤンとする
余命表見ながら少し生き過ぎか
しぶちんもクラー入れるこの暑さ
センサーで夫の行動感知する
仏壇に煩惱のセンサーがある
センサーも沸点らしい恋病
恐いのはセンサーよりも妻の勘
また一人逝きましたセンサーの音
この平和続けと願う墓の列
お盆ですお花畑になるお墓
格式まで墓地に持ち込む癖がある
次男坊出来が悪くて墓の守り
夕霧を土産に京の旅終わる
夕霧と今に名妓の名を惜しむ
包まれている夕霧のような腕
葉をすべて落として守る屋根がある
見せられぬ傷を葉陰で縫っている
楽観論大根の葉はみな捨てる

香住 香住
あずき 弘直
シマ子 慶子
きみ子 重忠
蟹郎 芳光
一夫 ただし
章久 久枝
幸子 節子
和歌子 宏
東雲 はじめ
石花菜 求芽
高栄 彬
美恵子 忠良

騙された狐は枯葉握りつぶす
川柳高知 川竹 松風報

眉書いて添削してる顔も居る
眉だつて喜怒哀楽を主張する
どうしても自説をまげぬ太い眉
逆立てた柳眉おんなの自尊心
水平線ダルマ夕日がさよとなし
コップ酒水水平線を盛り上げる
地球儀で水平線の果てを見る
蟹の目に水平線はどの辺り
空腹で行った買い物赤字です
初めてのネクタイ父が締めてくれ
ネクタイは苦手野良着が性に合う
ライバルの蔭でネクタイ締め直す
ノーネクタイになつて変わった社の空気が
友の死にネクタイ締める手が重い
ネクタイのお陰信用される手
ネクタイは妻の好みを締めて出る
百円のネクタイ誰も見破らぬ
ネクタイを外すと丸くなる会議

修 幸
かよ 佳風
孝雄 功
ただし 圭二
快風 悦子
美々 三郎
良雄 和江
てるみ 京子
松風 暖
主風

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

さりげなく転びさりげなく立ち上がり
リストラに遇つたか一つ流れ星
星ひとつ神のみ手よりこぼれ落ち
語り合う星の雫を浴びながら
亡夫の星どの星私の独り言
ゆつくりと星を見ました悲しい日

民子 ちよえ
はるみ かつ子
聖子 惠美子

見上げれば星のまたたく所に住み
戦友の計報の夜の流れ星
決断にためらいもなし流れ星
要領の悪い電話に負かされる

大原川柳社

矢内寿恵子報

町おこし張り切る太鼓みだれ打ち
母ちゃんの太鼓で朝が動き出す
ご自由にされてたまるか僕らの城
天邪鬼自由すぎて又文句言い
これからの夢を自由に書く色紙
定年へ自由な靴が待っている
自由奔放手のつけようがないんです
自由席座ればみんな顔なじみ
自由自由で不自由知らぬ子に育つ
余生なお自由な夢を抱いている
祭り好き太鼓が鳴ると落着けぬ
太鼓叩く男らしくにひと惚れ
ご自由に言われたい気兼ねする同居
神様を味方に自由の夢プラン
全快し妻に自由を返さねば
何もかも自由になつて住みにくい
年金を自由に使う旅に出る
自由の怖さ空気が水も汚染され
借金も済んで自由な日本晴れ
一合の酒で天下は我が自由
老い二人自由気ままがなお淋し
曲りたい方へ曲がつている胡瓜
打てばまだ響く太鼓に意地がある

好栄 博利
清泉 白汀
みづえ 地佳平
さちこ あやこ
玉恵 辰江
妻子 喜美子
こふゆ 悦子
巴子 敏子
南花 美佐子
みさえ たず子
静子 ひでの
絹子 あすろ
はるみ はじ芽
寿恵子

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

読めぬ字のバランス褒めている書展
憎しみを昇華していく永久の愛

兵八郎 賞

道嚙子流れる唐津の町が好き

輝夫

前妻の良さを笑って二合半

勝視

太閤に一喝されて鳴かぬ蟬

水笑

遺影には苦勞に遠い顔選ぶ

晴翠

健康で今年も揃って食べるそば

虹汀

もう待てぬおんな三十路の永い春

高明

小泉の三文判でカネを借り

四郎

仕来りを嫁に譲って趣味の句座

正剣

京都塔の会

都倉

求寿報

曼珠沙華少し昔を巻き戻す

達子

茜雲少し残して黄昏る

美穂

のような事をしましたら

しげお

ますますと当り障りのなきように

克治

ますますの味で繁昌好きな店

友照

ますますとすま上手に乗せられる

柳安子

ますますのドラマを今日も続けます

礫

ますますのところで閉じる酒もよし

メ女

功勞賞私は自分にあけてます

輝美

履歴書に賞罰なしと書く暮し

弘之

元気が取り柄は参加賞で足る

飛鳥

賞罰のない人生でよい麦を踏む

啓子

菊の鉢賞めておいしい茶をよばれ

萬的

とりあえず元氣な妻に敢闘賞

益子

一等賞ゴールのむこう母の顔

満子

賞に縁なくても走る運動会

賞というものを踏みはずす

むしかえすのが一人いて深夜まで

知らぬ間に引き返せない位置にいる

力がかえず勇氣を風が引きました

手のひらをかえして空気を返す

手のひらを返し与作は消えていた

一般の老人元氣あり余る

一般の暮しに疎い永田町

名前だけ一般受けするピカソの絵

一般受けねらい話のネタ下げる

一般に知られ覚えたカタカナ語

一般席 最前列に父がいる

一般参賀 ガラスの壁がまた取れぬ

横浜あおば川柳会

清水

潮華報

現職の名刺捨てずに持つている

朝夕の稽古がAクラスにさせる

人柄を知る焼香の長い列

病室に孫のテープが届けられ

好物と書いて毎年贈られる

落葉舞う別れの手紙読んでます

組番号違い奈落の宝籤

粋な神様がアダムにイブをつけ

命まだ惜しくて続く万歩計

花束へふと花言葉気にかかる

母の日に肩たたき券照れて出し

一年生おまけとわかる丸がある

幸代

豊次

福子

典子

高栄

宏芽

宏子

百合子

百合子

ルイ子

英一

娘に贈る言葉を探す嫁ぐ朝

おまけだけ扱いてお菓子捨てられる

顔つきを見ておまけまで差をつける

未っ子はおまけと親が可愛がり

童話の中に息づく落葉焚き

子供向けおまけの方で知恵比べ

一人っ子誘えば従姉妹連れて来る

控へ目にそっと散りゆく山もみじ

おまけする値段を聞いて断われず

店員が嫁にはおまけしてくれ

閉店の間際で値切る主婦の知恵

おまけ付き何はともあれ血が騒ぎ

買はずぎるオマケ欲しさの袋菓子

建替えへ取っておきたい傷がある

持参金持って子供のおまけつき

越境の落葉 苦情の種を播き

謹呈の書籍に定価ついてくる

尼崎いくし川柳会

春城

年代報

冗談の言えぬ短気ない夫婦

何事も冗談ですとほけ顔

冗談も笑いも入れて行く見舞い

冗談が通じず柿は青いまま

わが余白守り残した色を塗る

式千円覚えてますか守札門

三猿を守り乾いた顔になる

ぬか床を守り続けた茄子の色

てのひらに小さな秘密守り抜く

地引き網日焼け漁師が破れつく

笑子

政勝

句多留

街湖

早智

為佐子

道子

嘉信

純子

裕和

八重子

ふみ

和可

潮華

満秋

弘治

千恵

十四郎

和子

寛之

義芳

比ろ志

みち子

静

節子

手に汗を握るゲームのネット裏
網棚に希望を積んで東京へ

表札に土族と書いて島も過疎
ぐるりつと回れば一人極楽に

旧姓で呼び合う仲の老いた友
君が居て僕が居るから紅葉映ゆ

キーホルダー指でくるる夜学の子
忘れたい事胸にいつまであはやねん

口開けて眠りし故か夢を見ていた
少し怠惰に過ぎた一日だった

黒葡萄 高麗 青磁 柘榴紋
遠雷やボンとおしろい花弾けた

吹きよりに枯葉かさこそ話しおり
診断があまり軽くてまた不安

見え隠れコスモス畑の兎の頭
丸かぶりしてとリンゴは弾んでる

可能性 兎に勝った亀もいる
整形で他人の顔になる時代

霧ほどの驕りも見せぬ蓮の白
鼻くすり必ず効くと信じてる

倉吉川柳会

松本よしえ報

満寿蔵

武庫坊

水声

全彦

幸子

紫香

愛

糸子

薰

年代

光穂

芳子

里江

昭三

東園

久子

ゆり子

つかい捨てカイロに僕も近うなる
買い物に必ずメモがお供する

あくまでも可能性追い二浪した
もう二年待ちます五年待ったから

深い霧自分の妻がわからぬ
ダイヤルを回す必ずメモを見る

さいふをひろったら必ずあげてみる
今日の釣り必ず鯛と言った夫

一言が必ず十になる不思議
霧の中貴方私の物語

雨降って泣き出しそうな七五三
善人の町を夜霧が包みこむ

可能性にかけて千羽の鶴を折る
空にしたポトルに霧が立ち込める

霧晴れてここにも源氏物語
目を病んで術後の目霧が晴れ

そのあとは必ず部下をいじめます
罪かかすように盆地に霧がでる

おまけ付き必ずゴミの素ばかり
川柳ささやま

重忠

賀寿恵

玲坊

和歌子

一夫

かつみ

石花菜

久子

智子

日出子

康子

季芳

きみ子

完司

秋螢

次男

芳光

紀美子

リサイクルされて人目を引く服地
妹がいつも不服のリサイクル

畳替え心も替えた秋の風
いい事があるらし畳替えはる

金の卵ともてはやされた時期もあり
卵抱く鳩に愛かけそつと去に

畳の間だから落ち着く床柱
ダイエツト女心を積み上げる

リサイクル万円札になつて来い
竹原川柳会

良い話犬にも報告しておこう
よく転ぶ父コスモスは風の中

転ぶ度ファイト燃やして生きて来た
振り返る事を忘れてよく転ぶ

震度6までは転ばぬ自信つく
ニッポンが転んでいます兜町

会者定離ダルマは何度転んだか
賽銭がころころ神の森静か

転がったところ四つ葉のクローバー
なかなかの黄士転んだふりをして

かほる

君代

毬子

房江

みはる

美緒子

富美

寿美

可住

一路報

千枝

蘭幸

正宏

規代

節生

節夫

笑子

力

比呂子

不朽

夏喜

孝枝

敬子

房子

万年

善居

時広

可住

可住

可住

可住

笑わせて泣かすドラマの赤い爪
呼んでいる野菜畑よ老いの友
野菜大好きお嫁さん募集中
土や泥旬の野菜は話し好き
葱作りの名人など風は言う
ネギニラが名前に合う程の野菜植え
旬野菜母のぬくもり入れて着く
一生を野菜作りに懸けた亡母
伝統を目から舌から京野菜

城北川柳会

川久保睦子報

静風 千年枝 半覚 一枝 栄恵 汎美 貞子 厚子 一路

花手桶無沙汰を詫げる暮まいり
無理と無茶ぶつかり合つてから疎遠
張り替えた障子へ誰か来ないかな
どうせなら楽しく暮らそ笑い皺
耳栓をして聞いている子のエレキ
嘘のない一直線の白い道
逆風を受けてステップふみ外す
妥協せぬ風はひとりを支えている
白足袋が深い悲しみ知っている
そつとしてはしい仏と話したい
ステップが別れのワルツで重くなる

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

柳弘 あやめ 順三 ひさ乃 志華子 朝子 睦子 陸子 倫子 千里 典子 史風 公一

妬いてみる拗ねてみるのも若いうち
妬くたびに三面鏡の皺がふえ
満月をときどき雲が妬いて見せ
奥さんに抱かれる三毛をボチが吠え
妬いてなどないと言いつつ妻の乱
じろじろと横へ寄つてきて話か目
無人機でじろじろ見てるカメラの目
じろじろと見られて度胸付いてくる
じろじろを背なけ受けてるニューモード
じろじろと見られておじけなない若さ
公園の猿じろじろに得意顔
犯人に似てて世間の目が刺さり
じろじろと見られて記憶まき戻し
札束の魅力に理性崩される

松下さんメイドインチャイナに負けました
手鏡にうつる私は亡母の顔
華やかな歌手泣いた日もありました
雨列車急げいそげと虹が待つ
元栓を再点検をして留守にする
口に栓耳に栓した目がさとい
酷暑から残暑にうつり地蔵盆
簡単に燃えつきそうな彼岸花
白無垢で貴男好みに染まります
娘の秘めた恋路をそつとしてやろう
紙袋とれば今年の梨の顔
幸せはこんな事かな共白髪

政子 あさこ トヨ子 東雲 登美子 とし子 あい子 昭子 高栄 春蘭 はじめ 修

相性は水と油で来た夫婦
相性が合うて浪速に住み続け
相性が良くて一緒にボケてます
凶と出た人と楽しく添い遂げます
ローカル線で訛りを詰める旅かばん
野次馬にマイクの音もかき消され
あの人がマイクを持つと放さない
選挙戦マイク頼りにがなり立て
お風呂よりマイクの好きな老人会
秋空にマイクはりきる運動会
百階に嫉妬しているテロ集団
口先ではめて腹では妬いており
ねたむのは女だけではないらしい
外孫が座ると妬ける爺のひざ
持てないが妬かせて見たい意地がある

たけし 敏 六次 扶美代 忠宏 昭平 狼沓 昇 敦子 耕策 聡 専平 洞庵 フジ さとみ

川柳塔みちのく
吊る枝に神代の彩の雪が降る
子と酌める日を楽しみに待つ銚子
年金日一品多く差し向い
楽しい日あかつきと言つ間に鐘が鳴る
お握り日おかずやりと楽しいいな
年金のおかげで今を生きている
いつまでも元気を飾る肖像画
こぼれ萩ははの年金届け出る
またの日に楽しい話溜めておく
年金に頼る湖口に根雪降る
菊飾りコウノトリ待つ祝い門
娘の未来仕合せ祈りひな飾る
楽しさをまだまだ伸ばす生命線

小寺 花叢報 謙一 きよし 妙子 ヒサ子 てる 隼人 順風 慕情 ふさゑ 花匠 雅城 愁女 ツネ

白いキャンパスあなたの彩になる私
棚落ちの西瓜になって五七五
華やかな嘘でまるめた路地住まい
栓抜いて帯にはさむと鈴が鳴る
栓抜きが帯で読んでいる客の層
喜寿近し探しものまだ見当たらず

弘一 ただし 達子 一枝 求芽 緞子

お風呂よりマイクの好きな老人会
秋空にマイクはりきる運動会
百階に嫉妬しているテロ集団
口先ではめて腹では妬いており
ねたむのは女だけではないらしい
外孫が座ると妬ける爺のひざ
持てないが妬かせて見たい意地がある

さとみ

またの日に楽しい話溜めておく
年金に頼る湖口に根雪降る
菊飾りコウノトリ待つ祝い門
娘の未来仕合せ祈りひな飾る
楽しさをまだまだ伸ばす生命線

ツネ

子守唄をふわりとかける雪囲い
 熱燗の容器を出して冬支度
 楽しくてどんどん増える笑い皺
 この土と生きる楽しくさ噛みしめる
 大根が一本残る冬の章

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

おつき合い相手の酒豪知らなんだ
 叱られた恩師と長いお付き合い
 マイペース長く付き合いしています
 また今日もつき合いですか先寝ます
 ユニークな人の会話がときれない
 ユニークな意見はいつも遺される
 ヤキトリの店に流れるバイオリン
 ユニークな遺伝子欲しい女です
 ユニークな男集り梁山泊
 ユニークな方と申さば角立たず
 再出発昨日と違う風景画
 遠い絵だ 石けりケンバ御飯だよ
 夜景下に幸せすぎる観覧車
 運転は友にまかせて秋景色
 風呂屋から富士松 浜辺湯気と消え
 弱虫の私に似合う橋がある
 風景に鬱を晴らして帰帰る
 弾む日は風景までも西いろ
 湖東三山紅葉の下を寺に行く
 風景のどの場面にも母がいる
 日本の自然が残る沈下橋
 風景画一茶の姿姿せて見る

黙人 花 一花 五楽庵
 春 周 松 哲 松 周 春
 蘭 信 煙 男 子 子 蘭
 鹿 太 トミエ 房 子 石 舟 無 緑

シユーベルト何時も聞える青テント
 午後からは北東の風枯葉舞う
 周波数妻が合わせて仲が良い
 ワレモノと書こう夫婦の倦怠期
 桜の葉燃えつきたのか散り始め
 名刺も捨てたのか決めた冬帽子
 苦労した話を笑いながらする
 七草も雑草にされ冬になる

サークル檸檬

小林

一夫報

スイッチはいつでも押せる位置にいる
 鳥育ちの風船街で強くなる
 ごぶさたの言葉と歩く故郷帰り
 空も地も果てず秋の実たわわなり
 風船もやっぱ青い空が好き
 人それぞれ思いそれぞれ秋の楽章
 約束の再会風船がしほむ
 新天地ともめ風船風に乗る
 風船の夢アドバルーンになつたるぞ
 ほどほどの程というのがむずかしい

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

しあわせの余波だなお赤飯がくる
 人生の余波かな古桶がやってくる
 口喧嘩いつまで続く無言劇
 余波うけぬ場所を探しているところ
 夕焼けのなごさを余波にさらわれる
 尻もちを搦いた余波でも頂か
 余波の出るほどに力を蓄めている

五月 富喜子 光久 靖巳 江美 正坊 求芽 房子 義子 遠野 あずき 智恵子 希久子 靖巳 楓 楽 いわゑ 八重子 保子 弘子 英夫 なが子 はるお 汲香

昨日の余波知っていたのか避けている
 出帆に余波を背負って出世する
 この腰でワルツ踊ればずっこける
 礼服を脱いでワルツを踊る夜
 円舞曲もうすぐ雪がやってくる
 ストレスのとばかり猫も寄りつかぬ
 新しい余波を若者から浴びる
 淡々と余波を承知で意見する
 ギラギラと無口の余波に手はひとつ
 余波に耐えている豆腐と生たまご
 首筋をつままれたまま反省を
 ご先祖の血筋あつぱれ遊び人
 出向く筋合いではないが折れて出る
 私を妻にしたのも筋ちがい
 樹を冲る背筋をのぼる水のおと
 三代もかかって庭がまだ未完
 忘れねばなるまいやがて晴れる霧
 丸坊主などで呑気な唄がでる
 不景気の余波に医療費また上がり
 ひとり居て老母が咽う冬の夜
 筋交いの役目を果す木になろう
 碧空が輝きすぎると冬薔薇

長柳会

加島

由一報

極上で唸り値段でまた唸る
 天窓を作つて宇宙見えています
 先輩の名句思わず唸り声
 新聞を開けばテロと炭疽菌
 一冊の本に風穴開けられる

睦子 菊乃 幸枝 みさ子 房子 和子 富久江 孔美子 盛桜 公子 節子 実満 八重 諷人 武子 きみ子 喜与志 久枝 くに子 かつ乃 螢

息かけて拭ける小さな窓が好き
偏見を捨てて開いた胸の内
唸り声出るほど旨い松葉がに
テロからの余波に唸っている世界
爆音が唸る砂漠のつぶらな眼
御開帳秘仏めぐりの古都の秋
今月も赤字で妻が唸り出す
懐かしや唸って歩く扇風機
文明が窓の開かないビルにする
宣伝の封書は開けぬこのご時世
バイキング唸るほど食べウオーキング
唸る程金ある夢にうなされる
ひとしきり唸って帰る絵画展
天真爛漫胸の扉に鍵は無い
ケイタイの窓に世相の裏が見え
開かれた門は五十歳まででした
ときめきは新刊の書を開くとき

川柳塔なら

坊屋 柳弘報

子の笑顔離婚のペンを止め
来世も巡りたい人ばかり
悔いもある余生しずかにペン運ぶ
花めぐりもみじ巡りと友の仲
陶芸のもみじ絵薫る夫婦皿
巡りあい絆余曲折の五十年
自分史の甘さを削る赤いペン
風と遊びもみじと語りまだ独り
お揃いのスニーカー弾む草もみじ
ペン替えてみて進まぬ見舞状

芳野 靖子 美子 けい子 敬二 正一 三和子 マサモ 由一 潤子 直樹 輝子 正子 智子 博一 敏子 美和子 カズ子 むつみ 秋泉 良一 富子 絹子

もみじの手汚いものは未だ知らぬ
回復の早さを披露するカルテ
予定日もついでに披露する宴
ペン牝に昔の夢が甦える
清貧のペン牝狙う直木賞
点在す七堂伽藍花もみじ
手術跡披露しまくるおばあちゃん
アンテナを張り巡らして噂好き
押し花にしたい恋です散るもみじ
巡り来る運を信じている軍手
以下同文お名前だけが披露され
回廊を巡って弥陀の手に絶る
轍の長い影から走馬灯になる
命とはもみじ一葉地に還る
反論をじつと巡らす煙草の輪
頑固一徹詩人の太いモンブラン
保育器で小さい命披露する
巡り合う序章は風の盆の夜
無理をして褒めているよなペンのあと
母さんの土に還っていく紅葉

海鳴りが窓ふるわせる旅の宿
ときどきは涙を隠すおかめの面
夕陽真つ赤余生しつかり米をとぐ
母さんが和裁一途で子を育て
うば桜咲かせて見よう春を待つ
ベルが鳴る夜中の電話に胸さわぎ
ブランドにときどき迷うウインドー

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

あやめ 洋子 真理子 春雄 隆盛 春蘭 理恵 孝子 朝子 比呂志 和夫 元紀 道子 秋雄 萬的 章久 茂雄 千梢 丹吉

帰ったか愛の小窓の灯がともる
鈍行の駅舎に菊の鉢並ぶ
医師に内緒ときどき少し飲む
正義感通す明日の靴みがく
ツィショット夕陽の窓に浮かぶ影
争うた友へお詫びも添え賀状
叱る子に少うしむを閉けておく
和やかな飯面に替える見合い席
躓いた道の出合いが縁となり
楽あれば苦ありそのまま苦が続く
閉じ込めた過去がときどき顔を出す
家族の和と女関に見る脱ぎつぷり
ときどきは妻が不貞寝をして困り

同病の誼見せ合う手術跡
生きるため他人の脳死を待っている
湯気の中で誰か見ている露天風呂
かんたんに手術手術と殺生な
誰の人も人騒がせな忘れ物
冷える夜アフガンの空赤く燃え
冷えるほど夫婦喧嘩は熱くなり
そのメスで上手く捌けぬか呆けの皮
柿の冷え見事に効いた酒の酔い
悩んでる誰に頼むかこの役を
手術前身体少し整理する
夜の道誰が歌うかセラセラ
手術から生かされている日目を生き

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

耕治 まさ昭三 孝一 義芳 弘三 正治 満寿蔵 十四郎 求芽 柳宏子 紫香 祥風 柳童 ヤギエ 庄三 信男 長一 よしろう 勝 馬洗 雪子 見清 昭子

誰もいない鬼が泣いてるかくれんぼ
知っていて誰も言わないから怖い
アガンの冷え冷えとする神無月
誰だ何で俺の足首つかまえる

誰かれのなかのひとりにいるわたし
雪こんこん足おみしける春の冷え
手術台おれの命でない命
プ子整形手術しないが売り物に

かわはら川柳会

上田

俊路報

シルバーも輝いている趣味の会
満二歳興味しんしん輝く目
満遍に輝く紅葉秋深し
お早うと輝く顔で幕があく
一瞬の輝きだった甘い風
捕虜達にノルマは仕事めしの種
頑張れとノルマに今日も叱咤され
きつかった今日のノルマを癒す風呂
ゆたかな老い夢みて耐えているノルマ

川柳塔わかやま吟社 (前月分) 牛尾

緑良報

心まで干してはならぬ辞書をくる
湿っぽい心も卒に吊るしとく
裏の顔干して自分を取り戻す
片袖の濡れた秘密が干してある
甲羅干しどうやら亀もヒマらしい
古本屋の本も干されたがっている
干されてもおなも図太くなる大器
干上がった井戸から民話聞こえそう

敏子 射月芳
保子 和香
黒兎 保州
緑骨 さち子
久子 紀美女
千里志 正博
直次 佐代子
契子 君枝
子 和子
子 三喜夫
子 千寿子
子 富美子
子 豊太
子 泰子
子 あつむ
子 寿子
子 吞天
子 和

洪柿も大根も吊るし里の秋
暖かい布団に明日の夢を抱く
人並みという生き方の難かしさ
平均をすれば地球がまだ青い
常識の中で平均点捜す

平均の暮し屋台で飲む仲間
平均点互いにつける仲の良さ
平均寿命生きる気である土踏まず
まん中の成績で良しよく遊ぶ
皆中流と思うてるから平和です
ボトル一本企業秘密を喋らせる
結婚はしたが性格違いすぎ
失恋の副作用です多趣味です
副作用怖くて酒を未だ知らず
救されぬ愛と効つて副作用
惚れ薬飲んだら効いた副作用
ストレスの気分転換浪費癖
副作用無いと主治医の太鼓判
口八丁とつさの事に動じない
泥跳ねをかぶる右脳がにぶいから
褒め言葉とつさに口に出る余裕

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

やりくりの機密費何に使おうか
鹿之介苦労くれろと月拝む
やりくりに夢少しずつ目減りする
助太刀へ走る安兵衛血が炎える
裏切った罰か宇喜多是狂い死ぬ

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

やりくりの機密費何に使おうか
鹿之介苦労くれろと月拝む
やりくりに夢少しずつ目減りする
助太刀へ走る安兵衛血が炎える
裏切った罰か宇喜多是狂い死ぬ

昭恵
寛子
信子
はじめ
洋々

雨続き仕事の予定組み直す
高德が桜の幹に忠義かく
やりくりしやつと手にしたマイホーム

一匹の蟻に見習う事がある
邪魔になるとこへ見習い立っている
見習いの期間に恥をかいておく
あのとこの見習い上司の椅子にいる
怒った日は見習いとゆく繩のれん
見習う事ばかりで未だ未完成
見習って覚えた母の味が生き
口の立つ見習いがいる葉屋うら
どの作も受賞させた菊花展
一輪の菊にもいのち削る音
久々に母思い出す菊贈
待ち合わせ菊を指しける花時計
麻酔さめ生きる譜面を書き替える
平和になるまでは麻酔で眠りたい
バカなことしたなあ麻酔醒めてから
麻酔が醒めたら私の恋も終わるだろう
麻酔されたら小咄一つ上げる
麻酔から覚めて生きてる痛み知る
狙の鯉です麻酔効いてきた
判押して全身麻酔すると決め
ウインクの麻酔で財布空になり
鞭よりも母の涙はよく利いた
感情少うしまじる愛の鞭
愛の鞭なかに三分の怒り交ぜ

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

雨続き仕事の予定組み直す
高德が桜の幹に忠義かく
やりくりしやつと手にしたマイホーム

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

雨続き仕事の予定組み直す
高德が桜の幹に忠義かく
やりくりしやつと手にしたマイホーム

春恵
和甫
操子
さち子
大輪
美子
あき子
和重
和子
和子
英子
泰子
利治
吞天
吞天
寿子
保州
克子
優子
輝子
佐代子
高夫
三喜夫
正博
鉄治
度
良一

美女の鞭ライオン猫にする魔法
身勝手な反省もある愛の鞭
リハビリでありたへ生きる鞭を打つ
荒稽古土俵飛び交う愛の鞭
思い出の要所要所に愛の鞭
日だまりの中の自分に鞭を打つ

南大阪川柳会

吉川

寿美穂

あつむ 富美子 稚代 佐一 順子 和香

スペースは無限宇宙へお引越し
裏口にスペースひとつある噂

スクープへスペース空けて待つデスク
ボランティア愛のスペースいつも持ち

座禅組むスペース僕の無の境地
寄せ書きのスペース探す細いペン

地獄には僕のスペースあるらしい
スペースがあつても埋る記事がない

子のノートスペース漫画かいてある
暗号が解けないままで冬になる

同居して夫婦の暗号二つ三つ
キャッチャーのサインを外野から盗む

解説された暗号風に舞う
手の動き暗号にするスポーツマン

唐草に時効になったはらがあ
唐草に郷愁のせて柿熟れる

凡太今何処で唐草見せてるか
参列へ年功序列生きている

唐草に包むと匂う少年期
杜葬の儀義理と役との列ばかり

開館へ並ぶ絵画も京の秋

朝子 重人 庸佑 遠野 柳弘

川柳大阪

高木

唐草の風呂敷かけてあらかくし
すりへったタイヤに僕をダブらせる
神様の暗号解かぬ方がよい
暗号を忘れてカード役立たず
参列の多寡で人徳計れない
参列の中の反対論を練る
分校を閉じる日はあちやんも並ぶ
参列の真上を競う取材ヘリ
筒抜けの暗号招く負けいくさ

川柳大阪

高木

直子 憲太郎 楓楽 朝代 三男 ダン吉 洞庵 浩一郎 久峰

土に帰る命しつかり洗つとく
羊水を自由に泳ぐ孫元氣
趣味無しと言つて何処でも顔を出す
合格と書いた日記の字は踊る
好きこそが続ける事の秘策なり

ケイタイと煙草ハンドルまでも持ち
自分からプロだと名乗る下手もいる
仕事なら無口趣味なら生き生きし
銀行の穴の修理に税取らしたて

たつぷりと自惚れ詰めた化粧箱
胸薄い女で勝ち気靴の音
自信ある歩幅背すじが伸びている
うれしさが書いた手紙に踊る文字

それは趣味おしつけないでほつとい
不自由な頭の中の片仮名語
二枚腰教えてくれたのが将棋
太い杭打つて男は策をねる

秋雄 章久 利昭 宏 功

それからを考えるなら月の夜
鳥になり彼岸を前に宙返り
米子にも総理を批判する鴉
刈り取る噂が茂らないうちに

招き猫綺麗に磨く肉屋さん
さわやかに裏も表もない落葉
よそ見したい言いわけ通り雨に逢う
片耳はいい話だけ拾う役

よろこびからだんだん遠くなる私
自閉症文化の秋は賑やかな
ゴミ袋カラスと僕の知恵くらべ
走らねばならない足を揉み解す

安心のお守りだよね母の胸
平成の川はジグザグ多すぎる
節約のシンボルですよちやんちやんこ

喜楽 隆司 川童 河内子 朝子 笑風 照月 一風 國治 まつお 信醉

政岡日枝子報

日枝子 春枝 瑞枝 蘭 すみゑ 恵子 てい子 ゆき 田鶴 千代 千春

柳昌 重人 洛醉 柳宏子 柳弘

千し柿の味見は鳥が真つ先に
戦争の末裔野生馬でくらす
雨降りの柳会席はあたたかい

川柳塔まつえ吟社

恒松

富美子
ふみ
八重子

おしゃべりに大事な時間盗まれる
花と向き合う美しい時間帯

紫見

時間割作って見ても捗らぬ
後悔は時間とともに深くなる

政子

心の戸開けて訪ねる人待つ
わたくしの海を訪ねる旅に出る

昭二

訪問の電話足止めさせられる
訪ねたら不死鳥だった花だった

知恵子

ときどきは過去を訪ねてみたくなる
訪問着祝いの匂いぶら下げる

多喜

孫の声喚声の中間き分ける
いらつしやいませ機械の声が通りすぎ

日出子

大声で未練がましく呼び戻す
アフガンに平和の声は届きかね

注湖

秋の蝶たつぷり演技して眠る
末席から出る正論が無視される

房湖

マザコンにたつぷり浸る不登校
たつぷりとお乳をふくむ子の笑顔

小鹿

たつぷりと秋を炊き込みにぎり飯
アイロンをかけるたつぷり愛こめて

早苗

たつぷりととふくれたおなか双子かな
たつぷりの予算無いので政治論

煩悩児

桂子

太泡

与根一

治代

玲子

久子

茂美

長吉

欲張りが無くて夕日が美しい
欲張って見ても余生の後が無い
欲張って見ても所詮は井の蛙
二兎追って掴んだものは風ばかり
欲張っているから見えぬ落とし穴
限定品ついで欲張ってみたくなる

ちえこ
義良
昌枝
多賀子
静恵
町紅

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

毎度です私の絵から愛が欠け
アメリカへ毎度ペコペコするでない
このままが好きだ笑顔の君が好き
噂話あちこちまいた種もえる
生き残る笑顔の鑄型離さない
ゼネコンの経営不振傘下泣く
過疎の老母このまま住むと動かない
このままが良くも悪くも生きざまだ
秋刀魚焼く煙に毎度猫がくる
粗食でもみんな元気ぞ早くつく
合わせ鏡髪の薄さが気に入らぬ
このままでいたいと彼の胸で泣く
毎度聞く小言も子守唄になる
気持よいあいさつ毎度ありがとう
ゼネコンのコントとかけの尻尾かも
口説くのも早い毎度振られてる
ゼネコンの技術文化は海渡る
無学の中に本物の学を知る
ときどきは鏡に笑顔して見せる
月末は毎度赤字が身を攻める
酒の量もえて傷口深くなり

洋々

鬼桜

延子

忠良

節子

美恵子

すなお

あけみ

佐智枝

昌鼓

徹子

雅女

保子

志げ緒

無限

修

返礼のない挨拶を毎度する
このままで終りたくない欲もある
悟り切ることも出来ず今日も生き
戦争は毎度悲劇を連れてくる
ゼネコンは時々黒い煙吐く
ゼネコンも毎度のことで裏が見え
悪知恵も背息吐息不況の世
ゼネコンも背息吐息不況の世
このままだではテロと意地とのせめぎあい
夕焼けが迷う私の背を押す

孝男報

孝男

蝉しぐれ日が落ちるまで鎌をとり
冷や水は承知でしたいダイビング
そんな事おまへんやろう適齢期
悲しいな人間みんな土になる
大雪で携帯電話幅利かす
国宝に心みたされ奈良の秋
持っているゆとり慌てた事が無い
秋ふかく案山子ふて寝の畔枕
カラフルな春の夢みて土いじり
片言の話が弾む糸電話
深すぎるスリット足の面はゆし
楽道家らしくふるまい策はない
難しい話やんわり溶かす酒
親馬鹿と言われて土産持ち帰る
文化人になったつもりペレー帽
金の生る木が突然に枯れました
甘えられ孫に背をむけ泣き出され
棟梁の汗が染み入る文化財

孝男報

孝男

春名
鐘旭
一京
美雪
益子
のり代
宗明
金祥
孝男

携帯を持って出かける野良仕事
病父見舞い行きつ戻りつ通し土間

春子

敬老の座に携帯の初メール

幸枝

あと一歩無情の還らぬ物が増え

晴美

化学の進歩土に還らぬ物が増え

俊子

湯けむりのピンクの肌に赤蜻蛉
単身に重箱のある月曜日

恭一

狼でさえ酒をのむのに俺は下戸

奈良司

出不精の下駄もカラコ夏祭り
祭り笛へりくつなしに踊りだす

也恵

アセチレンガスの匂いと一銭と
削減の余波がじわじわ身に迫る

和

戦場の余波が消えない五十年

あづま

シヌモクサメの余波がな海が泣いている

重忠

暑かった夏が残っていたシミ
同居して萎縮している古希半ば

芳江

糊効いたシートも萎える妻の留守
延命は止めてください妻の花

ユリ子

そこそこの悠悠自適手が萎える

健三

痴話喧嘩ゴトンと派手に陽が落ちる

ひろこ

古くなりゴトンと音がせき立てる
断絶の友が恋しい将棋盤

黙光

思慕断てば昔々が流れつく
断片を拾い輪転機に掛ける

天人

一刀両断若い者には負けて勝つ
栓抜くと祭りがワツセワツセ出る

美ツ千
帆雀
華子
宣子

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

売られ行く牛が覗いている列車
押し込んで詰めて通勤列車発つ

青春切符 夜行列車ではすむ旅
急行列車 風置いて行く通過駅

D51は老いても列車引つ張る気
スタッフも揃い船出はもう間近

外人さんも驚く正倉院御物
木枯しに驚く老いの冬仕度

びつくりをさせてしゃっくり止めてやる
親友の極がつらい程軽い

化粧品売場はいつも春のよう
水掛論どちらも負けず秋夜長

秋風が黄色になつて御堂筋
来年も歩くつもり靴を買おう

黙々と帰省子が食う栗飯
アドリブで言つた愛が実る時

柿むいて母娘の思い出が長い
ちよつとした義理にだんご縛られる

今度からかんにんせへんと言われ

星一つ淋しい夜の子守歌
流し眼の色気たつぷり笑み浮かべ

今朝の冷え離れられない床の中
うらうらと朝のよう落葉踏む

うらうらと親子で話す支え行く
人生は時の流れに添って生き

紫香
高栄
ただし
靖巳
庸佑
萬的
知香子
周信
しげお
英子
慶子
和子
求芽
正坊
吉太郎
メ女
柳宏子
寿美子

うらうらとほんのり酔うて夢心地
斐伊川の流れ歴史を秘めている

故郷の描写思わずあがるトーン
秋晴れにコスモスの花咲き乱れ

振り向けば長き歴史のむらなくも誌
ひと仕事終えてくつろぐ指定席

さわやかな音楽生きる力わき
秋彼岸近づくと頃に紫苑咲く

秋の花たつぷり活けて客を待つ
梅干せる老母みけんのしわよせて

喜寿過ぎて学び足りない事はかり
主のない庭に朝顔二つ三つ

はまゆう川柳会

中後 清史報

ガラス越し今朝も元気な始業前
見送りの手形が残る窓ガラス

ガラス拭く心のくもり拭きたくて
非行の芽坊が家族のガラス張り

機密費は曇りガラスが好きらしい
旗見せよ期待に近い支援策

子に期待それは無理ですあんたの子
何ごとも期待しながら生きている

晩成を信じる姑にある期待
人生は期待はずれが当たり前

連れて来た嫁はおそらく苦労する
この恋もまたおそらくは片想い

感触でおそらく良いと踏んでいる
入選はおそらく無理と踏んでいる

公約はおそらく駄目と決めている

幸
明朗
ふさえ
美香子
寿
八重子
まさ子
節江
幸子
ます美
昭子

幸
苗子
平和
雄造
佳子
比斗志

おそらくと事よるとで寝付かれず
おそらくに尾ひれをつけてゆく噂
管を巻くおそらく本音だと思つ
用立てておそらく駄目と覚悟する

川柳塔おおとり

原 みさを報

公園で出会つてからはずっと春
楢山公園の道草を食つてくる

公園で肩の力をぬいてくる

公園の顔も少しずつかわる

公園に来ると優しい句が浮かぶ

風の子を待つて公園今日も暮れ

公園が育ててくれた呼吸する

飄々と働き金は溜めていた

公園に草が伸びてる泣いてる

心には森と湖秘めている

公園で逢つてわかれる花時計

公園という名を外すこと忘れ

井戸端の会議公園占拠する

投げける気はないが握つてゐる小石

生かされて一期一会の石を積む

軽石になってしまつた父がいる

友来れば自慢の石のある部屋に

露天風呂石の陰から脚線美

庭石が代々見てる家の風

墓石に愚痴をこぼしてまた来るネ

急流にもまれて石も丸くなる

病床にあつても母は気働き

三役をこなしながらのフルタイム

雅 視 生米子 美佐子 恵美子 眞一 せつ子 以和万津 風花 邦昭 雄々 仁子 雅通 一弘 大鯨 庸二 きみ子 睦子 芳光 彰雄 道子 清子 富貴子 野草 義弘 紀子

税務署が働きぶりをチェックする
働けるおゆるしがした聴診器
袴をつけて働くのは嫌い
戦場で働くことはもうご免
働いた証の湿布今日も貼る
夕陽落ち野良から帰る背が丸い
気分ほど脳細胞は働かず

川柳塔打吹

米田

幸子報

諦めず死ぬまで化けて化け通す

新世帯すかたん食つて蚊帳の外

旅に出て心豊かな家族風呂

すかたんをくつて一人で旅に出る

すかたんで句題間違え慌て出す

波風の立たぬ家族に生かされる

諦めていません裏の裏がある

夢の中母の振る手が川向う

独居でも気遣う家族あればよい

大学に入れて家族は火の車

おばあちゃん家族自慢の度が過ぎる

引導を渡したくなる村雀

引導を渡して捨てた慣れた靴

諦めて十日たったが腹がたつ

すかたんと言われたお方蓮の上

ルンルンで出かけすかたん定休日

引導の順番を待つ大会社

家族より夕飯猫が先に食う

スカタンはくつておいしいものでない

十リットル引導渡す除草剤

登美 舍人 千秋 黙光 童子 敦子 澄子 晴光 和幸 久芽代 たけ代 信子 忠良 和子 貴恵 順子 善江 照彦 一夫 和歌子 セツ子 芳光 季芳 玲坊 よしえ

鬼も神もすかたん食つて逃げ惑う
すかたんを食つて食わせて愛深め
すかたんを食わす一票持つている
役人にわかるもんかと諦める
あきらめて海外旅行やめにする
家族万歳だまつて心通じ合う
すかたんの耳へ挽歌も届かない
諦めた所にサクラ咲く知らせ
すかたんを食つた分だけ肚が出来
諦めた頃に見つかる探し物

川柳さんだ

北野

哲男報

無理をして今日の予定を明日にする

淡い夢持つて行きますクラス会

農業祭手打ちの蕎麦に長い列

虫達に冬のベッドの敷落葉

側で見て居る程楽でない仕事

耕して無理やり蛙に春を見せ

言いたいな担保をくれと銀行に

いい人だが無理を言うのが玉に傷

黒枠の写真の時に兄が居る

合い鍵を持つてはるから先寝ます

翠洋会

穴吹

尚士報

浮くことを覚え力泳止めにする

石橋を叩いただけで力つき

流星に力の無さをかけて見る

力ない声に総てを悟る母

無視されるわざわざおしやれてたのに

孝恵 かつみ 石花菜 玲泉 博々 雄々 勝見 節子 幸子 開子 ちあき 歳子 サクラ 久恵 俊昭 千代 藤朗 哲男 周信 義昭 澄子 舞夢

わざわざじやないとことわる見舞客
 ご近所の噂わざわざ告げに来る
 さよならと鉛筆書きの置き手紙
 競馬誌にぎり鉛筆が思案す
 鉛筆をにぎり二歳の犬宇宙
 一夜漬け鉛筆はちやんとおみとおし
 百円の色鉛筆で未来絵図
 芯のある主張鉛筆一本気
 世話かけた鉛筆でいねいに削る
 エンピツで泣きも笑いも産みだせる
 鉛筆で書いた過去なら消せるのに
 鉛筆を削って思案まともらず
 鉛筆のラブレターなど信じない
 これからが私の春と絵の具皿
 歴史館無料で入る優待券
 夢に見た視野いっぱい砂の丘
 こうのとりのややく嬉しい日を迎え
 背信の火種煽ってくるメール
 暗い世にイチローぱつと灯をつける
 時効にはならない罪を背負っている
 頑ななところがいいとおだてられ
 雪の富士独り旅には眩し過ぎ
 老いたかな年々こたつ早く出す

正坊 尚士 真理子 さだを
 高久子 千梢 富子 希久子
 春 日の出 蕉子 伽羅 志華子 蛙
 会美 絹子 東雲 恭昌 叡子 靖巳 照子 正雄 楓楽

岩美川柳会

石谷美恵子報

軍歌で負け演歌で平和とり戻す
 鼻唄の演歌槽かきを漕いでいる
 宝くじ買う列不況知らぬ顔
 美人なら無理を承知で受けてやる

忠良 蟹郎 たぬ 喬水

血糖値下げたサラダに期待する
 まんまるい女になって盛るサラダ
 一流を目指し孤独な豹になる
 時雨から抜けだしてきた冬の月
 風刺うがちが効いた演歌が大好きだ
 一流に五流も交じりて和気あいあい
 熱がでたら金ののべ棒枕して
 一粒の重さ違わぬ寿司職人
 姫松を一流にした三代目
 霧の夜わたしやっぱり気を許す
 人間の無謀を受ける花もある
 白い粉に郵便受けが震えてる
 挑戦は何が何でも受けて立つ
 受け皿の母へストレス吐きに行く
 無口だが犬に向ってよく喋る
 お任せと叩いた胸の薄いこと
 聞き飽きた演歌を歌うおでん鍋
 演歌デュエット危険なほどに馬があい
 診断書サラダを食べと書いてある
 土曜日のサラダは歌をうたいだす
 遺伝子は一流だのに芽が出ない
 手に受けてみれば大きな月でした
 親の恩受けたお札を子に返す
 貧しさを受け継ぎいつも石を蹴る
 サラダもパンも苦手な父の飯茶碗
 男だろ峠越したら振り向かぬ

和枝 一瑠 圭一郎 螢 はお 希久代 重忠 静生 睦子 多哥由 よしえ 雅女 裕子 一夫 節子 完司 季芳 かつみ 芳光 節子 和歌子 一京 大魚 公乃 孝男

川柳藤井寺

高田美代子報

人生の歩みとなった本がある

自費出版私の歴史本になる
 馬鹿になる本がとつても面白い
 図書館の本辺聖子はいつも留守
 少年に大志抱かせた文庫本
 傍線を引いてそのままだ読まぬ本
 会うたびにマンガの本を持っていて
 のらくろを回し読みした日の記憶
 絵本から貰った知恵も数に入れ
 途中まで読んだカフカを紙魚が食い
 激流を越した男の太い眉
 流れついた終着駅に妻とよく
 飄飄と雲と流れて山頭火
 いくつもの劫を流して生きのびる
 このピンチ越せば流れが変わるだろ
 父母を両手にジャンプ水溜り
 水たまりジャンプのうまい男の子
 近鉄がヨッシャ大阪ジャンプする
 ジャンプして見事に滝を登る鯉
 大空と握手したくてもジャンプする
 亀だつてジャンプもしたい秋日和
 ジャンプする老母にははらさせられる
 もうジャンプする事もない無位無冠
 父の背を越えるジャンプがまだ出来ず
 ライバルのジャンプ見ながら眠れない
 ジャンプ傘人を裏切る事がある
 もう一度ジャンプする気で買った辞書
 約束はないが逢えそう終列車
 絵本から夢が広がる子は詩人
 美容院ねむるつもりはないのだが

かすみ 美代子 正和 一樹 いさお キミ子 雅枝 絹歌 一筒 龍一 みよ子 大八 重人 志洋 よしえ 春蘭 史郎 花梢 喜代子 アキ 鐘造 悦子 一知 扶美代 六點 敦子 婦美枝 瑠美子

富柳会

池

森子報

月末になるといつもの綱渡り
結び目をゆるめて温度差と遊ぶ
童神のつぐないだらう海の風
つぐないを求めぬ母の愛無限
滑り込みセーフで母になる明日
歳月が全てを変えた風の中
滑ったわ転んだのよとクラス会
つぐないの数だけ太くなる絆
秋灯下恋の返歌を二三つ
てのひらの月から零す故郷
青い実が熟れて一途に炎を放つ
髪梳いて月に再起を祈る母
滑って転んでやっぱりここが指定席
恩返し出来ずじまいに手を合わす
ハイハイと軽い返事にだまされる
心労の妻へお粥を煮るさんげ
写楽が消えた昨日までのしあわせ
鈴虫の骸は月の庭に埋め
滑り落ちた噂が一人歩きする
丸い心で朝のブルーに浮いている
想いみな風に託して秋桜
ぬかる道マニュアルにない転び方
立志伝苦労したとは書いてない
肩の凝る話へ打った句読点
小魚の感情線が纏れてゆく
手術台人形になって捌かれる
紙コップ役目を閉すにわか雨

和代 アキ 冬虹 けい子 和子 登子 鐘造 淳一 欣之 紅紫朗 夕子 キミエ 一夫 誠 巳代一 吞舟 潤子 扶美代 初太郎 春蘭 あかり 宏至 信子 ひろこ 萩乃 喜代子

つぐないでキツチンに立つ定年後
人の名を間違えながら秋へ入る
一日のぜんまいを巻くおみそ汁

満秋 森子 かなこ

堺川柳会

河内 月子報

今一度老人会で旗上げん
当り前そんな暮らしが有難い
祝福の拍手だ遅れないように
遅れないように雑学はげんでる
岩魚焼く炉ばた話に花が咲き
恐そつな前の車に車間距離
癒し系ロボット犬にはまつてる
前借りの夫言い訳うまくなり
遅れたのは一人暮らしの人らしい
いつ迄も老母に頼る半端な子
雨の日も遅れず義理の顔揃え
遅れても澄んだ目をして待っている
合会にいつも遅れてすみません
急がねば私の句が朽ちてゆく
早い者勝ちには何故か出遅れる
今までの浪費たたくて破産する
遅刻して一番前に座らされる
またかいな遅れる人は決つてる
老いてなお妻の舞台はキツチンに
かぶりつき好きな役者に酔うてます
一年は浪人をする腹らしい
大舞台踏んで視界が広くなり
恋人の前でシャッキリ止まらない
いい具合老人ホーム入れたよ

春蘭 日の出 扶美代 紀美女 哲平 八千代 小雪 さくら 千代 なぎさ 甚一 和香 みつき アキ 伽羅 忠敬 朋月 柳宏子 りつえ 冬虹 かりん 五月 洞庵

第51回西大寺会陽川柳大会

コーヒーをお代りしてもまだ来ない
裏方も楽日のはねた杯上げる
いい湯だな露天で交わす般若湯
いい街だ路面電車が走つてる
毎日わたしの生きて行く舞台
前ちゃんと同じで聴いたがみな忘れ

梓 つづや さだを 泰子 天笑 月子

とき 平成14年2月24日(日)
開場9時半 投句締切午前11時半
西大寺ふれあいセンター
岡山市西大寺中2-1-16-33
TEL086-9444-1800

会費 2000円(作品発表誌・昼食呈)
各題2句読み込み可・欠席投句拝辞
各題特選3句・佳句5句呈賞

兼題

- 「馬」石田柁馬選(京都市)
 - 「透ける」中川一選(箕面市)
 - 「疼く」貞岡信太郎選(久米南町)
 - 「土壇場」前田一石選(玉野市)
 - 「分ける」山下美美選(高松市)
 - 「火」西条真紀選(岡山市)
 - 「花」情野千里選(姫路市)
- 「席題」当日発表 江尻容子選(矢掛町)
前後祭 平成14年2月23日午後6時・午後8時
ところ 西大寺ランドホテル 会費5000円
申込先・連絡先 西大寺川柳社 山口流木
TEL086-9448-3463
主催 西大寺川柳社



追悼

池田寿美子さん

板東倫子

池田寿美子さん御逝去の報を受けたのは秋色深まる文化の日でした。驚きました。

九月二十四日、橘高薫風名誉主幹の叙勲祝賀会には、リーガロイヤルホテルで久しぶりにお目にかかり、城北句会でまたお会いしましょう、とお別れしたのが最後になってしまいました。

穏やかで上品なお人柄そのままの句風は、西宮北口川柳会の創始者と何うお母様の、朝山千代子さんゆずりの秀吟と感嘆したものでした。

お住いが遠方だったのと、後年は体調を崩されたとかで、城北川柳会へのご出席は叶わぬながらも、毎月の投句は続けて下さいました。時たま私たちが吟行で和歌山の加太へ出掛けたり、岸和田市句会に参加した時などは、近距離だからとお顔を見せて下さる義理堅いお方でした。

特に前会長長川口弘生先生の十三回忌追悼会は、是非にと参加して下さいました。当日の句報から一句抜粋

風の音を聴きながら知る生きる道

享年八十一歳とは信じられない知的な美しい方でした。神戸の名門校で学ばれ、海外生活も経験されたとか。クラシック音楽や美術鑑賞など、多彩な趣味をお持ちでした。たまたま私と船の話になった時も、外国旅行が大好きなのは、船舶会社へ長らく勤務したからだ、と仰言つてとても楽しそうでした。また突然御主人を亡くされた方に「泣けるのは幸せですよ。私は幼児を抱えて泣いて居られなかった。貴女は泣きたいだけお泣きなさい。」と慰めて下さったそうです。

「漸く春風のささやきが聞こえそうです。

マイペースに馴れるまではつぼつと

日々を大切に過したく思っています。」
美しいかな文字で、詩のような言葉の転居通知をいただいたのが三月でした。涙がこぼれます。

城北川柳句集第七集が出来上がりました。寿美子さんの珠玉の句が、遺作となっております。一目お見せしたかったと一同の思いです。

「思い出すままに」

花吹雪 中に亡夫あり夢に逢う

待つと言う生きるささやきをあすに抱く

いつ死ぬとわかればブラン立直す

モンタンを想う枯葉が今日も舞う

お別れ会 真つ赤なバラに「田園」聴く

亡き御主人の追憶の中で、死生観を確立しシャンソンを愛した寿美子さんは、お別れ会にはバラに囲まれ、ベートーベンの「田園」に送られる事が夢だったのですね。

葬儀は音楽葬形式で、花一杯に飾られた御遺影がとても美しかったと伺っています。

天国でゆつくり川柳をお楽しみください。

そして城北川柳会をお見守り下さい。合掌
美しきひと美しく幕閉じる 倫子

来さまい 下北

木本朱夏

伊丹から九十分のフライトで青森に到着。

むつ市在住の友人、佐々木さんが迎えてくれる。彼女とは昨年十二月、楓楽さん、楓楽さんの妹の榎本宏子さん（川柳塔の誌友でもある）と、ポルトガルを旅して以来の再会である。

3泊4日の旅程は佐々木さんに一任、まず三内丸山遺跡へ。江戸時代から知られている有名な縄文時代前期の遺跡である。特に平成六年七月に大型掘立柱建物跡が発見され、日本最大の縄文集落跡として貴重な遺跡である。

以前「川柳塔みちのく」の大会に参加した折りに一度案内して頂いているが、最後までとっていいような厳しい北の大地に、縄文の人々ほどのような夢を見、幸せを育くんだのであろうか。縄文人の鼓動が聞こえてきそうで、何度訪れても胸が熱く切くなる。

続いて彼女が案内してくれたのは恐山で

あった。恐山と聞けばイタコの口寄せ・地獄極楽・水子塚・六地藏・さいの河原・たちこめる硫黄の匂い……。連想するものはおどろおどろしいが、秋の大祭を終えた恐山にはイタコの姿はなく、観光客の影もまばらである。

無機質な灰色の裏寂しい大地に鴉が群れ、無気味に立ち並ぶ卒塔婆、赤い風車がキユルキユルと鳴っている。しかし、アングルを変えれば明るい光景にも見える。

秋晴れのカーンとした空気のせいだとしても、体に纏い着く陰湿な雰囲気がない、碧玉を沈めたような宇曽利湖の静かなたたずまいと白く輝く砂浜は、極楽ののどけさも斯くやと思わせるものがある。

場違いな朱塗りの華やかな太鼓橋があり、この橋の下を流れているのが三途の川。霊界と俗界の境といわれ、この橋を渡ると極楽へ行けるらしいが、何時かは渡る日の楽しみに私たちは渡るのを止めた。

地獄からわらわらと来て鴉啼く 朱夏
翌日、偶然川内町で時実新子の句碑を見た。

われは日の子きみは月の子顔あげよ 新子
佐々木さんの愛猫ゴン太も乗せて、四輪駆動車は本州最北端の大間崎へ。NHK朝のドラマ「わたしの青空」の舞台であり、マグロの一本釣りでも有名である。佐々木さんの知人の民宿でお世話になる。帆立貝の刺身・帆立貝の味噌焼・アワビ・蟹・ホ

ヤ・サザエその他の珍味に幸せいっぱい晩餐となった。

ここで私たちは箸使いのとても美しい外国人女性と出遇った。2週間の休暇を取って東北地方を一人旅しているというドイツ人で、十年前に広島大学に留学、流暢に日本語を話すことが出来る。明日は白神山地へ行く私たちに彼女（グロージェ）も合流するようになった。「グローちゃんと呼んで下さい。36歳です」と自己紹介した彼女はベルリンのジェットロに勤め、三島由紀夫より安部公房が良いと言い、村上春樹や吉本ばななの愛読者であった。また古典文学にも造詣が深く、彼女の口から「昔男ありけり」と伊勢物語の一節が飛び出し、私たちをびっくりさせた。

結局彼女とは1泊2日を共にしたが、「袖触り合うも多生の縁」を思う。地球上に60億の人間がいて、一生の間にとだけの人と出会うだろうか。佐々木さんのお陰で猫を連れて5人の珍妙で楽しい一期一会であった。

青森は日本一の多い県である。りんごはいうに及ばず、ながいも・にんにくの生産量も日本一。その上にホスピタリティー（温かくもてなす誠意）も日本一であることをつけ加えておきたい。なお「来さまい」とは「お越し下さい」という下北地方の方言である。

柳界展望

満天の星と話をするゆとり
 ★出雲総合芸術文化祭川柳大会は、11月11日75名の出席により出雲市民会館で行われた。当日の本社関係受賞者は次のとおり。

〈出雲市教育長賞〉

カラス鳴くお寺参りがし
 たくなる 岸 桂子

〈出雲市川柳連盟賞〉

見えるもの見えないもの
 がある隣 原 章峰

わたくしの真正面から日
 が暮れる 城 多喜

ぶらぶらの受け皿がある
 午後の椅子 城 多喜

★大阪文化祭川柳大会は11
 月11日北区民センターで

136名の出席により開催。
 左記は本社同人の秀句

リボン解くバツとあなた
 の顔がある 西口いわゑ

大根の白さが少し憎くな
 る 中井 アキ

白い粉見るとドキリとし
 てしまう 西口いわゑ

▽住所変更△

生きてゆく鍵はやっぱり
 愛だろ 出口セツ子

★第43回豊中市民川柳大会
 は11月23日(祝)豊中央公民

館に於いて、106名の参加
 により開催された。本社同

人の秀句は次の通り。
 明日へ明日へとエネルギー

湧く朝の駅 出口セツ子

★川柳塔みちのくは、主幹
 に齊藤為、副主幹に小寺花

峰を選出、波多野五葉庵前
 主幹は顧問に就任した。

▽出版△
 ■『高杉鬼遊川柳句集』

(川柳塔社刊・橋高薫風序
 文・B6判上製254頁) 頒

価二千円
 ■『私の百句 パートII』

(藤井正雄著・朝日なにな
 柳壇入選句・B6判72頁)

頒価千円
 ■『城北川柳第七集・二〇

〇一年合同句集』(城北川
 柳会・A5判105頁)

【朝日なにな柳壇】第11集
 平成11年1月から13年12月ま
 の、朝日新聞掲載分です。今回から
 予約制にします。(FAX申込可)
 締切り 1月15日・2月中旬発刊予定
 代金 1500円(送料1冊210円・2冊310円)
 第〇集・〇冊・住所・氏名・電話
 番号を明記
 〒663-8152 西宮市甲子園町8-2-202
 長谷川 淳
 TEL・FAX 0798-41-8646
 ※既刊第9集、第10集もあります。

市・川柳若葉の会会長)は、
 11月26日肺炎のため82歳で
 逝去。11月30日ベルコにて
 葬儀が行われた。
 ▼訂正とお詫び▲
 ■11月号P57下段20行
 目、だんぢり↓だんじり
 P57下段21行目、半子↓判
 子 P40上段8行目の「新
 聞の広告で読む週刊誌を、
 本人の申し出により削除
 ■12月号P100上段9行
 目、風評↓風詠
 ▼常任理事会△
 ■一月七日(月)12時〜アウイ
 ーナ大阪206号室

秋季 時計台ビール川柳入選句発表

「まつり」

川柳塔社
名誉主幹

橋 高 薫 風 監修

ふる里のまつり太鼓は胸で鳴る
 農業を継ごうまつりが呼んで
 秋祭りちよっと義兄を借りて出る
 サブちゃんのまつりの唄が好きやねん
 好きな方気付いておくれ星祭り
 いもかばちや北の祭りに来て肥り
 ご無沙汰の顔も見せてる村まつり
 刈り終えて妻と連れ立立つ秋まつり
 パレードへまつり出張してくれる
 足軽になった社長が武者の列
 重箱に田舎を詰めてある祭り
 路地裏が最初に酔ってているまつり
 原色がうねるねぶたのエネルギ
 祭り囃子に小さな浦が沸いている
 犬までがはしゃぐ小さな村祭り
 過疎の村祭り囃子が盛り上がる
 ふる里のまつり子供にしてくれる
 嫁ぐ日も間近か母娘のひなまつり
 秋深し多喜二に出会おう古書まつり
 まつり笛もう故郷の異邦人

準特選

人生は祭り今夜も杯を上げ
 流された雲もまつりを追っかける

特選

日本中おまつりにしてご誕生

横 奈 青	西 美和子
浜 良 森	梶谷八千代
原田 鍛 北野	山口喜代美
順子 千 里	高田美代子
	若月 葉
	小林 棗
	鶴田 遠野
	清水 昭子
	内藤 光枝
	高橋 志江
	中 博司
	浅川和多留
	石井 和子
	中居 善信
	佐竹 観光
	羽田 桐柳
	柴本 太郎
	中川 久邦
	濱田 良知
	岡口 修

冬季「温 泉」14年1月末/切

日本中
おまつり
ご誕生
囃子

●応募要領

官製ハガキに1句
 (何枚でも可)
 郵便番号・住所・氏名
 年齢・電話番号を記載
 の上、時計台ビール宛
 お送り下さい

●川柳応募者に限り2割引!!

1ケース¥3,000を2,400円
 応募はがきの表面でご注文下さい

〒060-0051 札幌市中央区南一条東7丁目15-16



時計台ビール株式会社

HP <http://www.tokeidaibeer.co.jp/>
 E-mail info@tokeidaibeer.co.jp/



明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子 川柳塔きゃらぼく

木村春枝	木村富美子	門脇晶子	鹿島蘭	大塚恵子	猪森スミエ	石中時子	池尾保子	足立由美子	青戸田鶴
野坂なみ	中野弘子	中井ゆき	田中亚弥	鷺見正子	白根ふみ	塩谷八重子	澤田千春	さえきやえ	小村てい子
	矢野満子	八木千代	森脇麗	三好寿々子	光井玲子	政岡日枝子	二岡初枝	福代天雀	林瑞枝

新年おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南3分) プレラにしのみや4F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

川島諷云児	亀岡哲子	門谷たず子	小熊江美	奥山美智子	奥田みつ子	石原靖巳	井上松煙	浅野房子	秋元てる	阿萬萬的	正本水客	黒川紫香
富山ルイ子	都倉求芽	田辺鹿太	田中正坊	住谷石舟	坂上高栄	小林周信	小池しげお	黒田能子	久保田千代	木村貴代子	菊池トミエ	神原文
		山本義子	松下比ろ志	牧渕富喜子	古川奮水	藤村メ女	春城武庫坊	春城年代	長谷川春蘭	西田柳宏子	西口いわゑ	長浜澄子

あけましておめでとうございます

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小島蘭幸方

会 監 会
計 査 長

小島蘭幸
時 廣 一 路
岩 本 笑 子
森 井 菁 居
岡 本 清 水
古 谷 節 夫
藤 解 静 風
古 田 太 虚
三 宅 不 朽
山 内 房 子

ほか会員一同

謹賀新年

会 柳 川 塚

河内天笑 泉谷喜代子 榎本日の出 榎本舞夢 太田扶美代 柿花紀美女 梶本哲平 河内月子 神原昭文 楠田八千代 小西小雪 齐藤さくら 志田千代 高田美代子

津守なぎさ 寺井東雲 寺田甚一 徳山みつこ 富山ルイ子 中井アキ 中川楓 中崎深雪 中澤伽羅 中村健吾 中村忠敬 西内朋月 西田柳宏子 西村りつえ 長谷川彰

長谷川春蘭 樋口冬虹 藤井一二三 藤田泰子 松尾和香 宮本かりん 村上玄也 村田巳代一 矢倉五月 八十田洞庵 矢野梓 山本半錢 和田つづや 渡辺さだを

明けましておめでとうございます

城北川柳会

会長 吐田 公一

栗山	喜多	岸野	川端	川久保	神夏磯	叶岡	鍛原	太田	大川	浦田	上田	石塚	安達
チサ子	佐津乃	あやめ	一歩	睦子	典子	史風	千里	とし子	道子	綏子	登美子	順三	はじめ

野村	野村	中田	都倉	寺井	津村	高橋	高杉	鈴木	鈴木	渋谷	坂上	小糸	小泉
美代子	八重	あい子	求芽	東雲	志華子	一枝	千歩	政子	トヨ子	博遊	高栄	昭子	ひさ乃

吐田	森杉	吉岡	丸岡	真鍋	松本	松岡	松岡	町田	本間	板東	長谷川	橋村	坊農
公一	秀夫	修	静枝	藤子	ただし	千恵子	久留美	達子	満津子	倫子	春蘭	容子	柳弘

明けましておめでとうございます

川柳塔わかやま吟社

										顧 問	副 主 幹	主 幹		
塩	澤	坂	坂	小	桑	柿	小	野	川	川	牛			
谷	田	部	口	山	原	花	倉	村	上	上	尾			
佐	和	紀	公	太	道	紀	ア	太	大	大	緑			
代	重	久	子	一	夫	美	サ	茂	輪	輪	良			
子		子				女		津						
中	中	中	中	堂	富	天	寺	垂	玉	谷	谷	田	杉	芝
村	島	後	井	上	上	滿	田	井	井	口		中	山	
君	正	清	栄	泰	光	三	裕	千	豊	信		輝	精	あ
枝	博	史	美	子	代	千	美	寿	太	子	和	子	子	つ
						代		子						む
ほ	和	横	山	宮	宮	宮	松	松	堀	堀	細	福	福	橋
か	田	垣	田	本	園	口	原	尾	端		川	本	田	爪
会	良	忠	高	三	射	克	寿	和	三	富	稚	英	和	佐
員	一	翁	夫	喜	月	子	子	香	男	美	代	子	子	一
一				夫	芳					子				
同														

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良 方

TEL 073-446-2855

献 壽

平成 14 年

川柳塔鹿野みか月

プレ夢フェスタとっとり文芸祭川柳大会&県民文化祭主催事業
第25回鳥取県川柳大会&第22回みか月記念大会は皆さんのお陰で
盛会になりました。ありがとうございました。

本年は第17回国民文化祭とっとり'02文芸祭川柳大会の開催地と
して皆さんのご支援こころよりお待ち申しています。

顧問	小倉利男	石尾かつ乃	吉田孔美子
相談役	土橋 螢	乾 喜与志	鹿児島節子
会長	森山盛桜	大角幸代	加藤 公子
副会長	中原諷人	太田幸枝	加藤 永子
会計	中原みさ子	黒田くに子	竹森富久江
事務局	徳岡本丸	田村きみ子	田中きみゑ
監査役	大角正道	津村八重子	福西茶子
	土橋はるお	土橋睦子	山岡久枝
	山根 茂	中原汲香	吉田弘子
		西川和子	谷口百合子
		国森武子	ほか会員一同

※事務所：〒689-0405 鳥取県・鹿野町鹿野1279 中原 諷 人 方
FAX・電話 (0857) 84-2100

あけましておめでどう御座います

香川県大川郡白鳥町白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長 木村 あきら 角尾 いさむ

副会長 成重 放任 辻上 よしみ

会計 川崎 ひかり 甚古 正雪

同人 工藤 吟笑 岩倉 文仙

池内 かおり 向山 治延

堤 くに子 山崎 はつ恵

神保 坊太郎 松村 輝夫

滝井 勝 赤沢 貞月

中塚 寿々女 原 賢

伊勢 八重子 田中 奴風

あけましておめでどうございます

翠 洋 会

橋高 薫風

高杉 千歩

穴吹 尚士

田中 正坊

石原 靖巳

谷口 義

居谷 真理子

津村 志華子

井上 照子

寺井 東雲

指宿 千枝子

天正 千梢

梅田 宣司

中澤 伽羅

榎本 日の出

長浜 澄子

榎本 舞夢

中村 叡子

太田 昭

西出 楓楽

岡本 久峰

長谷川 会美

奥田 みつ子

藤井 正雄

黒田 真砂

古川 喜美子

古今堂 蕉子

安永 春

児玉 蛙

山本 希久子

小林 周信

米田 恭昌

柴田 英壬子

渡辺 さだを

清水 絹子

渡部 さと美

住谷 石舟

渡辺 富子

時計台の鐘の音を

心に響くおいしさにして

冬期「温泉」 〆切 14年1月末

時計台ビール株式会社

〒
060-
0051

札幌市中央区南一条東七丁目15番16

謹賀新年

横浜あおば川柳会

菱田 満秋	日下部美柳士	三村八重子
秋元 和可	後藤 早智	宮崎 二郎
芦田 鈴美	近藤 道子	保田 絹子
生坂サト子	鈴江 純子	八田 敏
石川ただお	平 達也	山下 省子
石原 三郎	平 のぶ子	山梨 雅子
和泉あかり	田中 笑子	山本為佐子
伊藤 ふみ	土田今日子	吉田 裕峰
巖田かず枝	長島亜希子	渡辺千恵子
小野句多留	福島かづ子	青柳おぐり
金森 徳三	福田由美子	安藤 紀楽
川島 良子	布山 嘉信	沢田 和子
菊地 政勝	松土十三子	荒井 広和
北沢 街湖	水木 征彦	山廣あらた
清水 潮華		

あけましておめでとうございます

いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町284

吉岡 きみえ 方

TEL 0853-22-1068

謹
賀
新
年

川柳塔 唐津支部

宗	山	市	井	田
	口	丸	上	口
水	高	晴	勝	虹
笑	明	翠	視	汀
仁	坂	樋	岩	久
部	本	口	崎	保
四	兵	輝		正
郎	八	夫	實	劍
	郎			

お
知
ら
せ

平成14年11月2日

川柳塔唐津支部

20周年記念句会

あけましてお芽出度う御座います

川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々

外会員一同

事務局

鳥取市二階町三一〇二

植田 一京方

例会 毎月第四日曜日 十三時

JR鳥取駅構内(シャミネ会議室)

〒680-0033

謹賀新年

NHK川柳教室

- | | | |
|--------|--------|-------|
| 橋高 薫風 | 志田 千代 | 大崎 侑子 |
| 北畑 金治 | 小林 周信 | 野島庄三郎 |
| 藤井 正雄 | 野下之男 | 安達 忠央 |
| 黒田 能子 | 井上 松煙 | 岩屋 美明 |
| 指宿千枝子 | 緒方美津子 | 福田 満州 |
| 海老池 洋 | 井上 信子 | 南原 正和 |
| 古川 喜美子 | 三木 愛子 | 山田 耕治 |
| 三品 征子 | 谷 鈴子 | 莊司 弘之 |
| 鴨谷 瑠美子 | 古今堂 蕉子 | 池上 清治 |
| 前 たもつ | 矢倉 五月 | |
| 田中 節子 | 江見 見清 | |

あけましておめでとうございます

かわはら川柳会

山尾一薫 漆原登生 漆原余吏子 西田静子 国本悦子 谷口寿子 岩田輪多朗 谷口泰良 前田聰 上田俊路

あけましておめでとうございます

鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木公弘
会 員 一 同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方春木圭一郎
TEL 0857-24-2834

あけましておめでとうございます

サークル 檸 檬

吉田あずき 山本義子 山本希久子 西村哲夫 西出楓楽 西口いわゑ 長浜澄子 鶴田遠野 田中正坊 嵯峨根保子 小林一夫 片岡智恵子 奥田みつ子 石原靖巳 浅野房子 橘高薫風

あけましておめでとうございます

朝日カルチャー・はじめての川柳教室

講座日 1/8・1/22・2/5・2/19・3/5・3/19

申込み 06—6222—5222

寿 春

川柳 さ さ や ま

会 員 一 同

あけましておめでとうございます

京 都 塔 の 会

会 員 一 同

明けましておめでとうございます

もくせい川柳会

宮三古藤西辻玉田住小小黒岸河岡江石相安橘
田宅川村田川置中谷林池川田井本見原田藤高
禄つえ子喜美子メ柳宏子慶重正石周しげお紫知香子庸吉太郎見靖巳子寿美子薫風
骨

毎月第3月曜日に定例会を開いております

あけましておめでとうございます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

新年おめでとうございます

富奥松竹藤都川小阿西黒正
山山川内村倉島池萬田川本
ルイ子美智子芳花代子メ求諷云児しげお萬柳宏子紫水
子子子子子女芽児お的子香客

春 寺 井 藤 柳 川 賀

坂 福 中 大 西 若 増 吉 山 太 川 楠 鴨 中 高
 他 本 田 井 橋 村 松 井 田 本 田 端 谷 島 田
 一 和 悦 ア 鐘 榮 雅 よし 喜 恒 扶 六 昭 瑠 志 美
 同 樹 子 キ 造 一 枝 え 代 雄 美 点 子 美 洋 代
 子

あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

橋 高 薫 風
 井 上 直 次
 田 辺 正 三 郎
 高 嶋 正 三 郎
 宮 田 祿 骨 勝
 湯 浅 馬 洗
 月 原 方 郎
 富 永 敏 子
 岡 本 吉 太 郎
 前 田 昭 子
 古 川 喜 美 子
 嵯 峨 根 保 子
 藤 原 桂 子
 田 中 蛭 柳
 松 本 た だ し
 池 田 善 守
 栗 田 久 子
 板 山 ま み 子
 出 口 セ ッ 子
 唐 住 セ ッ 子
 江 見 見 子
 寺 井 柳 童
 ほ か 会 員 一 同

定例会会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛭池公民館

川 崎 友 甫
 服 部 春 子
 平 川 幸 枝
 松 葉 君 江
 田 中 ト シ エ
 二 瓶 道 子
 初 山 隆 盛
 生 嶋 ま す み
 吉 村 一 風
 村 上 ミ ッ 子
 神 原 ま さ と
 中 島 春 江
 山 本 宏 至
 八 倉 知 佐 子
 乾 美 代 子
 篠 原 い つ ふ み
 井 尻 民
 砂 田 八 寿 子
 与 田 明
 坂 本 奈 良 司
 藤 本 一 道
 太 田 恭 一
 江 波 正 純
 増 田 道 子
 馬 場 宏
 杉 本 晴 美
 脇 俊 子

川柳クラブ
 わたの花

あけまして
 おめでとうございます

謹賀新年

尼崎川柳協会加盟

尼崎
いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後一時

サンシビック尼崎三階
(阪神尼崎駅西南三分)

尼崎
尾浜川柳会

例会 毎月第二火曜日午後一時半

尼崎市尾浜二丁目五十八
尾浜公民館

(阪急武庫之荘北側③乗り場
市バス④尾浜二丁目下車)

両句会共各地句会案内に

掲載しています

新年おめでとうございます

川 柳 塔 な ら

宮口 笛生

中原 比呂志

米田 恭昌

坊農 柳弘

大内 朝子

吉川 寿美

宮西 弥生

清水 絹子

会員一同

あけましておめでとうございます

東大阪市川柳同好会

会 長 片 岡 湖 風

謹賀新年 2002

今年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます

川柳塔おおとり

会長 小林 由多香
他会員一同

〒680-0805 鳥取市相生町 1-110
TEL. 0857-23-1170

あけましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会員一同

あけましておめでとうございます

川柳若葉の会

中	宮	吉	山	宮	宮	古	長	辻	黒	椎	橘
井	崎	田	内	崎	本	川	谷	川	田	江	高
ア	弘	あ	香	シ	欣	喜	会	慶	能	清	薫
キ	直	ず	住	マ	史	美	美	子	子	芳	風
		き		子	子	子					

季刊

川柳展望

天根夢草編集

☆一度お読み下さい

〈申込先〉

〒563-0102

大阪府豊能町ときわ台

3丁目4の17

川柳展望社

TEL 〇七二七―三八―一八四五
FAX 〇七二七―三八―六七七〇

謹賀新年

岸和田川柳会

岩佐ダン吉	原 さよ子
島崎富志子	田口 穰一
田中 文時	寺田 甚一
井伊 東吉	村垣鹿太郎
不破 仁緑	仲谷 弘子
長谷川呂万	善野 盛之
堂免 路子	加藤 基
原 苑子	宮野美津江
土橋 房枝	藪野ケイ子
柿花 昭二	徳庄美智子
高須賀金太	芳地 狸村

謹賀新年

高槻川柳サークル

卯の花

川島諷云児	執行 稲子
生田 義一	神野 節子
梅原のり子	左右田泰雄
江原 秀夫	孝久 彰一
笠嶋恵美子	津田スミ子
上砂 真笑	西谷治三郎
國本 宜弘	古谷 浩
齋藤とおる	藤村千鶴子
佐藤たい子	峯村 勲弘

あけましておめでとうございます

大阪川柳人クラブ

会 長 磯 野 いさむ

副会長 橘 高 薫 風

幹事長 川 島 諷云児

謹 賀 新 年

川柳塔まつえ吟社

同 人 一 同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方

電話 0852-24-5450

あけましておめでとうございます

岩美川柳会

会 員 一 同

〒681-0003 鳥取県岩美郡岩美町浦富1504

TEL 0857-72-1388

大 阪 川 柳 の 会

句 会—毎偶数月上旬・サンケイビル本館3階 322号室
 事務局 〒532-0025 大阪市新北野1-3-4-706 本田智彦 方
 TEL (06) 6303-7297

安 川	大阪川柳人クラブ	米 吉	安 本	濱 内	津 砂	坂 後	岡 足	世話人 磯野 いさむ	代 表
井 島		澤 村	井 田	田 藤	木 本	藤 立	良 淑		
英 諷		俊 雅	英 智	良 光	一 啓	和 正	良 淑		
華 云児		夫 文	華 彦	知 枝	江 三	樹 一	三 子		

新春のおよろこび申し上げます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

東大阪エイシスカルチャー

松 山	安 堀	星 西	中 飛	鈴 坂	古 熊	國 吉	神 笠	内 伊	井 生	河	
井 井	本 永	野 川	岡 永	木 本	手 川	代 見	川 原	井 海	藤 尻	嶋 内	
敏 秀	宏 富	き 更	妙 妙	ふ り	ト 夏	菜 蘭	寿 ま	欣 綾	博 ま	天	
子 夫	至 春	重 き	ら り	紗 子	こ 子	代 光	月 香	美 さ	と 子	乃 仁	民 笑

明けてまして

おめでとうございます

はびきの市民川柳会

山	森	森	永	三	西	徳	塩	清	酒	河	榎	安
他	本	田	下	田	好	村	山	満	水	井	井	本
一	た	四	一	章	専	り	み	利	一	庸	吐	泰
同	け	三	知	司	平	え	こ	敏	武	壺	佑	来
	し	郎										子

謹賀新年

西宮ローズ川柳会

吉	山	山	春	春	西	長	那	久	木	菊	亀	小	奥	岩	飯	秋	橘
田	本	崎	城	城	口	浜	賀	保	村	池	岡	倉	田	倉	西	元	高
笑	義	君	年	武	い	澄	島	ま	貴	ト	哲	み	み	キ	ミ	て	薫
女	子	子	代	庫	わ	子	子	さ	代	ミ	子	藍	つ	ク	サ	る	風
			坊	坊	ゑ		お	お	子	エ	子		子	子	ヲ		

賀正

川柳ねがわ

会員一同

会長 山本三郎
事務局 高田博泉

あけましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主幹	齊藤 嘉
副主幹	小寺 花峯
相談役	工藤 甲吉
顧問	森中恵美子
理事	波多野五楽庵
	岩渕 黙人
	櫻庭 順風
	福士 慕情
	佐治千加子
	浅田 隆樹
	肥後和香子
	田中 叶
監事	相馬 銀波
	小枝ふさゑ
会計	相馬 一花
	ほか同人一同

明けましておめでとうございます

くろぼこ川柳会

平成14年 元 旦

会長 鈴木公弘

会員一同

謹賀新年

打吹川柳会

会員一同

あけましておめでとうございます

長 柳 会

河内長野市 千代田公民館内

毎月 第2・第4金曜日

午後1時から

高野山合祀法要

於・高野山大霊園

晩秋の彩濃い十一月十七日(土)の空は澄み渡っていた。例年に比べ暖かい日和である。

霊山、霊地の紅葉は一段と鮮やか、御遺族を含む総勢34名の参列者をやさしい日射しが迎えてくれた。難波発9時50分の特急こうや5号には21名が乗車、ケーブル、バスを乗り継いで奥の院に着くと、既に車で到着の天笑主幹、月子さんが待ち受けておられる。直行された方々と合流して、昼食の後、1時から合祀法要は川柳塔碑の前でおごそかにとり行われた。澄み切った空気の中に僧の読経の音が響き、順次焼香の厳粛なるひとときを過ごす。過去帳に新合祀者の名が刻まれたことを確認して、御遺族また参列者の写真を撮って合祀祭は無事終了となった。

あとは三々五々、奥の院御廟へと足をのばす人、土産ものを買う人等、自由行動となる。大阪から乗車のメンバーは、往路と同じく、特急にて17時10分難波に着く。

新合祀者は、北勝美、高杉鬼遊、大坂形水、金井文秋、乾隆風、山地マツエ、村上剛治、東野大八、井上白峰、和田維久子の10名である。

(希)



天笑主幹とご遺族の方々

句会名	日時と題	会場と投句先
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 遊・古代・天・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市南度町2-19-515 山本義子
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)正午から 話題・あれから・島 男一匹・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城北 川柳会	19日(土)午後1時から 芽・弾む・プラン・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳会 梨花	19日(土)午後1時から 国・凝る・自称・つるつる 雑詠	鳥取市勤労者総合福祉センター1F会議室(鳥取駅南) 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸和田 川柳会	19日(土)午後1時半から 通知・定期・道具・流れ	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳 ねやがわ	20日(日)午前11時から 拝む・決意・にぎやか	寝屋川市民会館 京阪寝屋川駅東口から市民会館前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半から おしゃれ・可憐・鏡・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十洞洞庵
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から アイドル・馬車・うとい 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市烏江町1-3-5-801 田中正坊
南大阪 川柳会	23日(水)午後6時から 人気・惨・ウルトラ・息吹	王造老人憩いの家 JR環状線王造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前10時から アリバイ・変わる・ぎっしり 律儀	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	26日(土)午後6時から 弱い・まさか・背中・恩	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民会 川柳会	27日(日)午後1時から シート・挨拶・しんみり 「踏ん張る」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	27日(日)午後1時から 芯・気にするな・テロ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都 塔の会	28日(月)午後1時から 餅・まんべん・余白	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

1 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	4日(金)午後1時から 餅・開く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 な ら	4日(金)午後1時から 招く・鞆・友情	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
倉 吉 川 柳 会	5日(土)午後1時から メール・富士・開く	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐津支部	7日(月)午後1時半から だけ・乱す・くつした	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川 柳 同好会	8日(火)午後1時から 土俵・継ぐ・ゆっくり	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	8日(火)午後1時半から 出番・栄える・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑨番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	10日(木)午後1時から おいしい(共選)・待つ ちから(折句)	堺総合福祉会館 2F 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
富 柳 会	12日(土)午後1時から 朝・飾る・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川 柳 塔 打 吹	12日(土)午後1時から シーン・王者・響く	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	12日(土)午後1時半から 笑う・希望・馬	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川 柳 塔 みちのく	12日(土)午後4時から 計算・深い・おしゃれ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川 柳 会	13日(日)午後1時から トップ・図る・ぎっしり・陶酔	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	13日(日)午後1時から 一・吉報・楽しい・ハッピー	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 塔 みぞくち	14日(月)午前10時半から 午(馬)・正月一切・雑詠	神奈備会館 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

編集後記

☆新世紀」年目、同人・誌友の皆様には、今年も「川柳塔」をよろしくお願い申し上げます。

☆今月号から東野大八先生の「麻生路郎物語」の、再掲載を始めた。タイトル横にあるように、これは昭和50年1月号から31回、本誌に連載されたものである。

☆今から約25年前の力作は、全くひよんなことから知るところとなった。12月号の校正の時、正坊さんの「秋灯下 読みつく路郎物語」という句があったのが発端である。字や、てにをはなど疑問点は、全員で検討しているので「この路郎はおかしい」と言うことになった。

☆つまりピンときたのは、下村湖人の「次郎物語」。

念のためご本人に問い合わせると、間違いなく「麻生路郎物語」で、大いに読み応えのあるものとの返事。

☆故神谷凡九郎さん所蔵の古い「川柳塔」を、川端一歩さんが譲り受けられ、その中から見つけられたという。彼はこの物語を全てコピーし正坊さんに進呈され、「秋灯下……」の一句が生れた次第である。

☆すぐに編集部全員一致で、「路郎物語」をこのまま埋もれさすには惜しい、再掲載しようということになった。早速、八重子未亡人に手紙を書いたところ、大変喜んでいただき、ご息女の愛子さんからも丁寧なお手紙を頂戴した。

☆昭和50年といえは、大八先生は60歳頃。油の乗り切ったペンは、路郎先生を生きたきき魅らせて下さるであらう。乞うご期待！（ふ）

ひとこと

ボランテティア雑感

私は多趣味。川柳と奇術は数十年、大正琴と腹話術は数年です。所属の川柳協会から、特別養護老人ホームでの川柳教室に講師として派遣され、月一度添削や選句を担当して五年が過ぎました。車椅子の方が大半ですが、興味を持って頂くために毎回、手品を披露してから川柳を、そして最後に大正琴で馴染み深い抒情歌や童

謡を演奏、皆で合唱。「ふるさと」「赤とんぼ」では涙を流して歌って下さいます。皆さんが毎回楽しみにして下さるので、私自身も張り切って準備して行きます。

当初はボランテティアをして、皆さんを癒して差し上げるとの気持ちでしたが、今では私が癒されていると感じています。また私の生きがいになっている次第です。

（酒井勇太郎）

○おめでとうございます。お正月が来ると、一つ加齢する私にとつては、めでたくもありめでたくもなし、或はめでたさも中ぐらいいいう正月気分である。

○いつのまにか歳を重ねてしまったが、どれほどの進歩があったか、いつも繰り返す年頭の自問自答である。

○加齢をマイナス面ばかりから見ているわけではない。現実には廻りの多くのす

てきな先輩達にどれほど教えられるか。学ばせて頂いてい

明にと思うが、ともすれば言葉に喰われてしまいそうで反省と試行錯誤の日がまだまだ続くであろう。

○厚く重ねられた歳月から得た経験を聞くことにより、刺戟を受けながら、おぼつかなくも私は川柳界に身を置いていく。

○93歳になる母の介護、家族のしがらみの中、今年も編集部の一員として最低限自分に与えられた仕事だけはきちんとやるつもりです。のでよろしくお願ひしませう。

○作句の目標は、理想高く命ある句を目指す。才能のない私には努力するしか道はない。身近な日常を、平

きよろきよるとしんがりを行く駄馬である（希）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（3月号）」

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

3月号発表(1月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑 選
水煙抄(8句)	板尾岳人 選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵 選
茴香の花(3句)	宮西弥生 選
課題吟 (3句)	「だ け」 夏目健一 選
「乱 す」 栗田久子 選	
「くつした」 宮尾みのり 選	
初歩教室「サービス」(3句)	吐田公一担当

4月号
課題吟「バック」「も う」
「目」
初歩教室「勝 つ」

本社1月句会

と き 1月15日(火) 午後1時・2時半締切
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「スタート」 加島由一 選
「運」 松原寿子 選
「やがて」 藤田泰子 選
「許 す」 奥田みつ子 選
「期待」 河内天笑 選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)

会費 1000円 投句料 500円

2月本社句会 6日(水)午後1時から
兼題 「テスト」「大」「勝 つ」
「心」「揃 う」

夜市川柳募集

第8回「笑 う」 大西泰世 選
ハガキに3句 1月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

お知らせ

いつもご愛読ありがとうございます。本社では『川柳塔』誌代を平成元年六月以来十二年半にわたって据え置いて参りましたが、その後の頁数増加に伴う諸経費高騰のため、平成十四年(二〇〇二年)一月号から定価を改定させていただきます。

新定価 八百円(送料別)
半年分 五千元(送料共)
一年分 九千八百円(送料共)

なお、同人費についても、同月から改定をいたしますので、ご了承をお願いします。

川柳塔社

定価 八百円(送料92円)

半年分 五千元(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇〇二年(平成十四年)一月一日発行

編集兼 発行人 河内 権治

印刷所 美研アクト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行者 川柳塔社

振替 〇〇九八〇一五・三三三六八番
電話(安) 〇六元一六九二四番

第8回全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こそつてご参加ください。

課題と選者（各題2句・連記）

「テロ」 柏原幻四郎 | 佐藤 一夫 共選
「トップ」 吉田 秀哉 | 遠藤 繁 共選
「情報」 小林由多香 | 猿田 寒坊 共選
「丸い」 井原みつ子 | 佐藤 岳俊 共選
「許す」 橋本 天吞 | 鈴木 国松 共選

第二次選者

仲川たけし 吉岡 龍城 今川 乱魚 磯野いさむ
齋藤 大雄 大木 俊秀 早川 又鳥

参加費

2000円（投句料・『平成柳多留』第8集代）
平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・

（社）日本青少年育成協会会長賞・（社）全日本川柳協会会長賞・全日本川柳誌上大会賞・秀作賞

締切

平成14年1月20日（日）
平成14年6月・第26回全日本川柳沖縄大会

発表・表彰

所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費と共に左記へ（用紙は請求ください）。

〒530-0041

大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210
FAX (06) 6352-2433

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

（日本橋川村ビル4F）

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>